

ありふれた英雄願望（挫折）で世界最強

LW

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

清水って、一度挫折したらキレイになるのでは？という清水主人公物。

ありふれヒロインは園部優花。アニメの出番は偉大です。

08よりクロスオーバー解放。クロス1グランベルム。

グランベルムより、袴田水晶が登場します。

18より新たなクロスオーバー解放。クロス2Bang Dream!
am!。

Bang Dream!より、湊友希那(Roselia)が正式登場します。

30より新規クロスオーバー解放。クロス3ToHeart。

ToHeartより、HMX-13セリオが参戦します。

目次

00	スキップモードの日々	1
01	未読の物語が始る	8
02	神の掌	14
03	固有技能	20
04	孤独の歌姫	28
05	大迷宮攻略前夜	35
06	闇の太陽	42
07	奈落の使者	49
08	レクイエム、その先へ	56
09	水晶の閨	65
10	パンドラの匣	72
11	帝国の使者	79
12	奈落の最奥	87
13	世界の真実	94
14	啓示	101
15	大迷宮強制突入	109
16	枯渴結界マギアコナトス	115
17	たとえ物語が終わらなくても	123
18	R o s e l i a I	129
19	R o s e l i a II	137
20	神山制圧作戦	145
21	破戒聖女	153
22	最弱ウサギの樹海散策	161
23	かつて家族だった兎たちへ	169

2 4	グリユーエンへの道 I	177
2 5	グリユーエンへの道 II	184
2 6	銀の階 I	191
2 7	銀の階 II	198
2 8	漆黒	204
2 9	ホルアドの勇者	212
3 0	ノイズハート	221
3 1	使徒はグリユーエンに眠る	229
3 2	H M X — 1 3 セリオ	236
3 3	アンカジの聖者	243
3 4	聖歌は神を謳わない	251
3 5	貴方の事が好きだから	259
3 6	不死王アイルマンカー I	267
3 7	不死王アイルマンカー II	274
3 8	不死王アイルマンカー III	281

00 スキップモードの日々

「……………ナニ？この展開。テンプレ？」

特別。

特別な存在。

特別な存在になりたい。

それは一度は抱く機会の有る願望だと思う。

英雄願望。

端的に言うなら、自分も物語の主人公のようになりたい！

的な？身の程知らずで経験の足りない子供特有の病気なアレだ。

自身も患った経験は有るが、既に完治している。

キツカケは何だっただろう？

如何にもモブのヤラレ役系クラスメイト相手にケンカで負けた時か？

或いは意気込んでクラス委員に立候補して、

面倒でツマラナイ。ただ時間を浪費するだけの雑用仕事を処理し

続けて、

何のイベントも無いのだと知った時だったか？

自分に特別な力は無い。

特別な運命ってヤツも無い。

自分は特別じゃ無かった。

にしてもザコい。思い返して見ると実にザコい。

某全能系未覚醒ヒロインが？

野球場に詰め駆けた観客を見て、

自分がありふれた特別では無い人間だと思い知らされるイベントより、

圧倒的にザコく、ありふれている。

が、確かに自分は特別では無い。ありふれた存在だと認識したんだ。

「いやっ！離してっっ!!」

さて、そろそろ現実世界に戻ろう。

手垢の付いた余りのテンプレを前に、ログってしまった。
視界に入った路地の先には、

名前も咄嗟に出ない程度の知った顔のクラスメイトの女子が一人。
頭の悪そうなガタイの良い男が二人。

クラスメイトの女子は既に腕をつかまれていて、

全力で拒否っているようだが、男二人は逃がす気は無い模様。

強引なナンパ。と言った展開と思われる。

因みにクラスメイトの女子を含めた三人は、

表通りからは視界に入り難い路地に居る。

辺りに人影は少なく、路地に注意を向ける者は居ないようだ。

何と言うテンプレ！と言いたくなる。

が、これはゲームでもラノベでも無い。リアルイベントだ。

リアルに御丁寧な年齢認証のタグは無い。

最悪の場合！未成年だろうと18禁ルートに強制突入だ。

これがフィクションなら？

颯爽と主人公キアラが現れて、ヒロインを救出するシーンだろう。

が、現実にそんなヤツは居ない。

当然ながら？自分もそんなテンプレ主人公では無い。

ただのインドアゲーマーだ。ありふれたモブ男子Bと言った処だ
ろう。

作中にヴォイスが入っていれば御の字だ。立ち絵が在れば奇跡の

Lv！

「……………ッ！」

「何だよ。その目は」

此処で取るべき行動は、Uターン一択だろう。

見なかつた事にして、ありふれた日常に戻るって事だ。

自分に何が出来る？無力なゲーマーだろ??

精々通報でもして、クラスメイトの無事を祈る程度だ。

飛び出して助ける！何て器じゃ無い。

だが目が合った。

「助けて」と。手を伸ばされた気がした。

ゲームのやり過ぎ。ラノベの読み過ぎ。

と自分に失望しながら前が出る。

突発イベント発生。回収を選択！ゲーマーの常識だろ？

「ありがとう。」

「……………清水。だよな？」

「そう言うオマエは……………」

ああ、園部か」

ナンパ男（仮）二人の撃破に成功。

救出したクラスメイトはやや呆然とした表情でコチラを見て、名前を呼ばれた辺りで、コチラもクラスメイトの名前を思い出した。

「……………如何にも、

今までクラスメイトの名前も忘れてました。ってリアクションじゃない？」

「使う機会の無い名前だからな、

忘れていても不都合は無いだろ？」

と言うと？恋愛ゲーで言う処の、好感度が下がったような顔をする。

がそれこそ問題無い。今は恋愛ゲーのプレイ中では無いからだ。

「……………で、清水？」

改めて聞くけど、ソレは？」

「ああ、コレか？」

園部の視線は、両手に握られた得物に向けられている。

たった今、ナンパ男（仮）二人を沈めた得物だ。

「何処にでも有るありふれた改造スタンガン二刀流だ。

防犯コーナーとかで見た事位有るだろう？」

因みに今回は？」

既に園部が囚われていたので、本当の奥の手の放射型スタンガンは使っていない。

出力リミッターを解放した改造スタンガンのみ使用した。

「ちよっ!？」

改造つて！」

「……………何だ？」

園部は、男なら素手で戦え！とでも言う奴か？」

ゲーマーには過度な期待だ。

話はソレダケか？とばかりに背を向ける。

足元にはナンパ男（仮）二人が倒れたままだ。

さっさと退散した方が良いだろう。

「本当にありがとう。」

……………意外だったけど」

それは目が合った時の事か。

当然だろう。助ける気は無かった。

だが知っていた。

俯いて目を反らしてしまえば、何事も無く安全だったかもしれない。

だがそこには、何のイベントも無い。

息をするダケの生活。

フラグを盛大に逃した共通ルートの後半的な展開だ。

手を伸ばさない者に、イベントはつかめ無い。

「……………怒った？」

「いや、園部が無事で良かった。

とでも言うシーンかな？とは思った」

だから特別でなくても、

ありふれていようとも手を伸ばそうと思う。

†

「はいはい。テンプレテンプレ」

最近ではテンプレに愛されているのだろうか？

それともこれはコモンイベントの類なのか？

何にしてもレア度が低い事に違いは無い。

「……………チツ、清水か」

人気の無い学園の階段。

昼休みが終る直前の空白。

膝を付く南雲の姿。
珍しく一人の檜山。

手は拳を作り、苛立たし気な表情。
ありふれたイジメで現場確定。

「意外だな、

ソロプレイ中か？」

レア度のついでに沸点も低い。

チャットをしながら何気無く南雲に近づくと、
檜山は当たり前の事のように殴り掛って来る。

先に前提条件の話しよう。

ハツキリ言つて、檜山はケンカが強い訳では無い。

腕力が強い訳でも、体力が有る訳でも無い。

足が速い訳でも無いし、場数を踏んでいる訳でも無いだろう。

注意すべき道具を常備している訳でも、

ましてやファンタジースキルを有している！と言う事も無いだろ
う。

檜山が持つ手札は、ただ数で押す事。物量戦だけだ。

だと言うのに、今の檜山は一人。ソロだ。

ソロは絶好の狙い目。狩られるのが常道！

これなら勝てる！己の迂闊さを呪うと良い♪

「…………不幸な事故だな？」

難無く殴り掛る檜山の攻撃を回避！

ついでに足を掛ける。

檜山は反撃を想定していなかったのだろう。

アツサリ掛かる。

そして此処は人気の無い階段の近く。

もう解つただろう？

「うわぁ、言い切った。」

しれつと言い切った！

我が希少な友の南雲が、若干非難めいた声で告げる。
被害者の身で、中々心の広いヤツだった。

何か問題が有ったのだろうか？

「大丈夫だ。問題無い」

結局檜山は入院した。全治一ヶ月らしい。

詳しい事は知らない。何も係わっていないからだ。

だが退院後、檜山は一生感謝する事になる。

この一ヶ月の入院中に、あの事件が起きたからだ。

†

「まさかのラスボス化！

愉しませてくれる」

今週も週末の愉しみを視聴し終える。

既に深夜を随分と回っているが、後悔は無い。

当初は大きな期待は無かった。

自分はRPG畑出身の現恋愛ゲー押しของเกมเมอร์だった。

物語には？恋愛要素が欲しい！と思う人種で、

女性キャラオンリーの物語の評価は渋いユーザーだ。

が、特にこの物語にはその手の破綻性は感じ無かった。

メインが女性キャラのみでも、特に問題無く視聴できる。

「……………千年の妄執。

諦観。孤独かね？」

自分には何も無い。と嘆く主人公も魅力的だった。

強キャラ仕様のヒロインは、概ね守備範囲だった。

白い巫女の敗北は意外だった。勝ち確フラグだと思っていた。

だが特筆すべきは？ラスボスさんだろう。

まさかコイツがラスボス化するとか！

たしかに他に敵は居なかった。

だから最後は？主人公とヒロインが、親友バトルをするのかと思っ

た。

だが実際は残った敵のラスボス化！

コイツ潜んでやがった！伏兵である。

だが、もしこのラスボスさんにルートが在ったら？

抱き寄せて、よしよしとしたくなるモノである。

「お疲れさま」と言うヤツだ。

怒るだろうか？泣くだろうか？出来る事なら泣かせたい。

彼女を泣かせられる奴が居れば良い。

そう言う物語じゃないだろうか？知ってる。

キレイにし過ぎるとキャラ崩壊だろうか？それも知ってる。

だがそれが許されるのが？恋愛ゲーであり、ルート分岐だと思っ
ている。

「それはジャンル違いだろうか？

ってクレームは無しの方向で頼む」

その独り言に応える者は当然居ない。

戯言だった。

01 未読の物語が始る

「おはよう。清水」

「……………ああ、おはよう」

何気無さを装って声を掛ける。

最近になって増えた行動だった。

ただの朝の挨拶だから、オカシイ事は何も無い。

そう自分に言い聞かせる。

だけど当の清水は？何も無かったかのように席に着く。

その表情に動揺の色は無い。

それは当然の事だろう。コレはただの挨拶だから。

清水は席に着くと、

他のクラスメイトと話す事も無く、カバールの付いたラノベを読み出す。

始業までまだ少し時間が有る。暇潰し。と言う事だろう。

「……………ただのラノベだ。

絵が文字になっただけで、

教師は文句を言わないし、没収も無い。実にチョロイ」

前に何を讀んでいるの？と訊いたら答えが→だった。

流石に携帯ゲームは目立つからな？とも言っていた。

清水の席は私の隣だった。

そんな事にも、私は最近まで気付いていなかった。

隣の席の男子に、興味何て無かったから。

「南雲君、おはよう！ 今日もうギリギリだね」

始業が近づくと、

少し離れた場所からいつものやり取りが聞こえて来る。

いつもギリギリで登校して来る南雲が、今日もギリギリで登校。

南雲の登校に気付くと、香織が声を掛ける。

そして教室の空気の約半分が悪くなった。「男子自重しろ」と言いたくなる。

香織はモテる娘だから？

そんな香織が、

そんな恋する乙女の顔で南雲に声を掛けるから、男子の大半が嫉妬する。

だからクラスの中で、南雲の立場は悪い。

他にも遅刻や居眠りが多く、

趣味が所謂オタクと称される類の物である事も、評価の低さを招いているけど？

一番の原因は、香織に好かれている事だと思う。

「香織、また彼の世話を焼いているのか？」

そうして香織が南雲に絡むと、今度は天之河が絡んで来る。

天之河光輝。

盛大にキラキラネームのような名前がアレだけど？ 所謂完璧超人系男子だ。

(だけど雫曰く、思い込みが激しく聞く耳を持たないタイプとの事)

当然女子の人氣も高い。

そしてその天之河が快く思っていない南雲は、大半の女子の評価も低い。

それが南雲の、クラスでの立ち位置と言えた。

「……………」ムッ「チラッ」

では清水はどうだろう？

清水も南雲同様、クラスメイトの評価が高いタイプでは無い。

趣味も南雲と同じくゲームやラノベのようだし、

趣味繋がりなのか、孤立気味の南雲とも一定の交友関係を築いている。

遅刻や居眠りなどの批判され易い行動こそ取っていないものの、低評価を受け易い要素を孕んでいた。

でも嫌われているとか、

イジメられているとか？ そんな解り易い立ち位置じゃ無い。

避けられている。が、近い。

最近少し近づいて解った。興味が無い。が、多分正解だと思う。

清水はクラスメイトに、他人に興味が無い。

嫌われているのでも、避けられているのとも違う。

清水は独りで居るのが好きなタイプだと思う。

望んで独りで居る。独りでも生きて行けるタイプの人間だ。

だけど最近は何？解り易く敬遠されてもいる。

いつもなら南雲に絡む、檜山達の声が無い。

檜山は？香織好きの南雲嫌いとして、周知の存在だった。（香織本人は除く）

でもその檜山は、全治一ヶ月のケガで入院中。

階段で落下。見つけたのは清水。これは清水の仕業だと噂されている。

曰く、南雲の友達は清水ダケだから。

集団でイジメられるのを見かねて、階段から突き落とした。

そう噂されていた。

†

「……………あ、あのさあ清水」

時間は昼休みに突入。

特に用も無いので、直ぐに学食に向かう事にする。

と言っても学食で昼食を摂る訳では無い。

学食で販売しているサンドイッチが目当て。

で、人気の無い静寂スポットで一人昼を過ごす。

それがいつものルーチンワークだ。

だが今日は？園部に声を掛けられる。

園部はやや様子がおかしく、

園部と仲の良い女子数人が、そんな園部を微笑ましく見守っている。

これが恋愛ゲーなら？まず間違い無く昼食のお誘いだろう。

が、これはゲームでは無くリアル！

鍛え上げられたゲーマーたる自分に、過度の期待は無い。

だが最近、園部とは話す機会が増えた。

例の一件以来だ。

別に勘違いでも、翩って来る程の交友関係者は居ない。

キマグレだと思う。

「……………昼。来るか？」

「ツッ!!」

だから園部を昼食に誘った。

園部は驚きの感情に囚われた後、

やがてコクコクと了承し、後ろの女子連中は大いに盛り上がった。た。

どうやら正解らしい。リアルは選択肢が非表示仕様だから困る。

歴史にifは無い。有名な言葉だ。

一般的な人間は未来の予測や備えは出来ても、視る事はデキナイ。ゲームのように、セーブポイントからロードもデキナイ。

では今回！もし園部に声を掛けられる事無く、学食に行っていたら、歴史は変わったのか？

「!」

園部ツ!!」

解答↓大いに変わっただろう。

その瞬間、教室は光りに包まれた。

光っているのは床！では無く、

いつの間にか教室の床に展開されていた魔法陣のようなモノだ。

ゲームでは見慣れた代物。空想の産物。ありえない展開。

だが瞬時に現実を受け入れた。

最悪の事態が閃く。

これをラノベ展開の異世界転移だと想定。

分断は避けなくてはナラナイ。転移トラップの基本だろう。

護ろうとしたのだと思う。

理不尽なファンタジー展開に、コイツを好き勝手されるのが気にイ
ラナイ。

「清水ツ!!」

園部の手を取った。

今度は思い込みでは無く、確かに伸ばされた園部の手を取った。
実は非常用シヨルダーバッグも用意していた。

災害時にも使える非常用便利アイテムの詰め合わせだった。
イザと言う時の備えだ。

だが実際に取ったのは、園部の手だった。

某有名RPGのVI作目で、モーグリの手を取った時と同じく後悔は無い。

↑

「此処は……………」

教会。か？」

光りが治まり、気が付くと教会らしき場所の広間に居た。

教会だと認識したのは、らしかったから。と言う他は無い。

きつとこの広間は？祈りの間とかの名前が付いている場所だろう。

探せば鐘撞き堂とか、パイプオルガンとかも有りそうだ。

「……………園部。無事か？」

「清水」

そして直ぐに園部の手を握っている事に気が付き、

次に他のクラスメイトや、

畑山先生も居る事に気付いたが、まず園部の安否を確認。

受け答えも出来るようだ。取り合えず無事と判断。

だが手は繋いだままで、園部は羞恥で手を離す。

と言うアクションを起こす気配が無い。

突然の召喚（仮）で、動揺？不安なのか？

ならば此処で手を離す！と言う選択は無い。

逆に強く、園部の手を握る。

「／／／」

どうやらこの選択も正解のようだ。

ロード無しのリアルでは、幸先の良い展開。

何気に恋人繋ぎに移行しても、拒絶の反応が無かった。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ」

そして死の宣告は告げられた。

これが死の宣告だと理解できた者は、どれ程居ただろう？

それに全く気付いていない代表選手の天之河は？
道化丸出しの言動で、戦争参加の表明までしてくれた。
畑山先生の常識的な抗議の声も空しく、
他の大半のクラスメイトも同意してしまう。

「コレ詰みゲー☆

……………そうだ。チートに行こう！」

02 神の掌

「……………清水。大丈夫?」

「ああ、大丈夫だ。問題無い」

園部の声と、

繋がれた手の温もりで正気に戻った。

余りの詰みゲー展開に、SANチェックが入ったようだ。

きつと園部は精神分析持ちに違い無い! (錯乱)

「救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……………どうですか?」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

最後の晚餐が出来そうな別の部屋に案内されて、

告げられた教皇だか神官長だかの、詰みゲーの説明は以下の通り←

1 /

今回の件はやはり異世界召喚。

召喚者は彼等が信仰するエヒト神であり、彼等に送還などの手立ては無い。

2 /

異世界トータスは、人と亜人と魔人の住む世界であり、人と魔人は戦争中。

劣勢の人類を救う為、自分達は援軍として召喚された。

召喚された神の使徒として、人類に勝利を! バックアップはするとの事。

3 /

天之河が楽観論を謳っているが? 戦争に勝っても、日本に還れる保証は無い。

やはり詰みゲーだった。

大体どうして、平和な日本の一般学生を召喚するかな?

自衛隊か、在日米軍のプロを召喚しろ! と言いたい。

ハッキリ言って職業軍人を召喚すれば?

フィジカルな戦闘能力や実戦経験の他にも、

現代兵器のファンタジー世界持ち込みが望める。

自分がエヒト神なら、情け容赦無く人員込みで原潜を召喚する。
勿論核の搭載艦を！である。

エヒト神は、本気で人類を勝たせる心算か？

それとも核爆撃より、一般学生に価値が有るとでも？

「……………どう思う？」

「どうしようも無い。」

詰みゲー確定だが、神の使徒とやらの使命放棄もキツイ。

使命を放棄した役立たずまで、バックアップしてくれるとは思えな

い」

と、此処からは小声で伝える。

だが戦争の駒として、延々と戦う心算は無い。

暫くは訓練と言う名のチュートリアル期間を設けるらしい。

そこで異世界で生きるすべを習い、離脱の準備を進める。

戦いたい奴は戦えば良い。

顔も名前も知らない奴等の為に、命を賭けて人殺しを続ける。

それは尊く立派だ。だが覚悟が無い。

魔人とやらは、日本人の認識的に恐らく人型種族だ。

人の姿をした者達を、何処まで殺し続けられるか見物だな？

それ以前に、

あの教皇率いる聖教教会に逆らえば、普通に人間との戦争も在り得る。

異端認定とかな？悪名高い魔女裁判の仲間だ。

宗教が巨大な権力を握っていた危険な時代。お約束だろ？

と、こんな事を考察デキる時点で？まだ最悪の手前だ。

召喚と同時に洗脳や記憶改竄。思考誘導で奴隷兵。

即座に戦場送りになるよりは、まだましな方。

「洗脳!？」

「……………初手から洗脳は有効な手段だ。」

違和感を抱く機会が無い」

他に思い付くパターンは？

別の場所に浚われたクラスメイトが居て、

そのクラスメイトの存在を、既に忘れていた可能性だ。
自身の学生証を取り出す。

清水幸利。

自分の名前だ。その裏面には、

南雲ハジメ。園部優花。の名前がメモってある。

「……………それは？」

「友人リストだ。」

こんな時の為の点呼リストでもある」

取り出した学生証に気付いた園部が問い質して来る。

記憶は、人にとって最も大切な自身だと思っっている。

これを侵す事は最も許されない。

この学生証のメモは？ガチで記憶改竄対策の一つだ。

「清水が、

本気で記憶改竄対策とかしちゃうヤツなのは解った」

今まで手を離さなかった園部が？

手を離してヤレヤレポーズを取る。選択を間違えた!?

「……………でも、

私に何か遭ったら、捜してくれる心算だったの？」

†

教皇イシユタルの御高説は終り、教会の外に出る。

此処は聖教教会の総本山。神山の頂に在った。

これから麓のハイリヒ王国へ赴き、今度は国王と謁見するらしい。

神の使徒降臨の報告と、快く戦争参加を表明した報告だろう。

着々と使命は果たされるって事だ。

だがそれも束の間。他のクラスメイト達は、

初めて見る異世界の、神山から見下ろせる光景に目を奪われてい

た。

此処が地球上の外国で、これが観光か何かなら？と言った処だ。

「幸利」

だがその最中に目を、意識を奪って行ったのは園部だった。

神山の教会を背に、園部は宣言する。

「今から私の事は優花、と呼びなさい。」

私も名前で、幸利って呼ぶ事にしたから」

「解った、優花。」

「……………コレで良いか？」

名前呼びイベント！

世の中最初から、名前呼びを許すヒロインも珍しくは無いが？

今まで名字呼びだった相手を、

名前で呼べるようになるのは、萌えるモノが有る。

リアルでは、更に得難い展開。躊躇は無い。

〱〱〱〱

アツサリ言うな、バカ！」

†

神山を下り、麓のハイリヒ王国に入国。

そこで国王との謁見。

他にも王女やら幼い王子やら、国の重鎮やらの紹介。

その辺りは唯一の大人（笑）の畑山先生や、

既にリーダーと目されつつ在る天之河が主立って対応する。

面倒を進んで引き受けてくれるのは、楽で良い。

こう言うのはクラス委員時代に、無駄に体験した。

謁見とその後の晩餐会を終えて、与えられた部屋に下がる。

一人一部屋の個室だった。

オーソドックスな中世ファンタジー世界の文明Lvを考慮すると、

悪く無い部屋だと思う。

だが寝る前に個室を出る。

貫徹も珍しく無いゲーマーには？まだ早い時間だった。

「……………幸利」

「優花もまだ起きていたか」

部屋割りは男女で別フロアだったが、

共用スペースのラウンジの外、バルコニーに優花が居た。

既に就寝用のネグリジェにガウンを羽織ったダケの姿だったが、

特に寒そうな素振りは無い。

名前呼びの一件の時とは違い、もう落ち着いているようにも見え
た。

勿論此処で、ネグリジエ姿の優花をガン見する愚は犯さない。

真のゲーマーたる者、いつでも心のCGモードで回想可能！（嘘）

「眠れ無くて、ね」

「暫く無言の時間が過ぎる。

だが、何か話があるのは察していた。

「……………幸利は離脱するって言ったよね？

皆と別れてどうするの？」

「天之河の言い分は、アテの無い楽観論だ。教皇の回答もな？

相手は強制召喚を実行するようなカミサマだ。そもそもアテにナ
ラナイ。

「別の手段を探すべきだ」

「……………それこそ、アテは有るの？」

「此処は異世界。

探すべきは異世界転移。

難易度は途方も無く高い。

その上！確実に手札を持つ、神の掌を離れる選択を選ぶうとしてい
る。

「無謀と笑うべき選択だ。

「無い。

「だが、往かなくてはナラナイ」

「……………どうして？」

「何もしない者に、望んだイベントはやってこない。

手を伸ばささない者に、つかめるモノは無い！」

一陣の風が吹く。

優花の髪が流されて、リアル一枚絵が彩られる。

優花は少し呆然として、やがて笑った。

「意外。

幸利はゲーマーだから、ファンタジーな異世界で永住する！
とか言い出すかと思つた」

その時の優花が浮かべる表情は、笑顔。と言うより、安堵に近かったのかもしれない。

「ゲーマーだが、ファンタジー世界に住みたいと思っただ事は無い。好き好んで、文明の劣るセカイに住むとか！ナイワ。」

此処がSF系の世界なら、まだ考慮するが？」

と素直に答えると、全力で笑われた。

こんなに笑う優花は初めて見る。

「……………幸利。」

往く時は声を掛けなさい。私も往くから」

「まずはレベリングから、だがな？」

異世界転移初日、夜。

パーティー参加イベント発生。

詰みゲーにしては、幸先の良いスタート。

03 固有技能

優花と今後のルートについて語り合った翌日。
早々にチュートリアルは始った。
現れたのは昨日の晩餐会にも居た、
騎士団長のメルド・ロギンス。だったか？
如何にも現場の叩き上げ系の人だが、
チュートリアルの説明&解説係はこの人らしい。
ハッキリ言って？戦士系の前衛職はまだしも、
魔術師系の後衛職などの解説も出来るのか？と言う疑問が残る。

|||||

清水幸利 17歳 男 レベル：1

天職：闇術師

筋力：30

体力：30

耐性：30

敏捷：30

魔力：250

魔耐：230

技能：闇属性適性・闇属性耐性・魔力感知・従属目録・精神支配無

効・言語理解

|||||

と思っていたのは、フラグだった。

渡されたステータスプレートと言うアーティファクト。

これに血液で個人登録を行うと、

文字通りステータスと、適正ジョブ、スキルが表示されるらしい。

更にプレートは身分証にもなるとの事。

そして表示された適正ジョブは、闇術師。闇属性特化の魔術師だろう。

ステータスに関しては、如何にも魔術師ステ！としか言えない。
期待出来るのか怪しいが、解説を待とう。

問題はスキル覽。

閨属性適性・閨属性耐性・魔力感知・言語理解

は解る。この手のゲームのお約束だろう。問題は、

従属目録・精神支配無効

の二つ。精神支配無効は、まだ予想が付く。

無効系は強スキルで、

Lv1で付くような代物では無い点を除けば、だが？

|||||

|||||

精神支配無効

記憶とは、

自己が自己で在る上で、最も大切な自己で在る。

清水幸利の、最も強い在り方が具現化した技能。

効果／

清水幸利の固有技能。

〔精神干渉／精神支配無効〕

|||||

|||||

スキルの項目に触れると、ヘルプが出た。

ヘルプの内容を見る限り、固有スキルのように思える。

となると従属目録も、だろうか？

|||||

|||||

従属目録

効果／

従属下に有る者を管理。

目録／

該当0件

目録管理／

目録終了／

従属目録の項目に触れる。

らしい語りが入っていない分、固有スキルでは無い気がする。だがそれよりも内容から察するに、

これはタイムモンスター、或いは召喚獣の管理画面か？

今は該当0で出来る事は無いが、そんな感じだと思う。

「？」

どうした？南雲」

「……………清水君」

自分のプレートを大体確認して、

メルド団長の解説の順番待ちをして居ると、

浮かない顔の南雲が目に入った。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・言語理解

南雲のプレートを見て察した。

ステータスが初期ステだった。待望のチートステでは、断じて無い。

メルド団長の最初の説明では、この世界の一般人の平均ステータス

が10。

要は非チート。凡人。モブである。

「何と言っても生産職だからな？」

下手に戦場に出ないで、錬成で貢献しろ！

と言うエヒト神の啓示じゃないか？」

「そう……かなあ」

「南雲はバカ正直に、剣や槍を作る心算か？」

「！」

現代知識チート！」

南雲の目に灯が灯る。

パツと思いつく限りでも、

「最初は携帯できる銃や爆弾だろうな。

初期から車やバイクも良い。絶対に馬車より速いし便利だ。

戦車やミサイルでファンタジーを焼くのも良いが、最終的にはIC

BM、核だ。

スイッチ一つで、魔人領を焼き尽す。

永住の予定は無いからな？敵だ。全て焼いてしまえ」

「……………鬼だ。此処に鬼が居る。」

最初は、比較的マトモだったのに！」

南雲がドン引きしている。

これではアレなので、スマートな話にしよう。

「要はバカ正直にやる必要は無い！って事だ。

どんなスキルも使い方次第。天之河になるなよ？」

天之河「バカ正直のアホと言う認識である。」

そうやって天之河の噂をしていると、アイツの番になった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100
敏捷：100
魔力：100
魔耐：100

技能：

先読・
全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・

高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

|| || || || || ||

ノーマルチート万歳！と言った処だろう。

そして適正ジョブは勇者！御苦労な事だった。

これから天の河には、幾多の苦難が待ち受けて居るだろう。

行け勇者よ！世界を救うのだ!!とかな？

本当に御苦労サマだ。

「……………清水君は、

羨ましいとは思わないんだね？」

「何だ？」

南雲は肉体交換系のジャンルに興味の有るのか？」

ハッキリ言って、肉体交換系に興味は無い。

と言うかキモイ。そこまで追い詰められていない。

「スキルの話と同じだな？」

上手く使うしか、無いって事だ」

「……………清水君は凄いや」

やがて南雲の番になり前へ。

入れ代わりに既に解説を聞いた優花が来て、

プレートを見せてくれる訳だが、

ステータスはまだしも、スキル覧がおかしかった。

|| || || || || ||

園部優花 17歳 女 レベル：1

天職：投擲師

筋力：70

体力：80

耐性：70

敏捷：100

魔力：80

魔耐：100

技能：投擲術・気配感知・???・言語理解

|| || || || ||

「???か。」

ヘルプは確認したか？」

「えーっと、ヘルプは」

|| || || || ||

???????

効果／

この技能は未だ目覚めていない。

劣化効果／

縁を戻す。

手放した縁。縁在る物を、再び手にする事が出来る。

|| || || || ||

「……固有スキルのような気がする。」

それに劣化効果？試すしかないだろうな」

一列目の???が恐らくスキル名。

二列目の???がスキルを表す語りだろう。

やはり固有スキルの線が濃厚だと思う。

「固有技能って、確か」

「ワンオフアビリティとも言うな？」

「優花の、オマエだけの特別な力だ」

「当に諦めた特別が、今になって来るとか！

畏だな？」

「余程ファンタジーは、コチラを戦わせたらしい。」

「冗談は、

ゲームダケにしろ」

†

結局魔術師系の解説は？他の宮廷魔術師が担当した。

まずは座学。訓練。座学の繰り返しである。実戦訓練は無い。

しかし訓練が続く日々の中、模擬戦は存在する。

そこで既に修得した闇魔法で、

メルド団長以外の騎士には勝てる程強くなり、

やがて一対多数でも圧倒出来るようになった。

チュートリアルも終りが近いのかもしれない。

だが従属目録を活用出来るティム系魔法の修得は、まだ無い。

やはりアレは召喚獣の方なのか？

担当の宮廷魔術師の返答は渋い。解らないのだろう。

「南雲か」

「……………清水君」

資料室に来ると南雲が居た。

南雲は最近、訓練に参加していない。

サボって居る訳では無い。

基礎体力向上と、最低限の防衛手段の訓練では？

伸び悩んでいるからの行動だった。

戦士でも魔術師でも無い南雲は、訓練を基礎に止めた。

基礎ステータスの上昇を最低限に止め、錬成の熟練に努めた。

当初語った銃や爆弾はまだ無い。

魔法有りのゆるふわ設定でも、ゲーム知識で銃の再現は困難との

事。

爆弾モドキは出来たか？クラスメイト達の魔法の方が強いらしい。

そこでコイツはロマン武器に走りやがった！

ガンブレードである。

だが前衛職では無い南雲では、ガンブレードを扱え無かった。まだまだ拙いガンブレードを使ってくれるクラスメイトも居ない。友人の少なさが響いている。

結局ロマン武器は？ 自分用のスペツナズナイフのみで凍結。

銃の製作に戻る。

「今日はどうしたの？」

「今日は地理の資料だな。」

必要な知識は、アホな程有る」

戦闘関連ダケでも、必要なモノは多い。

離脱も想定しているので、旅の知識も必要だった。

頼れる現地人の仲間が欲しい。

だが信用できる有能な者など、転がっているモノでは無い。

ゲームでもリアルでも、それは同じだった。

チュートリアルでも習う戦闘に関しては？

言うまでも無く、実戦経験と現場知識のウエイトが大きい。

本格的な実戦訓練は近々来る気配が有るが？

ハッキリ言って、その実戦訓練前に経験を積みたい。

城の外はファンタジーの無法世界。

リアルはゲームでは無い。

一步外に出れば？ いきなり魔人のボスキャラと遭遇戦！

と言う展開も在り得る。

メルド団長達騎士団が護ってくれるだろうって？ 温い！

コッチが護る側だよ！ 人類の守護者、神の使徒だからな！！

「自分で探すべきか？」

信頼できる現地人が希少なのはリアルでも常識！

それに実戦経験だ。躊躇いは不要で危険。

だがまずは嘆願が先か？」

必要な資料に目を通し、資料室を出る。

一足先に経験を済ませるとしよう。メルド団長に面会を求めた。

04 孤独の歌姫

「おお、ユキトシか。どうした?」

「はい。メルド団長に相談が有って来ました」

メルド団長に面会を求めた。

訓練は既に?大学の履修形式に近い段階に移行している。

詰り必要だと思ふ事を、自分で選択して学んで行く。

勿論疑問や相談が有るなら、教師役の者達が協力する形だ。

「実戦訓練。近いですよね?」

「……………ああ、オルクス大迷宮で行う予定だ」

オルクス大迷宮。

世界に七つ存在すると言う大迷宮の一つ。

内部は地下百層まで在ると噂されているが?

人類は未だ、踏破に到ってはいないとか。

魔物の巣窟。深層に到る程、生息する魔物が強くなるのはお約束。

「その実戦訓練の前に、殺害経験を積みたいと思っています。」

手頃な相手を用意出来ないか?相談に来ました。

具体的に言うとか?処刑予定の罪人とか、討伐予定の野盗とかです。

無いなら、殺害可の闘技場や賭け試合ですね」

平和な日本では?殺害の経験を積む機会は無に等しい。

本来の食糧を得る為に獲物を仕留める機会すら無く、

命を奪う事を前提とした対人戦。殺害経験を積める機会が無い。

だがそれはマズイ。だから丹精込めて説明した。

一步外に出れば?いつ宿敵たる魔人に襲われてもおかしく無い!

と。

人型種族を前に、躊躇する危険を潰すべきだと!

自分はもう戦える!血気盛んな死亡梓のモブの如く必要性を語つ

た。

「……………殺害経験を積ませる事も、勿論考えてはいた。だが」

「時期尚早。と?」

メルド団長は頷いた。

オルクス大迷宮で、まず魔物相手に討伐経験を積む。

人型の相手はそれから積みさせる心算だった。それがメルド団長の答えだ。

「……………解りました。」

今まで通り、自己鍛錬に努めます」

どうやらコチラのプランは通らないらしい。

もう国のバックアップがアテにならなくなった。

「……………ユキトシ。お前達は人類の希望なのだ。」

くれぐれも軽率な行動は控えてくれ」

「追手を掛けられるようなマネはしません。」

御心配無く」

退室しようとした処で釘を刺される。

返答後、今度こそ退室して行動開始。

独自に動くしかないか？どうやって？

冒険者にでもなつて、野盗討伐の依頼を受けるか？

↓新米冒険者に討伐依頼は回つて来ない。

実戦訓練前までに、ランクアップを望むのは難しい。

奴隷を購入して殺害する？

↓何処で売っているのか解らない。値段も同様。

支給されている金額で買える気がしない。

スラムを歩いて、絡んで来る社会のゴミを殺す？

↓これが一番イージーな気がする。社会のゴミなどいくらでも居る。

だが報復されたり、法の裁きを受ける恐れも有る。

「……………失礼。清水様ですね？」

「アンタは？」

さてどう動くか？

と、自然に人気の無い資料室に向かって行く？声を掛けられた。

そこに居たのは全身黒い男だった。

まるでカラスのよう。(髪は金髪)

黒いからでは無く、

上から俯瞰して来る目が、カラスのようだと思った。

「私はダービット・オルレクスと申します。」

神殿騎士の任に就いております」

メルド団長の配下では無く、

聖教教会の狗。と言う事になる。

「……それで、用件は？」

「はい。清水様の御覚悟、しかと伺いました。

神の使徒として、早々に使命を果たしたい。と志願したと」

メルド団長に面会を求めたのはつい先程。部屋を出たのはもつとだ。

キツチリ教会勢力に浸食されてるよ☆コレだから宗教は！

「何か良いアテが有るのか？」

「はい。このダービット・オルレクスにお任せ下さい」

だが今回は利用させて貰う。こう言うのは？教会の方が得意だろう。

で、案の定な展開である。

ダービット曰く、王国に不法入国した亜人が？

王国のスラムの一角を不法占拠しているらしい。

ダービットは既に何人かの亜人を討ち取り、今日は掃討戦の予定だったと言う。

そこに現れた神の使徒の一人が、掃討戦参加を志願する。素晴らしい！

と言う流れらしい。何ともメデタイ頭だ。

勿論亜人が好き好んで人間の国。しかも王都に住み着くとは考え辛い。

亜人は、人間の国では奴隷扱いだからだ。

何処かの奴隷商が逃がした奴隷か？

街から逃げる事も出来ずに、教会に見つかったのか？

何にしても都合だった。

「コチラです。使徒様！

さあ、穢れた者共に神の裁きを!!」

そこに居たのは、親子（仮）らしい二人の亜人。
もう抵抗する力も、意志も挫かれたか？震えるだけだった。

「ああ、御苦労。初めてがオマエで良かった。」

今回の件は神の使徒の糧となり、貢献される」

そして躊躇う事無く魔法を放つ。

【棘影】（トエイ）

影から生える棘が対象を刺し穿つ。

ダービットの影から生えた棘の群が、磔刑の如く貫く。

貫いたのは亜人。では無くダービットだった。

†

「存外、何も無いモノだな」

初めての人殺しを済ませる。だが特に何も無かった。

後悔や恐怖。或いは歓喜が、だ。

これはダービットが、背負う価値も無いゲスだったからか？

それとも自分がゲスだからなのか？それは解ら無かった。

だがこれなら、実戦でも躊躇は無い。

それは理解できた。だからそれで良い。

あの時助ける形となった、亜人達との交流は続いている。

亜人では無い。亜人達だ。

あの亜人の親子（仮）は？王都の裏社会に通じていた。

人間の国で生き延びる為、何でもアリだ。

そのツテで、殺害可の賭け試合にも出た。

そこで殺害と、殺害を前提とした対人戦の経験を更に積む。

ついでにファイトマネーで資金も潤沢になった。

後の方になると、賭けが成立しなくなるので？出禁になる程だ。

「♪♪♪」

歌が聴こえる。

美しくも寂しい歌。飛べない鳥が、空を想っているかのよう。

歌に誘われるように歩を進める。

この辺りは亜人街でも、無人エリアだった筈。

もう亜人街も、大分詳しくなった。

そこに一人の歌姫が居た。

美しい銀髪の少女で、

アレは海人族か？此処からでも、特徴的なヒレのような耳が見える。

だがそれ以上に美しいのは、その歌声だった。

自分以外誰も居ない無人の公園を舞台に、枯れた噴水をバツクに歌い続ける。

観客が自分一人なのが？色々とオカシイ。

陸地でローレライかセイレーンとエンカウントしたの？

と思いつつも、歌を最後まで拝聴する。

「誰?!」

「スマナイ。最後までキツチリ聴かせて貰った。

素晴らしかったと思う」

「えっ、最後まででってそんな筈!？」

「……………本当に？」

歌が終り、戻って来ると流石に気付かれた。

そこで素直に応えると、妙に驚かれる。

「……………良いわ。」

なら聴きなさい、私の歌を！」

何やらまた歌ってくれると言うので、ノリノリで聴きに入る。

彼女もノって来たのか？歌い続ける度、アンコールを受ける度笑顔になった。

「……………ありがとう。」

こんなに歌えたのは、きっと初めてだと思うわ」

それから色々と話し込んだ。

特にコチラの事を何かと訊かれたので、

成り立ての冒険者で、

近々あのオルクス大迷宮に挑む為、王都で何かと準備中だと答える。

神の使徒だの異世界召喚だのは？アレだと思ったからだ。

「……………そう。」

「幸利は大迷宮に挑むのね？」

「最初から名前呼びだった。」

「そして物理的にも、恐らく心の壁的にも近い。」

「……………そうだ。」

「名前、聞いても良いか？」

「……………そうね。」

「なら、願掛けにしましょう？」

「だからまだ、名前を訊いてイナイのを失念していた。」

「そこで名前を訊くと？彼女は、」

「幸利は無事に大迷宮から帰って来る。」

「……………そうしたら、私の名前を教えるわ」

「大迷宮攻略のクリア報酬か！」

「良いだろう。受けて立つ！」

「そう応えた。」

「此処で煽って来るとは、コヤツやりおる！」

「ゲーマー魂が燃える！そんな自分を見て、彼女は苦笑する。」

「結局その後も話し込んで、」

「今は便宜上、仮に彼女を歌姫と呼ぶようになり、」

「やがて日は暮れて別れの時間になる。」

「夜には城に戻らないと色々マズイ。」

「次は大迷宮攻略の後か？」

「……………ええ、そうね」

「そこで歌姫と別れて、城の自室で眠る筈だった。」

「だが現実とは異なる。」

「歌姫に、後ろから抱き着かれた。」

「抱き着かれて、その金の瞳に縫い止められる。」

「……………行かないで、と言ったら。」

「幸利は聞いてくれるかしら？」

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

1 / ダービット・オルレクス

初めての人殺しの為に出した生贄。オリキャラ。表向きは神殿騎士の任に就いて居るが？

裏では聖教教会の為に、汚れ仕事を担っている。

普通に亜人や魔人には？

人権が無いと思っっている一般的な聖教教会の信者。

実はオスカーの親類縁者の家系の出。と言う捨て設定有。

家名の由来はそこから。

2 / 歌姫

銀髪の歌姫。名前はリバース中。海人族。半クロスキャラ。

某歌姫からキャライメージだけ貰った半クロスキャラ。

アニメ版でラベンダー系が定着していますが？本来は銀髪の筈。

本人が異世界転移したり、転生した訳では無い。

髪の色。喋り方。歌姫で在る事。

この情報だけで原作のキャラ名が解る人は、訓練された重課金者だ
と思う。

答えは○ ○○○です。言うまでも無くポジションはボーカル。

本編で清水（挫折）は？

歌姫に取って、大切なフラグを初見で立てました。

こう言う相手に特別ってヤツを感じるのでは？と言う次第。

初めから大胆な行動に出ていますか？

事情説明は別の機会となります。

抱いてから始まるヒロイン。これからまだ長い付き合いになる予
定。

実はフューレンで、ミュウの代りに出す予定でした。

海人族なのはその名残。

ですがアニメ版のミュウが普通に可愛かったので、立場がフリー
に。

後から、即脱落させる予定の某キャラの後釜として設定。

だと言うのに先行登場！出逢いのフラグが欲しくなりました。

05 大迷宮攻略前夜

「……………此処まで、か」

本日。朝帰りと言うヤツを、初めて体験した。相手は歌姫。銀髪の海人族。

名前も知らない。出逢ったばかりの女だった。気を抜くと、意識があこの夜に戻りそうになる。

あの熱。あの感触。そして美しい嬌声。無中で歌姫を求めた。気付けば朝。亜人街のその手の宿に居た。

宿に歌姫を連れ込んだのは覚えている。自分の意思だ。ステータスプレートに輝く精神支配無効の文字。

自分が操られていた！と言う事も無い。ガチで魅了されて、初対面の歌姫をホテルに連れ込んだ。

ゲス枠確定！と自分に失望。起きて見れば所持金が無い！と言うヤボなオチも無い。

歌姫の姿だけが無かった。残ったのはシーツの温もりと、鮮烈な夜の記憶だけ。

「……………約束通り大迷宮から生きて帰って、また歌姫に会う。それからで良い」

メルド団長には、キツチリ注意を受けた。体育会系のペナルティは無い。解っているなら良いと。大人だった。

優花には？逆に心配された。理由が理由だけに、アレな気分になる。

そして告げられた。

オルクス大迷宮にて、実戦訓練を開始する！と。

†

それから日を掛けて、

オルクス大迷宮を擁するホルアドに到着する。

ホルアドは大迷宮目当ての冒険者と、鉱山の採掘で賑わう宿場町だ。

それは静かなゴールドラッシュを思わせる人の熱だった。

「ホルアドか。悪く無い」

「幸利は、機嫌が良さそうね?」

幸利。そう呼ばれて歌姫の事を、あの夜の事をまた思い出してしま
う。

これだから童帝は!↑もう非童帝です☆
だが顔に出さないよう努力して応える。

「……………活気ってヤツか?」

こう言うのも悪く無い。これもファンタジーの醍醐味だ」
町に入った後は、騎士団御用達の宿へ。

そこで一泊して翌日、オルクス大迷宮へ赴く予定だ。

大半のクラスメイトは初めての旅疲れか?

直ぐに休んだが、時間はまだ昼上り。コチラは優花と町に繰り出
す。

「☆☆☆」

やはり優花も女だった。

露天のアクセサリーショップで、目を輝かしている。

宝石店のような貴石は無い。

アクマで冒険者相手のアクセサリーショップだ。

何らかのアーティファクトだと謳っている。

が、アーティファクトにしては安い。

ただのアクセサリーだと思った方が良い。

「……………これ、良いと思わない?」

「何だ?身代わりの腕輪?」

うわっ、パチモノ臭いステキなレア度!確かめる手が無いし!」

これをデザインで選んだのか?

一瞬南雲を連れて来れば良かった!と思った。

アイツなら錬成師の鉱物系鑑定とかで、

パチモノかどうか鑑定出来たかもしれない。

だが目の前の優花の笑顔を見て、それはダウトだと判定。

同部屋で既に休んでいる南雲に合掌。

これは自分で判断しなければならない。

だがアテは無い。もう別に良いか！と判断する。

「……………店主。これを貰おう」

「えっ、良いの!?!」

自称／身代わりの腕輪を購入して優花に渡す。

名前の通り、致死ダメージを一度だけ身代わりしてくれる腕輪らしい。

本物だったら？まず在り得ない値段である。

「……………稼げる男だからな？余裕だ」

「一体いつの間に？」

言うまでも無く例のファイトマネーだ。

だがヤボな事は当然言わない。町の練り歩きを続ける。

「……………ねえ、何が在ったの？」

私達が訓練で忙しかった時に

早速腕輪を装備した優花が、心配。と言う感じの声で訊いて来る。

これはアレだ。初めての人殺しの方を悟られたか？

断じてもう一つの初めてをクリアした方では無いよな？

「……………越えるべき壁を越えた。

ただそれだけだ」

ベラベラ話す内容でも無いだろう。クールに答える。

だが、優花は納得しなかった模様。

「……………それに幸利。

変わったよね？」

「ぐはっっ!!」

何か確信が有りそうな一言。もう一つの方もバレた!?

女と言うイキモノは鋭い。都市伝説じゃ無かった!

†

「……………暫く席を外そう」

「ゴメンね？清水君」

微妙な空気のまま昼の散策は終って、夜になる。

もう寝るか？と言う時に、南雲を訪ねてネグリジエ姿の白崎が現れ

た。

冷静に席を外す。何やらシリアスな空気だ。

いくらネグリジエ姿でも？夜這いでは無いだろう。サル思考を除外。

と言うか？

白崎程の美人のネグリジエ姿を視認しても、特に劣情が湧かない。

これが余裕と言うヤツか！自分も変わったモノである。

はっ！優花にこれを悟られたのか!?

「……………決戦前夜に一人とか。

イベントを逃したんだな？カワイソウに」

「うわっ、何その同情の視線!?

それに清水君も一人でしょ？」

「こっちは空気を読んで来ただけだ」

宿のテラスで佇む八重樫を発見。

八重樫は確か白崎と同室だった筈。本来外に居る理由はない。

白崎は今！

南雲（ハジメ）と始めているかもしれないがな！（笑）

「……………今度は何？」

「いや、流石は八重樫。と思っただけだ」

八重樫は白崎と違って、まだ普段着のままだ。

普段着と言っても？何とも懐かしいYシャツ姿だ。

Yシャツ姿で寛がれると、それはそれでエロい気がする。

気がするが、直接的なネグリジエ姿よりはマシだろう。

流石は八重樫！ガードが堅い。

それは悪い要素では無い。

コチラはラッキースケベ否定派である。

エロはエロい事をするシーンだけで良い！（断言）

するとやはり、白崎のアレは夜這い!?

「何かどうしようも無い事を考えている気がするわ」

「女の勘ってヤツか？

どうしてこう、女は鋭いのか」

「……………女が鋭いんじゃないやなくて、男が又ケてるのよ。優花と何か在ったの?」

やはり鋭いと思う。女が、では無く?八重樫がだが。で、時間も空いているので?八重樫に昼の散策時の出来事を話した。

最後に、やはり鋭いと思わないか?と訊いたら呆れられた。

「だから男は又ケてるのよ。」

特に何も無いのにプレゼントとか!悟られるわ」

「そこか!そこで既にダウトか!」

ヤレヤレ、と。八重樫に苦笑される。

そんな仕方無いモノを優し気に見る八重樫は、

確実に一枚絵のワンシーンだった。此処は挿絵を挿すべき!

「でも、実際清水君は変わったと思う。」

清水君はもっと、他人に興味が無い人だと思ってた」

「……………否定はしない」

自分はその類の人間で間違い無い。

だが、イベント皆無は流石にどうかと思う。

「そこは否定する!」

やっぱり清水君は、清水君かな?」

「……………なあ八重樫。」

ついでにちよつと聴きたいんだが?」

「それをアツサリ私に相談する?」

……………まあいいわ」

此処までで、かなり好感度を稼いだ。

八重樫↓清水では無く、八重樫↑清水をである。

だから八重樫に相談した。歌姫の件だ。

「それで清水君は、その歌姫さんの事が好きなの?」

「好きだとか嫌いだとかじゃなくてな?」

……………心の占有率を、突然増やされて困惑している感じだ」

「それ、絶対狙ってやったと思う。」

住みたかったのよ、清水君の心に。」

特別に、なりたかったのよ。きつと」

「……………だが、歌姫とはアレが初対面だった。

どうしてそこまで?」

「それは清水君が探してあげて?」

捕まえちゃいなさい。きつと待ってる」

思い浮かぶのは、歌姫の単独ライブ。

美しい歌声。何より楽しそうだった。

こうして歌える事が、何よりも嬉しい。喜びが伝わって来る歌だった。

やはり男はダメなのだろう。それしか解らない。

テキスト化しない心など、いくら読もうとしても読めはしない。

やはり会うしか無い。会って話をしよう。正攻法だ。

「……………さて、そろそろ寝たい訳だが?」

八重樫、最後に頼みが有る。気配感知、使えるな?」

「何、このシリアスな空気は?

使えるけど、それが?」

「部屋に戻る前に調べて欲しい。

南雲達が、ハジメていないかどうか?をだ」

暫くの間、何を言われて居るのか解ら無かったようだが?

やがて頬が染まる。解って貰えたらしい。

「ちよっ!?何を言い出すのよ!!」

「ドアを開けた瞬間、今まさにハジメる処だったらトラウマ物だろう?」

今後に差し支える。友人としても、パーティーとしてもダウトだ。

此処は気を使ってやる処だろう」

「だからって、私に技能まで使って覗けと!」

「コチラにはサーチ系は魔力感知だけだ。

それでは、騎〇位とお馬さんごっこ(全年齢)の区別すら出来ない」

「態々伏字!?!18禁?18禁なの!?!」

しかも何が在ったらお馬さんごっこ(全年齢)が始るの!?!

そこはせめてマツサージネタでしょ!?!」

「念の為と言うヤツだ。」

お馬さんでも、マッサージでも同じだ。頼む」

その後八重樫を説得して調べさせた。

ハジメていないか、本当に興味は無いのか？と墮とした。

無事眠れた。とだけ言っておこう。

06 闇の太陽

オルクス大迷宮の攻略が始った。

事前の準備。武器や道具の準備。大迷宮の事前情報の入手。それが終わった後にするのは？パーティーの編成だ。

クラスメイトと騎士団の人数を考えると、レイドだろう。だが、いくら大迷宮が広くても？

レイドが全員で、常にゾロゾロ行ける通路の広さは無い。通れる場所も有るだろうが、危険で無駄だ。

探索はRPGお約束の少数パーティーに分けて、レイドボス戦前などに合流！と言うのがセオリーだ。

事前情報では？やはりボス部屋などは広いらしい。先人が苦勞して手に入れた情報だ。有効活用させて貰う。

そして問題のパーティー編成だが？
まず天之河の率いる主力、勇者パーティー。

勇者の天之河。転移前から脳筋ボディの坂上。どう見ても神官な白崎も此処に居る。

八重樫はオツカレサマだ。アイツは確実に苦勞人属性である。他数名のクラスメイトと、メルド団長を含めた騎士団員数名も随

伴。

如何にも過剩戦力的編成だが？それが主力の務めだ。

他に体育会系の永山が率いるやはり体育会系パーティーと、文系で揃えた中村率いるパーティーが居て、

そこにやはりサポート役の騎士団員数名が付く。正直ジョブバランスを考えろ！と言いたいが？

初回なので、普段の交友関係で別れている。どうやらそれも、低層の内に学ばせる心算らしい。

「やはり使えるな。良かったじゃないか？」

そしてそれ以外が集まったのが、我等が優花パーティーだ。だがやはり、ジョブバランスがアレだった。

前衛が、本来中衛よりの優花と相川しか居ない。

他の女子は後衛職だし、自分と南雲も後衛職だ。ゲームとは違い、後方にも後衛を護る前衛職を置きたい。これは相川が担当する。だが余計前に穴が開く。前衛無しではアツサリ突破されて、後衛が直ぐ狩られる。本来なら、だ。

と言う訳で？即死戦法で行く事にした。

「……………次が来たか。どうだ？」

「大丈夫。やっぱり人と同じ、心臓の位置だ」

リーダーの優花は、支援で中衛に。

後衛職の女子二人と、二人を護る後方警戒の相川は後衛に。自分と南雲で前に出る。

初見の魔物が現れたら？

南雲の鉱物系鑑定で、魔物の魔石の位置を鑑定する。位置を特定出来たら？

最小魔力消費の【穿針】（ウガチバリ）で、魔石を撃つ。

【穿針】は、文字通り効果範囲が針のように狭く弱いが？

貫通効果が在り、消費魔力が少ないのでコントロールがし易い。

詰り狙撃向きの魔法だった。

これで現れる魔物を一撃で仕留め続ける。

一度鑑定を済ませた魔物が現れた場合は？

南雲が錬成で壁を作ったり、

自分が【吸魔】（ドレイン）で抑えている内に、他のメンバーで迎撃する。

【吸魔】は本来、対象から魔力を吸収する魔法だ。

だが魔力が吸収されている間、対象は動きも阻害される。

だから意図的に吸収効率を下げ、行動阻害に利用。

更に魔力も吸収して回復する。随伴の騎士団に出番は無い。

「……………そろそろ次を試そう」

次に試す魔法は【闇撫】（ヤミナデ）。

【闇撫】は影から伸ばす手で、対象の心臓を握り潰す即死魔法だが？鑑定で位置を特定した魔石を、握り潰すのでは無く引き抜く。

魔石を失い魔物は即死。魔石もやはり無傷でゲット出来た。

「これも良いな。魔石を無傷で取り放題だ」

【穿針】は魔力の消費コストを抑えられるが、魔石の破壊が前提だ。他のメンバーに任せると、魔石もオーバーキルされるケースもある。

だがこの方法なら、確実に魔石を無傷でゲット出来る。使える戦法だ。

この【闇撫】戦法で、次々と魔石をゲット！

撃破数は天之河の勇者パーティーの方が上だったが、魔石ゲットによる獲得換金予想額は、コチラがトップ。迷宮探査は順調に進んで行く。

†

「それが例の劣化効果か」

最後の魔物が倒れる。仕留めたのは優花だ。

その際に、例の??の劣化効果のお披露目となった。

優花は投擲師だ。基本武器を投げて戦う。

そして??の劣化効果は、

一度投擲した武器を手元に回収する。と言うモノだった。

ブーメランやチャクラム系以外でも、戻せる訳だ。

これは別の使い方が出来ないか？優花に確認を取る。

「……………出来る、と思う」

「なら、後は実践か」

だがそこで広間に到着した。

30階層の中ボス部屋（仮）の広間。事前情報通りだ。

オルクス大迷宮は、地下百層からなると噂されている。

事前情報では、人類の最高到達階層は65階層。

そして30階層と60階層には、ショートカットの転移陣が有るらしい。

詰り30↑↓60だ。この調子なら30↑↓60↑↓90でもおかしく無いと思う。

お約束だった。実に親切で良い。製作者は良く解ってる。だがお

約束は続く。

転移陣には、転移陣を護る中ボスが配置されている。

これは一度撃破すれば？次回以降は撃破ドロップで中ボスは出現しないし、

転移陣も使用可能になるらしい。

勿論60階層への転移陣はまだ使えない。それは60階層の撃破ドロップが要る。

今回の目標は30階層の中ボス撃破。中ボスの撃破ドロップ獲得である。

「……………清水か、君達だけか？」

「ああ、そちらこそ。だな？」

結局30階層のボス部屋前まで合流出来たのは、

天之河の勇者パーティーのみ。

パーティーのジョブバランスが悪かった永山と中村のパーティーは、

既に撤退したと、合流した騎士団から報告を受けた。

むしろ後衛職ばかりの優花パーティーが残れた事を、

メルド団長は驚きながら賞賛し、困つてもいた。

「さて、予定よりも人数が少ない訳だがどうする？」

「挑みたいと思う。俺等はまだ戦える」

「ま、最悪ボス情報位は欲しい。賛成だ。」

コッチは後衛ばかり。退路を確保しつつ、後方で援護。

ソッチは前線で突撃。構わないな？」

「ああ、それで構わない」

天之河と手早く作戦を決める。

アイツとは基本方針さえ合えば、話が早いから助かる。

と言うか？自らキツイ方に行きたがるので、楽で良い。

「よし、行くぞ！」「応っつ！！」

「いよいよだね？」「気を引き締めなさい」

「いよいよかあ、緊張するよ」

「幸利」……………ああ」

レイドボス戦開幕。

先を行く天之河が、情報通り魔法陣に接敵した。広間の召喚魔法陣が起動。ボスが召喚される。現れたのは大亀。ランドタートル風の相手だ。

更に左右の人が通れないサイズの横穴から、コボルトが現れる。左右3体ずつ、計6体。

だがコイツ等は、此処に来るまでに交戦済だ！

「くたばれ！」

出現と同時に、【穿針】で左の3体を仕留める。

南雲が壁を錬成して右の3体を引き受ける間に、残りの優花パーティーが取り巻きのコボルトに攻撃を始める。

天之河は一瞬、コチラに視線を向けたが？

直ぐに抜剣して大亀に突撃。坂上と八重樫も続く。

白崎は残りのメンバーと共に、支援魔法を展開。

「戻って！」

優花が??の劣化効果を発動させる。

投擲した武器を手元に戻さず、コボルトに当たるように誘導。

投擲具は命中！コボルトは絶命した。どうやら上手く行ったようだ。

「…………あのバカ正直が」

優花が仕留めたコボルトで、取り巻きはまず全滅。

前線組に目を向ける。

何と言うか、亀相手に甲羅に攻撃してどうする？

「魔術師組は冷氣属性で攻撃！」

前線組は首か関節を狙え！常識だろうがっ!!」

亀を相手に冷氣属性！硬そうな相手に首や関節狙い！

この常識を守っても、亀は中々沈まない。流石のレイドボス！
と言うか？やはり人数の少なさが響いていた。

処理しても処理しても、取り巻きのコボルトが湧く。

コボルトに対処すると、コチラの後衛が亀に攻撃する余裕がなくなる。

かと言って前線組は抜けない。向こうも余裕は無いだろう。

「南雲！横穴をつ!!」

「そうか！錬成!!」

南雲が錬成で、コボルトが湧く横穴を塞ぐ！

これでもう!!コボルトは湧かない！流れが変わった!!

「…………ツツツ!!」

後衛組の魔法攻撃が、次々と亀に降り注ぐ！

元々亀は？物理に強く、魔法に弱い。

怯み、後退し、足を着く。

その足を南雲の錬成で更に取りられて、大きくバランスを崩す。

「はああああっつ!!」

そこを天之河の剣が、クリティカルに首を捕える！

亀の首が飛んだ。

勝利を確信したのか、天之河の動きが一瞬止まった。

「まだまだよ！魔石がまだ!!」

南雲の言葉を肯定するように、

首の無い亀が！自らの首を刎ねた天之河を押し潰そうと倒れ掛る。

超重量の押し潰し。

天之河は間に合わない。あつ死んだ。と言うヤツだ。

【陽影】（ヒエイ）

だが南雲から、魔石の位置を聞いていたので？

あつ、魔石直撃コースからはズレたかな？

と思っていた自分は、対処が間に合った。

【陽影】（ヒエイ）

闇の太陽で対象を焦却する。

闇の太陽が、首の無い大亀を蹂躪する。

首を失い、魔石を露出した大亀に抗うすべは無かった。

闇の太陽に吞まれて、大亀は撃沈。レイドボス撃破！

「…………うううっ!!」

至近距離で巻き込まれた天之河が、うめき声を垂れ流して倒れている。

どうやらまだ生きているらしい。良かった良かった。

07 奈落の使者

初のレイドボス撃破。

ボスを撃破した事で、30階層のボス部屋広間を確保した。今日は此処にベースキャンプを張り、休息する。

本来の予定なら、更に探索は続く訳だが？

永山と中村のパーティーは撤退済。勇者の天之河も負傷した。

探索を続けるのかどうか？それはまだ決まっていない。

で、ボス撃破の後は戦利品の分配である。

そこに何とか意識を取り戻した天之河が、八重樫の肩を借りて姿を現した。

白崎が頑張ったらしい。

その白崎は？天之河が居ないのを良い事に、

南雲と並んでイチャコラ食事を摂っている。本人に他意は無い。

「南雲君。はい、あ〜くん♪」

「ちよつ、自分で食べられるから！」

あくん攻撃を繰り出し、

周囲のクラスメイトの男子が嫉妬オーラを解き放ち、

南雲を死地に追いやっているが？白崎本人にはいつも通り他意は無い。

「……………まあ、スマナイな？」

「……………いや、油断した僕も悪かった。」

助かったよ。酷い目にあっただけだな」

で、最後の魔法攻撃に巻き込んだ事をササツと謝る。

長引かせても良い事は無い。

天之河は単純なので？非を認めて謝罪すれば、大抵受け入れてくれる。

八重樫は真相に気付いているようだが？異論は無い模様。

結局、戦利品のボスドロップは4つの指輪だった。

4つ共同し物で、何かの紋章が刻まれた銀の指輪だ。

時計のように四方に4つの貴石が施されていて、

その内一つが、淡い光りを放っている。

「これはそれぞれ二つづつで構わないな？」

「勿論だ」

ボス戦に参加した天之河のパーティーと、優花パーティーで均等に分ける。

これを貢献度などで分けようとする？揉め事の原因になり易い。フェアプレイ大好きの天之河も、これを快く了承。

指輪は天之河と八重樫。コチラは優花と自分が持つ。

この一つだけ光っている貴石も気になるが、検討は付く。それは後で良いだろう。

「……………それよりもどうする？明日以降の探索の件だが」

「残念だが厳しいと判断せざるを得ないな。」

次の60階層は、もつと苦しい戦いになる」

次のチェックポイントは60階層だ。

一気に行ける心算は無い。が、目標ではある。

「永山と中村のパーティーも再編するべきだろう？」

で、4パーティーで？」

「……………清水の処もどうかと思うが？」

話し合いの結果。無理に60階層を目指さず？

永山と中村のパーティー再編を待ちつつ、

此処のベースキャンプを拠点に、パーティー単位で自主鍛錬と相成った。

要はレベリングである。

↑

粛々とレベリングは続いた。

永山と中村パーティーの再編も終り、ジョブバランスもマシになる。

今度は4パーティーで再度出現した亀に挑み、随分楽に撃破もした。

永山と中村パーティー分の指輪も手に入れる。

パーティー内に指輪を持つ者が居ないと、再度亀が出る事も確認し

た。

時折ホルアドに戻って、宿でゆつくり休んだ事も有るが？

基本大迷宮でレベリングの日々を過ごす。廃ゲームーに戻った気分だ。

そして再び30階層のベースキャンプ。此処から60階層を目指す。

「やはり反応は無し、か」

指輪に反応は有る。だが転移陣は起動しない。

やはりこの周囲4つの貴石は、チエックポイントのクリア証明か？

4つの内3つは、恐らく30/60/90階層の転移陣だろう。

なら4つ目は100階層の脱出用か？答えは当然出ない。

「幸利。そろそろ行くわよ？」

「……………ああ、

転移陣が！」

そろそろ行こう。と呼ばれた時に異変が起きた。

起動しない筈の転移陣が、突然起動した。

転移陣から光りが溢れて、一気に膨張して行く！

これは、あの異世界転移の光りに近い。それ程の光量だった。

光りはあつと言う間に、

ベースキャンプとそこに居たレイドパーティーを飲み込んだ。

「治まったか。

……………此処は、何処だ？」

光りが治まると、そこは見知らぬ場所だった。

まず目に入るのは？奈落に通じている。と言われれば信じてしま

いそうな谷。

地下峡谷。

その峡谷に思いの外巨大な橋が架けられていて、

自分達は今、その橋の上に居た。

イメージ的には？アクアラインの海ほたるのようなスペースだ。

足元には、既に光りの治まった転移陣。

やはり指輪に反応はするモノの、起動はしない。

先程は何故起動した？

だが足元に転移陣が有る以上！恐らく此処は、

「バカな！60階層だと!？」

驚愕するメルド団長。

どうやら此処は60階層らしい。

騎士団やクラスメイト達の姿も有る。

ベースキャンプリに居た面々が、全員此処まで転移したようだ。

「オイオイ、何だありやあ？」

「大きい……な。だが、それよりも」

突然の展開に驚きもした。突然の地下峡谷にも驚いた。

だが、アレは何だ？

少し離れた先、そこに既に息絶えたらしき四足獣が倒れている。

四足獣は巨大で、30階層で戦った大亀と比べても劣らないサイズだ。

更に異様なのは？その四足獣を見下ろすように浮遊する謎の結晶。

それは、某有名RPGのタイトル画面によく居るクリスタルを思わせた。

そのクリスタルに似た結晶が、

自身の意思が在るかのように浮遊していた。

「次は何だ！」

「まさか、これは！」

浮遊結晶に気を取られている内に、その魔法陣が起動した。

転移陣では無い。召喚魔法陣だ！

そこから現れたのは？一体の四足獣。

既に息絶えたようにしか見えない一体目の四足獣と同じ、

二体目の四足獣だった。

「ツツツ!!」

二体目の四足獣が戦闘体勢を取る。

目標は浮遊結晶では無く、コチラだ！

自分達は原因不明の転移事故で、60階層まで来た。

そこでは謎の浮遊結晶が、

恐らく60階層の中ボスだった四足獣を撃破していた。

そこへ自分達が来てしまい、60階層の中ボス召喚の魔法陣に触れてしまった。

そして再度60階層の中ボスが召喚された。これはそう言う流れだろう。

「天の河。下の方が60階層のボスだ。

四足獣を討つて、此処を突破する！」

「……………上の方はどうする？」

「警戒はしつつ、攻撃は無しの方向で。

三つ巴に注意しろ」

「……………仕方無い、か」

二度目のレイドボス戦が始る。

まずは天の河が、敢て目立つように剣を翳して声を上げた。

勇者は此処に在る。目の前の敵を討つ！

未だ何が起きたのか認識出来ずに、

浮き足立っていたパーティーにやるべき事を伝える。

ようやく戦える状態が整った頃、それは現れた。

生者を妬む死の招き声。

奈落の底から、骨の鳥に乗った骸骨兵が無数に現れる。

取り巻きの到着を待っていたのか！

スカルライダーだったか、数がかなり多い。

コチラは地を這う生き物。向こうは空を飛んでいる。

空を飛ぶと言うのは、ただそれだけで有利だ。

しかも充分な広さとは言え、此処は橋の上。

左右に逃げ場は無く、正面には巨大な四足獣。

背後の転移陣は起動していないので、事実上後ろにも退けない。

「良し、今度こそ俺達の出番だ！」

「任せて！」

だが今回はフルレイドだ。全員揃っている。

次に動いたのは、前回出番の無かった永山と中村のパーティー。襲い来るスカルライダーの群から、

他の仲間を護る為、交戦を始めた。

スカルライダーの飛行能力は、確かに大きなアドバンテージだ。だが圧倒される程では無い。そこまで弱くも無かった。

更にスカルライダーの約半数が、浮遊結晶の方に向かっていった。結果から言えば無謀だった。

何かが光ったと思ったその瞬間には？

浮遊結晶に近づいたスカルライダーは、撃墜されていた。

無双だった。間違う余地の無い無双だった。

「ツツツ!!!」

そして正面のVS四足獣戦。

勇者パーティーと優花パーティーが、

持てる力の全てをぶつけて戦っていた。

相手は60階層のボス。だが圧倒的な差は無い。このまま押し勝つ!

そんな空気の中、事態は動く。

浮遊結晶が動いた。

襲い来るスカルライダーを全滅させた浮遊結晶が？

元より眼中無し!とばかりに、コチラの戦場に近づいて来る。

四足獣もそれに気付いて、浮遊結晶を威嚇する。

その瞬間、悪夢を見る。

浮遊結晶の周囲に、光の杖のようなモノが無数に展開された。

その一つ一つに魔力が充填されている事実気付いて、叫んだ。

「下がれ!それはファンネ……………」

光りは放たれた。

杖状の浮遊砲台から放たれた光撃は、

やがて光りの波濤となって四足獣を襲い、

四足獣は光りの中で消滅した。

波濤は四足獣だけでは無く、足元の橋をも貫いた。崩落が始る。

「錬成!急いでっ!!」

「くっ!【陽影】!!」

崩落を少しでも遅らせようと、

他の奴等の撤退時間を稼ごうと、南雲が錬成で食い縛る！
自分は未だに濁流の如く暴れる光りの波濤を、
少しでも食い止めようと、逆属性の闇魔法で対抗する！
「強すぎるー抑えられないっ!!」

これは本命では無く、ただの余波だと言うのに強すぎた。
光りの波濤は、コチラの足元の橋も砕いて行く。
おちる。オチル。墜ちる。

奈落の底に墜ちて逝く。

「幸利イイイツツツ!!!」

「南雲君ツツツ!!!」

最期に優花の声を聞いて、
視界に何か、光るモノを捉えた気がした。

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

3 / 浮遊結晶

実はこの浮遊結晶が、二人目のクロスキャラ。
姿が違う。台詞が無い。名前も無い。と言う酷い伏せ具合。
これで原作のキャラ名が解る筈が無い！と言う展開ですが？
ヒントは外見。

浮遊結晶の外見が？そのまま名前のヒントになっています。
更に凄まじいヒントを垂れ流しているのは？
此処では無くOO
だったり。

因みにキャラ名はOO OOです。

でもこの人、原作で名字呼ばれた事有る？
と言う感じである。
名前だけ検討すればOK！
詳細は次回公開予定。

08 レクイエム、その先へ

「無事に帰ったら、優花をデートに誘うんだ☆」

「何、死亡フラグを垂れ流してるの！

絶賛自由落下中だよ!？」

只今60階層から、奈落へと超落下中。

だがな南雲、別に錯乱している訳じゃないからな？

「現在奈落へと落下中。極めてマイナスな展開だ。

解るな？」

「勿論だよ」

「だからな？」

マイナスな展開に、死亡フラグと言うマイナス要素を×ば、
+になる気がしないか？」

「それ数学の話ツツ!!」

絶叫する南雲。ヤレヤレ、落ち着けよ？

仕方無い、本題に入ろう。

「落ち着け、詰り錬成だ。」

激突の瞬間。錬成の効果範囲に入ったら、地面を錬成する。

地面を柔軟にして、激突の衝撃を緩和する。

助かる方法など、それ位しか浮かばないな。ソツチは？」

「地面をーでも難易度高っ!!」

激突の瞬間!？」

「効果範囲の広さに自信が有るなら、今からでもGOだ」

などと言う会話を、落下中にした覚えが有る。

意識が在ると言う事は、自分はまだ生きているのか？

「ダメよ、まだ寝ていなさい。」

そのまま安静にね？マスター☆」

上から聞こえた今の声は何だ？

それに頭が？柔らかく離れ難いモノに乗せられている。

あつ、コレ膝枕だワ。と認識した時気付いた。

自分が彼女の膝の上で寝ていた事を。

「……………はっ!?」

す、水晶なのか!?!」

「ええ、貴方の可愛い可愛い水晶さんです☆」

意識が戻ったら自分は膝枕をされていた。

自分に膝枕をしていたのは?あのグランベルムの水晶だった。

少なくとも、自分には水晶のように見える。

警戒すべき展開だったか?水晶の膝から離れる事は無かった。

「あら、離れないんだ?」

今私を認識して、ググつと警戒心を上げたでしょうに?」

「たった今まで無防備に寝てたからな?」

……………それに、手当てもしただろうか?」

「気付いたんだ?」

「南雲が奇跡的な錬成クリティカルを出しても、無傷は無い。

となれば答えは明白。

ついでに言うなら?水晶の膝を拒否るとか!ただのアホだろ?」

「ふふつ、素直なマスターさんね☆」

クスクスと楽しそうに笑う水晶。

こんな風に、本当に楽しそうに笑う水晶は初めて見る。

アニメでは見られ無かった光景だった。

「……………水晶の事、聞いても良いか?」

「あら、お友達の事は良いの?」

一緒に居ない時点で察しは付いている。

何とか落下の激突での即死を免れたモノの?

何処か別の場所に墜ちた。と言う事だろう。

錬成に失敗して、既に死んでいるなら?自分が助かっているのがお

かしい。

「そう。なら何処から話そうかしら?」

マスターは最終回まで把握してる見たいだから、そこからかしら

?」

「……………最終回とか。水晶の口から聞く事になるとは!

まあいいか、教えてくれ」

まず前提として、グランベルムの話は実話だった。
原作通り、勝者は新月。

新月は魔法を消し去り、
水晶もマギアコナトスの裁定者（ルーラー）としての役目を終えた。
そこで水晶は、魔法と共に消え去る筈だった。

だが水晶は生きていた。正確には、生まれ変わった。
異世界転生。と言うヤツだ。

水晶は異世界トータスで、結晶精霊として生まれ変わった。
結晶精霊とは？

ただでさえ激レア存在の神結晶が？

更に永い刻を経て、自我を宿らせた存在らしい。

と言っても水晶自身？自我を宿らせたのは、最近の事だと言う。
千年以上の事は覚えていない。との事。

「千年か、随分因縁深い数字だな？」

「……………そうね？ウンザリだわ」

そして自我を宿した水晶は？

生地であるオルクス大迷宮（奈落）から出ようとしたが、

結晶精霊の帰巢本能がそれを拒んだ。出たいのに出られない。

それはマギアコナトスで、

ルーラーとして縛られ続けた前世に似ている。と思っただそうだ。

「そこで感知したのがマスターの魔力よ！

表層60階層でも使っていた闇魔法のヤツね？

アレに惹かれたの！マスターへの好奇心は、本能を超えたわ!!」

どうやら水晶は？

大迷宮の深層に存在する真のオルクス大迷宮。奈落から、

表層30階層で亀を仕留めた時の【陽影】の魔力を感知したらしい。

この魔力への好奇心は？結晶精霊としての本能を超えて、

水晶は初めて奈落を脱出した。

奈落を脱出して出た場所は、表層60階層の地下峡谷だ。

そこで都合良く、大迷宮内を行き来する転移陣を見つける。

これ幸いと転移陣で移動しようとするも？ロック機能付き。

自身の魔力で強引に起動させようとするも、結果は暴走。
更に鬱陶しい犬（四足獣）が現れて、
これを処理していた処で、との事だ。

「……………あの時の転移陣の誤作動は、水晶の仕業か」
「ゴメンネ☆」

あの表層60階層で四足獣を瞬殺して、
スカルライダーの群を無双していた浮遊結晶が？
水晶の結晶精霊としての姿らしい。

「……………と言うか？何で、
グランベルムはアニメ化して公開されたんだ？」

「さあ？何処かのお偉い勝者サマが、
執筆活動でも始めたんじゃない？」

「アレは勝者サマしか知らない情報も出てるでしょう？」
「犯人は新月かよ！」

てか奈落に居た筈の水晶が、どうやってアニメ版のグランベルムを
？」

それに何故、コチラの事をマスターと呼ぶかな？

それを訊ねると、水晶はルーラーとしての能力だと答えた。

治療の際念の為？マギアコナトスのルーラーとしての力を使った
らしい。

【真名看破】対象のステータス情報を確認出来る。

これを使用した際に、やり過ぎて一部記憶の接続現象が！との事。

「……………それって、某運命系の設定じゃないのか？」

「さあ？他のルーラーの事は知らないわ」

そしてマスター呼びの件について。

ステータス情報確認の際に、

コチラが従属目録持ちだと気付くと、

二度と本能に負けないよう自ら楔を打った。

「これは!!」

「見て魅て！」

「これが私のステータスよ☆」

清水幸利が存在する限り、弱体無効。全状態異常無効。

|| || || || || ||

従属目録で、水晶の名字を改名したら？

いきなり固有スキルらしきモノが生えて来た!?

てか水晶さん、凄く顔を赤くしてますよ？

「水晶?」

「……………責任。取りなさいよ?」

精霊。と言うか?

名前の無い者に、名前を与えろと言う行為は?とても大事な事!との事。

水晶には名前が在ったが、名字は偽名。詰り無いも同然!

水晶はたった今名前を与えられた。その意味を知るのは、まだ先の話。

+

オリキャラ&クロスキャラ設定

3 / 浮遊結晶↓水晶

結晶精霊。神結晶が永き刻を経て、自我を得た存在。

グランベルムの最終回で新月の願いにより、魔法と共に消滅。

後にトータスにて、結晶精霊として異世界転生した姿。

精霊形体と、人型形体に任意で変更可能。

精霊形体で浮遊可能。人型形体で人と変わらない行動を取れる。

ラスボスらしいステータスと、ラスボスらしいチートスキルの持ち主。

マジアコナトスでの立ち位置が?

裁定者(ルーラー)っぽかったので、F a t e / のルーラースキル

も一部付与。

F G O 風に言うど?マジアコナトスのルーラー。

最初の頃はルーラーらしく、戦いに参加していなかったと思う。

原作のハジメとユエの二人でなら!?!と言う破格のスペック。

但し本作では?結晶精霊の帰巢本能に囚われており、

真のオルクス大迷宮。奈落からは出られない筈だった。
しかし清水（挫折）の従属目録に登録して縛る事で、
その帰巢本能から脱する事に成功。迷宮大脱出☆
清水（挫折）に従う事になるが？外の世界を満喫する心算。
今日も世界は平和である。
実は00 スキップモードの日々で、
清水（挫折）が観ていたアニメは、このグランベルムです。
最後まで歌姫同様キャラモデルの半クロスに留めるか、
異世界転生で行くかで悩みましたが？転生で行く事に。

09 水晶の閨

「結局、確か此処は……………」

残念だが？そろそろ水晶の膝から起きるとしよう。
いつまでも寝ている訳にも行かない。

「マスター、残念そうな顔☆

そんなに水晶さんの膝が気に入ったの？」

「否定はしない。また堪能したい処だ」

「素直なマスター☆

いいわ。今晚にでも、また堪能させてアゲル☆」

辺りを見渡す。

最近見慣れた迷宮内ではあるが？何か空気が違う。

首元に死神の鎌を、常に突き付けられているような？死の気配。

「此処はマスターが攻略中だった、

オルクス大迷宮100階層の更に深層に存在する真の大迷宮。奈落よ」

立ち上がった水晶が応える。

確かチラリと、そんな説明を受けたな？

「奈落の構成階層は、上の表層と同じく100階層！

詰り地上から数えると？大迷宮は200階層だったって事になるわ」

「……………大迷宮の名に恥じない広大なだな。

何の為の大迷宮だ？」

「反逆者の住処」

「反逆者？」

「そ、反逆者。

この世界の神であるエヒト神に逆らったって言う奴等の事よ。

その主要メンバーである七人の反逆者。

このオルクス大迷宮は、その内の一人の隠れ家ってワケ」

「確か大迷宮は七つ在った筈だ。なら七つとも？」

「そうなるって事でしょ？」

余り興味無さ気な顔。

自分が出るに出入れ無かった大迷宮。良い感情は持っていない様子だ。

「具体的にはどうする？」

「出口に心当たりは？」

「私一人なら？ 精霊の姿に戻って、もう一度谷を昇れば良い。」

でもそれじゃ意味が無い」

水晶は自分と従属目録で繋がる事で、

結晶精霊としての帰巢本能を克服した。

外に出る為には、コチラの存在が必要不可欠となる。

「なら、どうする？」

「奈落の底。」

奈落の最下層にある反逆者の住処をアテにしましょう。

常識的に考えて、自分用の出入り手段位用意してるでしょ？」

こうして水晶と共に、奈落の探索は始った。

目指すは奈落の最下層。反逆者の住処！

だがそう経たない内に？ 奈落の恐ろしさを学ぶ事になる。

生息する魔物が鬼強い！

今まで攻略していた表層の魔物とはケタが違う！

水晶が居なければ？ 何度死んでいたか、解らない強さだ。

「うっわ〜 寄生プレイです。」

それとも姫プレイ？ 何にしても出番が無い」

「その寄生プレイとかでもLvは上がるでしょう？」

それから戦うって事で☆」

「水晶が駄目人間製造機です。」

だが他に本当に手段が！」

水晶が本当に圧倒的だった。流石のラスボス！

鬼強い奈落の魔物が？ ゴミクスにしか見え無い。

出番の無いまま、一日目の探索終了。

そして夜は夜で？ ずっと水晶のターン！

就寝中に魔物に襲われないように？ 水晶の張った結界の中で休む。

更に食事！食糧は無いが、水晶が魔法で水を出す。
しかも現代知識チートで、栄養補給飲料を造りやがった！
水晶は生きた神結晶の結晶精霊だから、神水を殆ど無尽蔵に出せる。

その神水を魔法で、栄養補給飲料に加工したらしい。

詰り水で、食事の代りに栄養補給が出来る。

更に就寝時には膝枕では無く、添寝された。

戦闘でも生活でも役に立たない自分。

水晶が居なければ生きて行けない自分。

夜に優しく抱き締められると、つい甘えてしまう。

優しく融かされてしまう。そんな日が続いた。

「……………良いのよ？」

私はずうくとずうくと、抱き締めてあげるから☆」

↑

また、求めてしまった。

奈落に墜ちてから、やる事が本当に無い。

生息する魔物は強くて、自分はいつまでも戦力外。

食糧は無く、水を造るのも水晶の魔法。

寝床の安全を護るのも水晶の魔法だった。

自分は何も出来ない。

そんな何も出来ない自分を、水晶は抱き締めてくれる。

在る日、とうとう水晶を求めた。水晶は拒ま無かった。

それ処か？それから毎晩水晶を求めた。

至福だった。満たされた日々だった。

だがダメだ。

これは自分が忌み嫌う、呼吸するだけの生活だ。

このままじゃ、ダメだ。

「……………ふくん。戻って来たんだ？」

このまま融かしてあげようと思ってたのに☆」

「やっぱり狙ってたな？」

「絶好の機会だと思ってる☆」

|| || || || || ||

「……………これが、マスターの在り方なのね？」

†

決意を新たにしたあの日、水晶の新たなスキルが解放された。

【コネクト】

水晶と接続して、ステータスとスキルの一部を借り受けるスキルだ。

このスキルの発動中、

水晶は精霊形体に戻り、コチラと同化している。

「私はマスターの中で休むから、頑張つて☆」

そして訪れる万能の魔力！何と言う万能感!!

だが溺れてはならない。これは水晶の力。水晶が貸してくれた力。

コチラのワガママに付き合ってくれた力だ。

「……………そんなに肩に力を入れなくても良いのには？」

私達は元より一心同体。そうでしょ？」

同化中でも、心に水晶の声が聞こえる。

大丈夫だ！問題無い。水晶の声が在る限り、この魔力に溺れる事は無い。

【穿針】【棘影】

奈落の魔物。二本尾の狼、通称二又と遭遇。戦闘を始める。

コイツの事は知っている。水晶がアツサリ無双していた。

奈落の魔物は余裕で固有魔法持ちだ。その隙は与えない！

大量の【穿針】を放ち、固有魔法を使う暇も俊足の機動力も封じる。

行動範囲を誘導して、【棘影】で刺し貫き続けた。

例え動かなくなっても？確実に魔石を破壊した。そこで残心。

周囲の安全を確認。ようやく戦闘が終わったのだと安堵する。

「大丈夫よ、マスター。貴方の勝ち。

おめでとう。奈落での初勝利よ☆」

「……………ああ」

凄まじい緊張感！そして勝利の余韻！

初めて魔物と戦った時よりも緊張したし、勝って生き残った事が嬉

しい。

これが本当の命の奪い合い！これが実戦！

これに比べたら、表層での戦いはヌルゲーである。

「……………待っていたー！」

「ギュギュッツ!!!」

次に現れたのは、二匹の蹴兎。

もう兎と言うには、色々と間違っている武闘派の魔物だ。

固有魔法で空中二段ジャンプとかも、普通に仕掛けて来る。

だが今回は、敢て空中二段ジャンプを使わせた。

蹴兎が用意した足場を、【穿針】で破壊。

空中でバランスを崩す蹴兎A。

そのまま【闇撫】で魔石を握り潰して仕留める。

「ギュギュッツ!!!」

だが仲間が仕留められても、蹴兎Bは怯まない。

迷わず得意の空中二段ジャンプで、回し蹴りを放つ！

攻撃がガードした腕に入るが、ダメージは即座に回復する。

「マスター。しっかり☆」

「助かる」

水晶が体内で、神水を出してくれたようだ。

オートリジエネ状態である。

【吸魔】【棘影】

「ギュギュッツ!!!」

水晶とのコネクトで、

効果範囲も吸収効率も一気に膨れ上がった【吸魔】で、

蹴兎Bの動きを止めて、即座に連続発動させた【棘影】で串刺しにする。

勿論魔石の破壊も忘れない。そうして二匹の蹴兎を仕留めた。

「……………コイツは」

暫くして現れたのは、奈落では初見の魔物。

だがコイツは知っている。

表層60階層の中ボス。四足獣ことベヒモスだ。

「ボスキャラが後半ではエンカウントで出る。お約束だな！」

だがベヒモスの攻撃パターンは既に把握している。

しかも表層60階層のような、広い直線スペースの無い此処では？
ベヒモスの突進系スキルも活かせない。ただのデカブツだった。

「終了だ。【陽影】」

しぶといだけのデカブツに止めを刺す。

奈落では、コイツも捕食されるだけの存在だと言う事だ。

「お疲れ様。今日はそろそろ休みましょう？」

「……………ああ、そうだな」

水晶がコネクトを解除して、人の姿で現れる。

結界を張り、今日の寢床を確保。

ベッドはいつも通り、水魔法で作ったウォーターベッドだ。

因みに風呂も有る。

土魔法で穴を掘り、コーティング。

水と火の魔法で湯を張った。もう何でもアリである。

「今日はマスターの初勝利のお祝いに、サービスタイム☆」

いつもの水晶手製の栄養補給飲料を飲む。

今日は文字通りのサービスタイム。口移しだった。

水晶の感触は、今日も瑞々しい。

「……………今日は、どうする？」

「勿論、頂く」

10 パンドラの匣

「マスターは、日本に還るのよね?」

「……………どうした?突然」

今日も奈落の探索を終えての休息。

夜と決めた時間に休みを取って、

水晶手製の栄養補給飲料を飲んで、水晶の用意した寢床で寝る。

そんなサイクルを繰り返していた訳だが、今日は少し違った。

「そう言えばマスターは日本に還るんだなあって、

やっぱり生まれ故郷は特別?

それとも、会いたい人でも居るの?」

「生まれ故郷、か。」

こう言った異世界転移モノで、日本に還りたい!

と言いつつ出すヤツは、リア充だと思う」

「マ、マスター?」

「日本に今まで自分を養ってくれた家族は居る。

会いたいのか?と訊かれれば、まあ会いたいと答えよう。

だが命を賭けてまで会いたいのか?と言われれば、答えは無い!だ。

数少ないクラスの友人は、

同じく異世界に転移したから?これも無い。

勿論日本に恋人を残して来た!と言う展開も無い」

そう、自分には日本に還る大きな理由が無い。

優花に偉そうな事を語った気もするが?実際はこんな処だ。

まあ、態々文明Lvで劣るファンタジーで永住したく無い!

と言うのも本音だが?

「結局?」

平和な日本でぐだぐだゲームをプレイして、ラノベを読みたい程度だ。

何処まで行っても、特別は無い」

「……………それって詰り、平穩に暮らしたいって事でしよう?」

別におかしい事じゃないわ。人が求め続けた願いの一つよ?

マスターはテンプレだ！って言うかもしれないけど☆
そう応える水晶は優し気で、

そっと寄り添って来る夜の水晶を覗かせていて、
事実水晶は、いつの間にか？そっと腕に抱き付いていた。

「水晶は、日本に還りたいとは思わないのか？」

「私は、一人じゃ大迷宮の外にも出られ無い。

かよわい精霊さんだから☆

マスターの居る場所が、私の居場所。

………重かった？迷惑？」

「いや、構わない」

過酷な大迷宮の奈落で、ふたりだけ。

他に誰も居ない。他に頼れる者も居ない。

きっとそれは大きな要因だっただろう。

だが構わない。自分の中で水晶の存在は、それだけ大きくなって
いた。

「マスターは、優花と日本に還る約束をしたでしょう？」

………いいの？」

確かに優花と日本に還る約束。

日本に還ろう！的な話はした。

だが何と言うか、もっと上位互換的な事になっていないか？

「なら歌姫は？」

初対面なのに、相当入れ込んだ。

ちよっと抱き付かれて朝帰りまでしたでしょ☆

マスターの銀髪スキー♪」

「ぐはっっ!!!」

好みまですっかり把握されてる！」

「コネクトの間、やる事が無いから☆」

歌姫の銀髪は本当に綺麗だと思った。

勿論あの歌声は素晴らしかったし、金の瞳も綺麗だと思った。

だが銀髪だろう。あの銀髪が一番綺麗だと思う。

その歌姫と一夜を共にした事は、☆5ですら霞む程。

「…………コネクトの間、記憶が読めるのか？」

「凄いでしょ☆」

自分の記憶が読まれると言うのは、極めて大事だろう。だが水晶を攻める気にはならなかった。

「マスター、怒ってないの？」

「コッチの信頼度も上がってるって事だ。

きつと逆コネクトが出来る。やる必要は無いだろうかな？」

「そうね？」

でも、それはそれで面白そう☆」

その時また、見た事の無い水晶の笑顔を見る。

月のような笑顔だと、そう思った。

「それで、歌姫の事。どうするの？」

「……………また会って、まず名前を訊く。

知りたい。と思っっている」

銀髪の歌姫。

彼女の事をもっと知りたい。そう思っている。

あの夜の事が、大きな要因である事は間違い無いだろう。

ただの一夜の劣情かもしれない。そう悩む事も有る。

だがそれでも！と思っっている。

八重樫の奴は？そう思わせる狙いだった。と言っていた。

だがそれでも、この想いは変わらなかった。

「そこで私一人を選んで欲しい処だけど？」

解ったわ」

今日は水晶が上になる。

自分と水晶の重さで、ウォーターベッドが沈む。

「マスターが何度他のルートに行っても、

私のルートに墮としてアゲル☆」

|||||

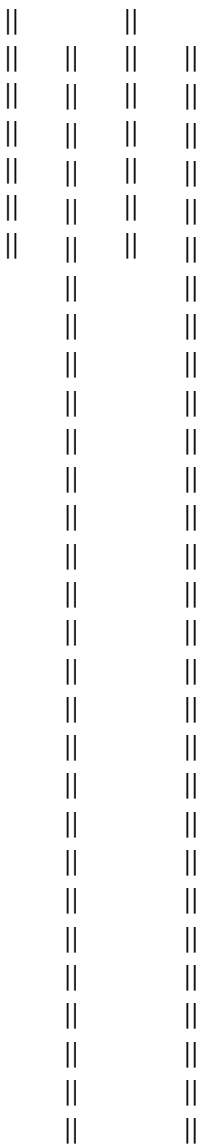
技能：





真名看破・世界の裁定・コネクト・永劫の誓い・

言語理解



世界の裁定（弱体化）

例え偉大なる真の魔術師が、

魔法を否定しようとも、世界はそれを望まない。

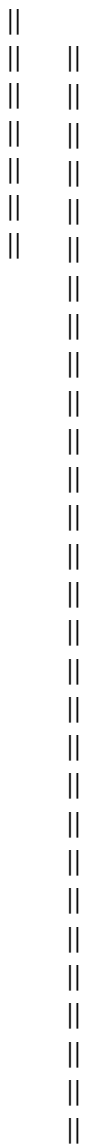
効果／

マジアコナトスの裁定者（ルーラー）の固有クラス技能。

水晶は自らの意思で、この技能を弱体化させている。

×対象の全てを世界に捧げる。

○対象の指定した技能を封印する。



†

「……パンドラの匣って処か？」

目の前に扉が在る。

天然の洞窟系ダンジョンが続く中、久々の人工物だ。

奈落到墜ちてから丁度50階層目。

この辺りで何か在ってもおかしくは無い。と期待を持つ。

此処に外への出口が有れば一番良い。

「如何にも、と言った感じだ。」

これは重要イベントの予感！」

久々にアイツの幻聴を聞いた気がする。

アイツは、清水は無事なのか？

止めろ。考えても仕方無い。

オレは必ず此処を脱出する！アイツも何処かでそうしている筈だ。

そして還るんだ。日本に！

「鬼が出るか蛇が出るか、敵ならただ潰すだけ！」

門番から抉り取った魔石で、扉を開く。

扉を開いて一歩進む度に、照明が灯される。

もつとマシな場所なら、このファンタジー展開を楽しめたかもな？

「……………誰？」

そこにいたのは、鬼でも蛇でも無かった。

いや、鬼には違い無いか？

そこにいたのは、黄金の吸血鬼（封印中）だったからな？

「ジャマしたな？」

出口じゃないなら用は無いら。

どうやら封印を解いて欲しいようだが？

こんな大迷宮の奈落の底で、

どう見ても封印されてるような奴を、解放する謂れは無いら。

此処はスルー一択だろう。無視だ。無視！

「オイオイ。どう考えても重要イベントだろう？」

無視してどうする？」

アイツの幻聴がオレを止める。

この怪しいのを助けろと言う。

ああもう！確かにアイツならそう言うかもな？

「……………気が変わった。助けてやる」

黄金の吸血鬼を封印する、

やはり黄金の立方体に両手で触れる。

錬成。

オレの数少ない。チツポケな力だ。だが！

「オレはコイツを助けると決めた！」

立方体如きが！それをジャマするなっつ！！！！」

中々の抵抗だった。

だが黄金の吸血鬼を封印していた、立方体の解除に成功する。

黄金の吸血鬼（全裸）は？何処か驚いた顔でオレを見ていた。

「……………私の事、怪しいと思った。見捨てようとした。

どうして助けたの？」

「オレには友達何て居ないに等しいんだが、それでも居てな？」

ソイツが居たら、お前を助けると思った。それだけだ」

「……………名前は？」

それに友達の名前、知りたい」

「オレはハジメ。南雲ハジメ。」

アイツの名前は幸利。清水幸利だ」

「ハジメ。それにユキトシ。」

うん、覚えた」

「……………で、そう言うお前の名前は？」

「名前。」

ハジメに付けて欲しい。新しい名前」

オイオイ名前付けイベントか!？」

清水の奴が知ったら、羨ましがるかね？良し！

良い名前を付けて、驚かす処だな？

「ユエ。」

お前の名前はユエだ」

†

「如何にも、と言った感じだ。」

だが開放済か」

いつも通り探索を続けて、

数えて奈落の50階層まで来た処で、それに遭遇した。

如何にも怪しい人工物の門。但し開放済。

誰かが開けたのか？それとも開いたままだったのか？

どうやら答えは前者らしい。中から誰かがやって来る。

「マスター」

「解っている」

こんな奈落の底で何とも怪しい展開だ。

しかも足音の感じからして人間。いや、人型だろう。

ハッキリ言って先制攻撃がしたい。

だが止めて置く。ある種の予感が在ったからだ。

そして姿を現した者を見て、賭けに勝った事を知る。

「よう。厨二病が再発したか、南雲？」

「清水。なのか？」

姿を現したのは、南雲だった。

白髪と紅眼と言う厨二病ルックだったが？間違い無く南雲だ。

一緒に居る金髪の不思議ちゃんも気になるが？仕方無い。

南雲がガシツと、両手で仕掛けるシェイクハンドを受け入れる。

「お互い無事で何より。」

しかもこの奈落で無傷とか！強くなつたな、南雲？」

「そんな事は無い。お前のおかげだ。」

コレが無かったら、腕の一本や二本処か？ガチで死んでた」

そう言つて南雲が取り出したのは？刃の無いナイフだった。

スペツナズナイフ。

いつか二人で作つたロマン武器の一つだ。

「コイツであの爪熊の野郎の目を潰して、

その間に錬成で逃げた。

アレは本当にクリティカルヒットだった。あんな幸運はもう無い」

コツチも色々在ったが？南雲も色々だったようだ。

互いに空白を埋め合う。

「で、そつちの金髪の不思議ちゃんは？紹介しろ！」

「そつちこそ何だ？その結晶精霊とか言うチートは！」

水晶がチートである事は否定しない。

だがそれとは別の話！不思議ちゃんは好物です☆

11 帝国の使者

「到着したか」

それなりの道程を経て、ハイリヒ王国王都に到着する。道程はまあ順調だった。

魔物の襲撃も有ったが？ザコばかりだ。

他の護衛連中は充分優秀だったし、コチラも遅れを取る心算は無い。

帝国は実力が全て。ザコ相手に下手は無い。

だが魔物に活性化の兆候も在るように思える。

魔人との本格的な戦争も近いのかもしれない。

それ故の神の使徒！と言う話に繋がる。

帝国にも存在する聖教教会に神託が下った。

偉大なるエヒト神が人類を憐れんで、

異なる世界より新たな神の使徒を召喚した！と。

場所はハイリヒ王国の神山。

たった今到着した王都に有る、聖教教会の総本山だ。

詰りコチラは帝国の使者。

お偉い神の使徒サマの御尊顔を拝む仕事だが？本来の仕事は別だ。

神の使徒サマが？本当に使える連中なのか確かめるのが仕事。

「ではガルヴェイラ様。手筈通りに」

「此処では冒険者ガライだ。

呼び名を間違えるなど、初歩的なミスを犯してくれるなよ？」

「承知致しました。ガルヴェイラ様」

本当に解っているのか？使節団の代表は馬車に戻る。

コチラはもう一介の冒険者。黒ランクのガライでしか無い。

が、そう思っていない者も居る。

帝国は実力主義の国。

だが実力とは、武力を指す言葉では無い。

騎士の実力とは武力だろう。だが指揮官の実力は統率力となる。

では国の中枢たる皇族の実力とは何か？

それは政を司る政治力であり、
周囲を納得させる解り易い武力であり、それらを複合したナニか
だ。

コチラはそれが面倒で城を出た。
継承権が低く、帝位を狙えないだろう事も理由の一つ。
城を出て、己の武力一つを頼りに冒険者になった。

そこで概ね成功を収めた。黒ランクまで成り上り、実力で富も得
た。

だが因果なモノだ。

城を出ても今度は冒険者として雇われて、国の為に働く事に。
挙句、ガルヴェイラ様は冒険者の立場から国を支える心算だ！
と評価される始末。その所為で、あの代表のような奴も居る。
冒険者としての名はガライ。

本名をガルヴェイラ・D・ヘルシャー。

帝国の第六帝位継承者と呼ばれていた事も有る。

†

王都の城に通される。

問題の神の使徒は、オルクス大迷宮で鍛錬に励んでいたらしい。
だが此処で問題発生。

その鍛錬の最中、神の使徒に犠牲者を出す事に。
教会や王国は口を閉じているが？既に帝国の影が情報をつかんだ
ようだ。

幸い、神の使徒の代表格は全員無事との事。
だがこれだけでも？神の使徒が無敵の存在では無い事が透けて見
える。

どうやら仕事は、キツチリやる必要が在るようだ。

神の使徒との謁見が叶うまで、まだ時間が有る。

謁見の細かい算段は代表や文官連中に任せて、

コチラは許された範囲で、城を散策する。

暇潰しでは無く、イザと言う時の備えだ。

どうにも教会相手に、

神に盲目的な王国の中で、気を抜く心算は無かった。

「これは……………」

城の散策中。態々城の中庭で剣を振る少女を見掛ける。悪く無い剣筋だった。悪くは無い。

だがその剣には、迷いを感じさせる。

「誰!？」

「スマナイ。ジャマをしたか？」

少し見せて貰っていた。悪くない剣だった」

コチラに気付いた彼女が振り返る。

黒髪のポニテ少女だ。が、違和感はある。

何故城の中庭で鍛錬をしていた？

城に務める女性兵も居るには居るだろう。が、空気が違う。

これは、いきなりのアタリだろうか？

「……………見掛けない顔。」

もう一度言うわ。誰?」

「確かに初見だろう。ならどうする?」

その剣で取り押さえるか?」

得物を抜く。

王国では、コレが剣だと解らない錬成師も多い。

余りに華奢な作りだからだ。ナマクラの玩具だと断じてしまう。

「まさか、刀!？」

「詳しいな?」

とある異国の騎士の剣、刀。

コレは帝国製の複製品に過ぎないが」

本物の刀は、もっと美しく妖しいモノだ。

魔性の魅力を兼ね揃えている。

いや、今は刀の魅力を語る時では無いだろう。

「ここまでか、やはり剣に迷いが有る」

「……………貴方は」

「何度か剣を合わせたが、答えは変わらない。

迷いが剣に出ている。もう良いだろう。」

彼女の剣を弾き飛ばして、首元に得物を突き付ける。

「名はガライ、黒ランクの冒険者だ。」

今回は帝国の使節団の護衛として雇われている」

勝利を収めた処でコチラの身分を明かす。

刀も下げる。視線がチラリと動いた。

「私は雫。八重樫雫。」

それにしても、帝国の?」

「直ぐにまた会う事になるだろう。」

なあ、使徒サマ?」

その後の謁見で、神の使徒サマ達とも会った。

予想通りあのポニテ少女、雫も神の使徒の一人だった。

神の使徒サマ達は皆自分より若く、未熟に見えた。

代表の勇者と戦う事にもなったが、甘く温く若かった。

典型的な戦いを知らない善人だ。偽善者とも未熟者とも言う。

将来的にはまだ伸びるかもしれないが?それだけだ。

それだけで戦争に勝てる訳では無い。

実際に戦った自分の評価だ。間違っていない自信が有る。

「浮かない顔だ」

謁見の後。

帝国歓迎の宴。または人類団結の宴。

宴は他の者に任せて、一人佇む雫に近づいた。

+

「代表の勇者が敗北したから。」

では無いな、他の悩みだ」

「…………ガライ。だったよね?」

雫は一人、人気の無いバルコニーに佇んでいた。

こう言う処も無防備だと思われる。

やはり勇者の言うように?平和な国の出身なのだろう。

「今回の件で、帝国は一応の協力体制となる。」

やがて戦争が始る。

その中心となるのはお前達、神の使徒だ」

「……………そうね」

一瞬。雫の身体が震えた事を見逃さない。
やはりな、と思うも？無理も無い。とシフトする。

「だがその戦いは、神の威光を示すモノにはならないだろうか？

雫。お前達は、

神の使徒では無い。ただの人間だ」

決定的な言葉を告げる。

それが雫と接し、勇者と戦った答えだった。

「……………まさか初対面の、

帝国の人に指摘される何てね？」

「お前達を神輿に魔人達と戦う。

神の威光が示される事も無い。それはただの戦争だ」

「……………ただの戦争」

「帝国は実力主義の国だ。

戦って、戦い続けて平和と自由を勝ち取り続けた。

だが次の戦争は、

お前達を神輿にした次の戦争は、良くないモノになる。

そう感じた」

「……………」

「雫。お前達は戦うべきじゃ無かった。

少なくとも早過ぎた。そう言う事だろう」

「……………何で、今になってそんな事を言うの？」

雫は力無く、コチラの胸に頭を預けた。

それはきつと、雫が溜め続けたモノだ。

「香織がずっと起きないの、南雲君が戻ら無かったから。

優花が部屋から出て来ないの、清水君が戻ら無かったから。

皆だつて口にしないけど、傷付いてる」

報告に有った犠牲者の件だろう。

南雲に清水か。

「私達は何も解って無かった。覚悟何て無かった。

それでも戦った。だから失敗したのね？」

「帝国に來い。」

お仲間の友人も呼びたい奴は呼べば良い。

無駄飯を食わせる心算は無いが、居場所は用意しよう」

「……………どうして？」

「使い潰されて無駄死にさせるには惜しいと思った。」

何処かお前が気に入った。理由はそれだけだ」

「私は……………」 「シズシズ！」

手応えは在った。誘いは上手く行く筈だった。

だが運命と言うヤツは、コチヲを裏切って行く。

雫の友人が目を覚ましたらしい。香織と言っただろうか？

バルコニーにやって来た、他の小柄な使徒サマがそう言っていた。

†

「香織は信じてるって、南雲君がまだ生きてる事を」

「だからオルクス大迷宮を攻略するって言ってた。」

私は、香織の力になりたいと思ってる」

「ありがとう。」

私達をただの人間だって、言ってくれて。

ありがとう。

戦うなって、言ってくれて」

「でも、今度は自分の意思で戦うよ。」

もう失くしたくないから」

もうこれは止められないヤツだと、認めざるを得ない。

これはそう言う流れだ。」

「解った。それが雫の決断なら」

それで限界だろう。」

最後に餞別代りに、手持ちの刀を渡した。

「気が変わったら、それを持って来ると良い。」

これでもそれなりに成功した帝国の冒険者だ。力になろう」

「ありがとう。」

大事にするから」

予想以上に嬉しそうな顔だった。

雫は刃物マニアの気が？

いや、手元に良い得物が無いのかもしれない。

こうしてハイリヒ王国の訪問。使節団護衛の依頼は完了した。何とも心残りな結末だった。

どうやら想像以上に、雫の事を気に入っていたらしい。

「ガルヴェイラ様。次の依頼の件ですが？」

「……………帝国に戻る事無く、次の依頼か？」

「はい。フェアベルゲンにて奴隷狩りの指揮を！」と

「コチラはただの冒険者何だが？」

「名目上は、奴隷狩りの指揮官の護衛依頼となります。

ですが陛下は？ガルヴェイラ様に指揮を任せよ！」と

「……………亜人奴隷が、まだ必要か？」

奴隷は帝国に溢れているだろうに」

「それだけ魔人との戦争が近い。と言う事でしよう」

戦争が近いか、何とも嫌な流れだ。

次の戦争は、一体誰が望んだ戦争か？

「ま、直接戦うアイツじゃない事は確かだろうよ」

†

オリキヤラ&クロスキヤラ設定

4 / ガルヴェイラ・D・ヘルシャー（ガライ）

元帝国第六帝位継承者。現黒ランク冒険者。オリキヤラ。

出奔した元帝位継承者。現在は黒ランク冒険者として活躍中。

継承権は既に放棄したモノの？その実力を皇帝にも評価されており、

時折皇帝からの依頼を受ける事も。

出奔した後も冒険者として大成して、実力で富を築いた。帝都に屋

敷持ち。

雫や他のクラスメイトを、余裕で囲える資産を保有している。

但しハーレムは持っていない。管理が面倒との事。

あの皇帝なら、何人子供が居てもおかしく無いよね？と言う話。

原作ではフューレンのイルワ支部長が？

当初、報酬に黒ランクを！と言っています。

これは一般的に黒ランクが最高位であり、銀と金は規格外の領域。または国の管理下に有る特別な存在である。と言う解釈です。得物は何にするか検討しましたが？

雫の気を惹く為に刀に！（笑）

ヤヴァイ妖刀保持者。だが正気の所業。

最終戦の天之河より強い設定で、

現地人の人間の中では、最強クラスとなります。

オジサンでは雫を口説け無かったのでは？

若いイケメン戦士を出して見た☆これなら行ける！

と言うキャラコンセプトです。

12 奈落の最奥

「どれだけ快適にダンジョン攻略してるんだ!？」

何を言いたいかは解る。

解るが、何の不満が有る？

「汗を流した後の風呂に何の不満が？」

それとも混浴では無い事か？

自分で頼め！ユエなら案外OKしてくれるかも?。」

「誰が混浴の話をした！風呂の話だ!!」

いや、風呂に不満は無い。久々で気持ち良いしな?。」

南雲達と合流した翌日の夜。

今日も水晶の用意した風呂に入ると、南雲に驚かれた。

まあ気持ちは解る。何と言ってもダンジョン攻略中に風呂だ。

確かに初めの頃は驚いたモノだ。

だがしかし！この風呂の気持ち良さの前には、全てがどうでも良くなった。

と言う訳で？只今絶賛男同士の入浴中。

女二人は既に入浴済。水晶の結界が有るとは言え？今は見張り中だ。

「しかし水晶はスゲエな？強いだけじゃない処がスゲエ。

お前が飲んでる栄養ドリンクも、だろ?。」

「ああ、もう何でもアリだ。最初は心が折れる程だった。

と言うかそれを言うなら、南雲も凄い根性だと思うが?。」

「何がだ?。」

「もう魔物肉を食べなくても良いのに、今も一人で魔物肉だろ?」

良く食う気になるな?。」

コチラはずっと水晶手製の栄養補給飲料。

水晶自身は結晶精霊なので飲食不要。食べようと思えば食べられるらしい。

ユエは吸血メイン。やはり食事は嗜好品扱いだ。

「…………ステータスと固有魔法ゲットの為だ。それにもう慣れた。

「今じゃ、初見の魔物は？肉を食わなきゃ気が済まない」

「水晶が居るから、神水は有る。だがなあ？」

「……………必ず生き残れる保証は無い。」

「まあお勧めはしない。とにかくマズイぞ？」

「固有魔法のコンプリートとか？夢は在るが！」

「暫く会話が途切れる。」

「互いに風呂を堪能していた。だが！」

「なあ南雲？」

「ハジメ、と呼んでも構わないか？」

「……………構わないが、突然どうした？」

「いや、このままだと混乱するだろう？」

「南雲！と呼んだら？お前とユエが振り返りそうだ」

「ブフォツツ!!」

「何を言いやがるっ!!」

「いや、ユエの懐き具合は凄いで？」

「アレは既に好感度MAXだ。何をしてああなった？」

「……………居場所が無いと言っていた。」

「だから日本に来るか？と言ったな」

「完全にプロポーズです。」

「本当にありがとうございます！いや、オメデトウ☆」

「つてオイ!？」

「少なくともユエはそう思ったシーンだと思う。」

「お前は違ったか？」

「……………幸利。オレもそう呼ぶが、」

「お前の方はどう何だ？」

「何が？」

「水晶の事だ。」

「アレは絶対お前に惚れてる。何が在っても離れないLVだ。」

「日本に連れて還るのか？」

「そう言う話はした。」

「水晶は、もう離れるとか考えられない程のヤツだ」

「そうか、お前の問題だからな? どうこう言う気はない。

……………言う気は無いが」

「何が言いたい?」

「オレとユエも居るからな?」

急に始めてくれるなよ?」

「大丈夫だ、問題無い。

水晶は防音結界と、光学迷彩もイけるらしい」

「オイ、やる気満々か?」

始める気か? 始める気だな!? ダンジョン攻略中だぞ!!」

「今更だな?」

因みにその日の夜も、しっかり始めた。

宣言通り、防音結界と光学迷彩もしっかり張った。

だと言うのにな? 翌朝、ハジメはお疲れ気味だった。

「何が在った?」

いや、訊くのは止めよう」

「ああ、助かる」

詳細を訊こうとしたが、断念する。

ユエと水晶が、仲良く上機嫌なのに気付いたからだ。

†

「ファッション?」

「アレが本当にただのファッションなら、シニールだな?」

で、済むんだが?」

『まあ頭に生えてる時点で、もつと別の可能性を考慮すべきでしょうね?』

「寄生植物。問題はやはり頭に生えている点だろう」

その日の探索での出来事。

遭遇する某レックス的な恐竜が? 全個体、頭に花を咲かしていた。

ただの寄生植物ならまだ良いが、頭! と言う点が気に掛る。

そして実験。試しに花を先に摘んで見た。

すると恐竜型の魔物は? 周囲を確認するような動作を取り、

花を見つけると? 親の仇のように何度も踏み続けて、

その後にようやくコチラに威嚇行動を取った。当然瞬殺。

「宿主を操るタイプの寄生植物か。面倒だな」

『魔法的なアンテナ。では無いわね？』

モノが花だし毒って処でしょう』

「何にしても精神支配無効が有る。」

花の毒なら、ハジメも毒耐性で凌げるだろう。だが」

「……………」

「対抗手段が無いのが、ユエ一人。と言う事になるな？」

『私とマスターには、洗脳系は効かないし？』

「うう……………」

「お前等の対抗技能が規格外なだけだからな？」

花に洗脳効果が在っても、

コチラには精神支配無効が、水晶には永劫の誓いが有る。

水晶の推測が正しければ、ハジメも毒耐性で対応出来るだろう。

だがユエには？その類の対抗スキルは無い。

「まあ寄生されるのを防ぐしかないな？」

モノが花なら、種か孢子だろう」

「それしかないか」

その後も花恐竜の群を蹴散らしながら進み、

奥の開けた場所で、それらしき人型の植物魔物を発見する。

【凶風】（マガツカゼ）」

人型は、初手から緑の風を放って来たので？

これ孢子だワ！と思ひ、コチラも闇の風魔法で対抗した。

【凶風】（マガツカゼ）」

本来なら首を落とす目的の、闇のカマイタチを放つ魔法だが？

風を拡散して放って、孢子らしき緑の風を押し返した。

「タネが解つてりゃ、こんなモノか」

「止めは無しで、

アレにはまだ用が有る」

ハジメのドンナーが、情け容赦無く人型を貫く。

両腕両足を貫かれてダルマになり、

【凶風】の強風で動きも封じられる。さて、始めよう。

「従属目録、登録」

「ギツギツギツ!!!」

動きを封じられたままの人型に、従属目録を起動させる。

実は水晶を初登録してから、コツはつかんでいた。

人型は既にボロ雑巾で、コチラの方が圧倒的に有利！

予想通り強制的に、人型の登録に成功した。

|||||

従属目録

効果／

従属下に有る者を管理。

目録／

清水水晶

アリア

該当2件

目録管理／↑

目録終了／

|||||

そしてササツと目録管理を実行。

アルラウネだかアリアドネーだかだったので、

名前はアリアに変更。更に圧縮管理を実行した。

圧縮管理とは？

そもそも従属目録では、登録した従属下の者。

従魔を術者の記憶領域で飼う事になるのだが？

これではモノによって、術者の負担が超増大する事になる。

従魔の容量は、従魔の実力通りに増大するからだ。

そこで登場するのが、圧縮管理となる。

従魔を本当に必要最低限まで圧縮して、術者の負担を0に等しくする。

この0に等しい程度とは？従魔の名前を覚える程度の記憶容量だ。だがたかが名前程度！と考えるのは甘い。

仮に六万の軍勢を組織するとなると？

六万體全ての従魔の名前を覚える事になる。

こうなるとマッドドクターでなくとも、相手を番号で呼びたくもなる。だがそうなると、今度は圧縮解凍が上手く行かなくなる。

圧縮した従魔を記憶領域で管理し、必要に応じて解凍して運用する。

この解凍の際、従魔の容量に応じた魔力を消費する訳だが？

これは魔法を使う時と同じ、従魔再構築のイメージがある。

此処で従魔を番号呼びなどして居ると、イメージが上手く行かない。

番号呼びはNG！と言う好例である。↑抜け穴は有る。

こうして考えると、この圧縮解凍は面倒そうだが？

何しろ術者の記憶領域に従魔を飼うのだから、

どうしても安全策は必要になる。記憶領域の圧迫は、そこまで危険なのだ。

これにも裏技は存在するが？外道手段だ。デメリットもある。

因みに従属目録に登録した水晶は？

登録はしたモノの、圧縮はしていない。出来ないし意味が無い。

圧倒的格上の水晶を解凍する魔力は、流石に保有していない。

水晶はそもそも自分の意思で登録して、

自分の意思でコチラについて来ているだけだ。

元より記憶領域で飼っていない。

召喚して出っっぱなし状態！と言う展開である。

正に反則の領域。

登録だけなら魔力の消費は無いからだ。

「成功！これでアリアはコチラの手札だ」

「エゲツナイな、従属目録とやらは」

「うん、エゲツナイ」

『マスターも充分リスクは負ってるけどね？』

『そう言うモノよ？ 従属目録は』

『アリアの花洗脳は有益。』

役に立つ時も来るだろう』

†

その後も探索の日々は続き、とうとう奈落の最下層に到達。

奈落100階層の最奥で、如何にもらしい場所を発見。

大型の魔物が余裕で動ける石柱の広間と、その奥に巨大な扉。

扉は神話に出て来そうな立派な代物で、神殿にでも通じていそう
だ。

これに比べると、ユエが居た封印部屋は隠し倉庫か何か？ と言うL
V！

扉が気になる処では在るが、まずは広間だろう。

『どう考えても、ラスボスが出ます！ って感じた』

『うん、お約束は守られる』

『事前に魔法陣とかを破壊したい処だが』

『近づくと起動。広間全てを破壊して見る？』

崩落するかもよ？』

『…………結局やるしか無いか』

結局在る程度広間に侵入すると、召喚魔法陣が起動。

デカイ。魔法陣がまずデカイ。

これは当然！ 召喚される魔物が巨大である事の証左となる。

『多頭竜か』

現れたのは多頭竜（ヒュドラ）だ。

首が一つ一つ色が違い、何ともカラフルな奴である。

そして今までで一番デカイ。

『このデカブツ野郎を始末してゴールだ！』

行くぞ!!』

『頑張る』

『マスター』

『ああ、終りにしよう』

13 世界の真実

戦いは始った。

カラフルな六つの首。

これで六つの首全てが、同じ攻撃しかして来ないようなら？
それはそれで笑える処だが、それは無かった。

此処は色通り、

赤が火属性。青が水属性。緑が風属性。黄が土属性と続いている。
後ろで控える白と黒は何だ？何故後ろに居る？後衛タイプか？

このパターンだと白が光属性で、黒が闇属性か？

「白はヒーラーだ。先に潰せ！」

前衛を務める赤青緑に、在る程度ダメージを与えると？

後衛の白がカバーに入って回復。

ヒーラーの白を狙うと、黄が盾になって白を護る。黄はタンクか！
どうやら多頭竜は、六つの首がそれぞれ役割を決めているようだが

？

範囲攻撃はどう対応する？黄一本で防げるのか？

「試してやるー！【陽………】」

「シャアアアアツツツ!!!」

範囲攻撃を試してやろう！と言う処で、今まで沈黙していた黒が動いた。

コチラに在る程度近寄ると、恐らく何らかの魔法発動。

一瞬辺りが暗くなったかと思うと、そこに奈落の魔物が溢れていた。

そこに居るのは自分一人。

そして自分は、奈落の魔物に食られ続ける訳だが？

直ぐにこれが幻覚の類だと気付いた。精神支配無効の効果だ。

『マスター』

これは水晶が居ない可能性。本来自分が辿る筈だった結末。

だがそれがどうした？

水晶は此処に居る。此処に居ると言うのに、

居なかった可能性を恐れて、震える道理は無い！

「迂闊に突出した愚を呪え！【陽影】」

「シヤガアアアツツツ!!!」

至近距離から【陽影】を喰らわせてやった。

黄のガードも、白のカバーも間に合わない。黒い首が溶解した。

「まとめてくたばれ！」

そこで勝敗は決した。

黒を助けようと、黄が白の元を離れたからだ。

その黄をユエが魔法で釘付けにして、

ハジメが対戦車ライフルにしか見えない得物。シユラーゲンを放った。

残った三色が白を護ろうとしたが、丸ごと四つの首が消し飛んだ。

後は護る者を喪った黄を、タコ殴りにして終わった。

「ハジメ、魔石はどうだ？」

「鉱物系鑑定に反応が無いな。」

「デカブツだからな、奥の方に有るのか？」

「怪しいな、全て塵になるまで攻撃続行」

魔石の位置が特定出来ない。怪し過ぎる展開。

首を失った胴体も始末しようとしたその時！それは現れた。

残った胴体から、新しい七つ目の首。銀の首が現れた。

†

その後の戦いは、いやあ銀の首は強敵でしたネ☆で終わった。

うん強敵だった。ハジメやユエも大変だったし、

ハジメは追い詰められて、バトル漫画の主人公のように派生スキルに目覚めた。

ユエも健気だった。やっている事が、完全にヒロインだった。

だが水晶の登場で、全てのゲーム盤が返された。

「ダメよ、マスターをイジメちゃ☆」

うわあ、何処かで見た事在るな〜と現実逃避。

ハジメも何処か遠い目をしている。

初見のユエは、ただただその魔力量を感じて硬直していた。

コネクトを解いて現れた水晶の周囲に、杖状の浮遊砲台が無数に展開されている。

これは表層60階層でベヒモスを消滅させて、橋まで崩して奈落へ墜ちる原因にもなったアレだ。

某宇宙世紀のファン〇ルの的なアレである。

「うくん、じゃあ期待に伝えて！ファンネル!!」

うおいつつ!!今、ファンネルって言った!

コッチは態々伏字にしたのに、ファンネルって言ったぞ!!

もう色々アレだが?水晶の操る浮遊砲台が一斉に動いた。

無数の浮遊砲台が、全方位から光撃を放つ!

光撃は集い、やがて波濤となつて銀の首を襲う。

いつかのベヒモスよりはもった方だろう。

だがやはり銀の首、多頭竜も光りの中で消滅した。

水晶の圧倒的勝利である。

「水晶さん、大勝利い☆」

そうデスネ☆もうツツコミも入れまい。

何にしても、これで先に進める。

威容の存在感を放つ扉を見る。この先が、例の反逆者の住処なのか?
?

「扉を開けた先は楽園（エデン）だった。

と言うオチか?それともエリユシオンだったか?」

「……………意味的には大差無いな。何にしても」

「此処が、反逆者の住処」

最終地獄ジユデツカの最奥。地獄の扉の先には楽園が在る。

そんな神話系の設定を思い出す展開だった。

今まで続いた天然系ダンジョンの先に在ったのは、

楽園だと言われれば信じてしまいそうな光景。

外の世界と比べても、損傷の無い太陽のような照明。

人気の無い平穏な別荘地のような水源や耕作地。

最後は悠然と佇む屋敷!何から何まで揃えた感じだ。

周囲の光景にも興味は在るが、やはり本命は屋敷の方だろう。

この様子では貴重なお宝の類も有りそうだが、本命は大迷宮の脱出路だ。

これで出口無しでは困る。

屋敷の下層エリアは、居住スペースだった。

寝室やドレスルーム。露天風呂や台所が有る。

その他諸々だ。やろうと思えば、此処で隠匿生活が送れそうだ。

流星は叛逆者の住処！と言った処だろう。

上層はプライベートエリアだと思われる。

だが施錠されている。ハジメの錬成でも解錠不能だった。

これは、相手の方が格上である事を物語っている。

因みに水晶には頼っていない。まずは正攻法だろう。

そしてついに、それを見つけた。

最上層の部屋だった。

そこで物言わぬ骸骨が、コチラの来訪を待っていた。

床には大層な魔法陣。入って来い。そう誘っている。

「御指名が入ったな、どうする？」

「……………全員で行くのは無いな、オレが行く」

「ハジメ」

「入らない訳にも行かない展開だな？」

「精神支配無効も在る。コチラも行こう」

「マスター、気を付けて」

水晶とユエに後詰を頼んで、ハジメと男二人で魔法陣に入る。

魔法陣が起動。

ああ、これは何かチェックされてるパターンだな？

と言う感覚が頭を巡る。

やがてそれも治まると、そこに一人の男が佇んでいた。

「立体映像？記録魔法か？」

「そこの骸骨の奴だな？」

「試練を乗り越えよくだどり着いた。

私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ」

このオルクス大迷宮の創造者、オスカー・オルクスの記録。

そこで語られるのは反逆者。では無く、解放者としての戦いの記録。

「強制召喚をやらかすようなカミサマだ。

今更カミサマがラスボスだと言われても、驚きはしない」

「それに態々戦う必要も無い。

オレ達は日本に還る。それだけだ」

「帰還の手段を手に入れても、

この調子だと妨害や再召喚のおそれも有る。それはどうする?」

「妨害、再召喚。

妨害なら潰すだけだが、再召喚か」

「話は以上だ。聞いてくれてありがとう。

君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

そこで記録魔法は終了。

更に頭に情報が流れて来る。神代魔法／生成魔法の情報だ。

「神代魔法の生成魔法か、

これって錬成師の専用魔法じゃないか?」

「かもな?」

だがこれで、自作のアーティファクトが行ける!」

「おおっ! ついにICBM計画が!」

「それは最終手段だ。

それにいきなりは無理だ。色々試さないとな?」

その後水晶とユエも魔法陣に入って生成魔法を修得。

だがアーティファクトの製造は、水晶でも無理との事。

出来るのはハジメ一人。やはり錬成師専用の魔法だと思う。

更に骸骨から回収した指輪で、上層の部屋も開放出来た。

そこで貴重な錬成素材の回収や、情報の読み解きを行う。

此処でもスーパー水晶タイム発動!

読書魔法を発動させて、資料を速攻で読み解く。

それによると、

先程神代魔法を修得した魔法陣で、大迷宮は脱出可能との事。

但し骸骨から回収した指輪が必須。

これは表層30階層のボスドロップと同様の物で、コチラでも代用出来るらしい。

ボスドロップの指輪の方を確認して見ると、いつの間にか4つの貴石全てが、淡く光っていた。他にも手記らしき物を見つける。

そこには他の解放者に関する事が記されていた。

「他の解放者も大迷宮を造った。想像通りの流れだ。

そこに他の神代魔法も有ると」

「異世界転移が出来る神代魔法も有るかもな？

還るアテも出来た」

だが大迷宮の正確な場所までは記されていないかった。

これは自分の足で調べる事になるだろう。

グリューエン砂漠大火山。

ハルツイナ樹海。

ライセン大峡谷。

シユネー雪原の氷雪洞窟。

が候補地だ。

数が足りないのでまだ未発見か、秘匿されているか？になる。

「さて、今後の行動だが？」

解放者が保有する他の神代魔法を手に入れる。

その為に他の大迷宮を巡る。これは確定事項。

だがハジメは、此処で暫く錬成師の修行を積むと言う。

確かに此処は錬成師の工房だろう。しかも神代クラスだ。

これから世界を巡ろう！と言うシーンだ。

焦らず力を蓄えたいのも解る。

だが錬成師では無いコチラに、メリットは少ない。

ハジメの修行に付き合っつて、奈落でレベリングでもするか？

それとも先行して、大迷宮の探索に出るか？

「急ぐ事は無いだろう。コチラはその間、レベリングでもしよう。

完全踏破前だからな？まだ奈落にお宝が眠っているかもしれないし、

「レアモンスターとも遭遇していないかもしれない」

「従属目録、それも在ったか」

ハジメがこれから作るアーティファクト。

それに期待している点も有る。

それがどんなファンタジーブレイカーになるか？楽しみだった。

「マスター、

歌姫に危機が迫っているわ」

ハジメの準備が整うのを待つ事、約一ヶ月後。

準備が整う前に、事態は動いた。

14 啓示

「間に合わなかった。と言う事か？」

王都の亜人街に戻って来る。

マスターと歌姫が出逢った枯れた噴水の前。

此処でまた逢おうと約束した訳じゃないのに。

だけどマスターは此処に戻って来て、

歌姫を探すけどその姿は無くて、あの歌も聴こえない。

全てが遅かった。

そう悟るまでマスターは立ち尽くして、やがて亜人街を去る。

取り溢したモノは思ったよりも大きくて、マスターの足取りは重い。

その日はとにかくマスターを元気付ける。旅はまだ続くから。

一つの点は交わる事無く終り、

けれどまた、残酷に交差する。

依頼で訪れた町。

町に魔物の群が迫る。

魔物は大地を覆い尽す程、やがて町は容易く飲み込まれて消えて行く。

それは確定事項。誰もが諦める現実。町の放棄。

けれど最後の手札を持つ者が一人。マスターだった。

正確には私を従えるマスター、

マスター一人だけが、この町の運命を覆す事が出来る。

その事実を知る、マスターの小柄な恩師は懇願する。

町を救って欲しいと。

「町を救うのに、コチラに何のメリットが有る？」

他人より自分を選んで何か問題が？」

けれどマスターは撤退を選択。

それが小柄な恩師に対する問いの答えだった。

「……………清水君。何があつたんですか？」

確かに清水君は、何処か諦めていた処がありました。

周囲に何も期待していない処があつたと思います。でも！それでも！手を伸ばす事が出来る子だつた!!

それでも頑張れる子だつた筈です！

それがどうして、また諦めてしまうようになってしまったの？」

対するマスターは何処か空虚で、

目の前の小柄な恩師では無く、此処では無い遠くを見ているよう。

「結局、またダメだつた。

またつかめ無かつた。

つかめ無い人間だと思ひ知らされた。

やる気が出ない。

どうしようも無くやる気が出ない。

こんな時に戦えと？無駄死に確定だ！

ウルは滅びる。覆す手札何て、無かつたつて事だ」

全てが決しようとしていた。

マスターは動かない。狂乱の魔物は町に迫る。

けれど聴こえて来る。

聴き覚えの在る歌が、聴こえて来る。

「……………どうして」

歌が聴こえる。

狂乱の侵攻を続ける魔物の壁の向こうから、聴き覚えの在る歌が聴

こえる。

銀髪の歌姫。

彼女の歌が聴こえる。

「約束、果たしに来た」

「幸利」

結果的に、ウルの町は何とか壊滅を免れる。

マスターは呐喊を選択。魔物の群を貫いて、歌姫に迫る。

けれどマスターを見る歌姫は悲し気で、そこに紡がれる言葉は無

かつた。

「よもやこの数の魔物が敗れるとは、な？」

流星は人類の神の使徒！と言つた処か、

アレをリアルで、ガチプレイしろって話だ。

「王都に急いで、歌姫に逢えば良い。」

「猶予は解るか？」

「少なくとも、後一ヶ月経ったらもう間に合わない。」

「歌姫は行ってしまう、戻れない道に」

「なら急ごう！」

魔法陣を出て、そこから王都を目指す！

「待て！話は聞かせて貰った。」

「急ぐのは良いが、準備を怠ってどうする？」

「持って行ける物は持って行け」

工房から出て来たハジメに呼び止められる。

「ユエが呼んで来てくれたらしい。」

「まずは足だな？」

「ライセン大峡谷から、徒歩だの馬車だので王都まで行く気か？」

「遅い、遅過ぎる！」

「試作品のバイクが有る。それを持って行け、馬車よりは速い」

「ハジメ製作の魔力駆動二輪。」

「名前通り魔力で走行するバイクだ。」

「計画ではスパイ映画宜しく、隠し武器を搭載する予定だったが？」

「これは試作品なので武装は無し。カラーリングは黒。」

「幸利の分だからな？」

「闇術師らしく色は黒だ。夜間迷彩って事で」

「専用カラー！」

「それは良いが、名前は？」

「乗るのはお前だ。」

「付けたければ、好きに付けると良い」

「なら、グラで行こう。」

「【風の暴食者】的な意味で」

「【暴食】（グラ）かよー！」

「スピード重視な物に付ける名前じゃない気もするが、まあ良い。何度も言うが、乗るのはお前だからな？」

今日は3daysな気分だからな？

何と無くノリで付けた。他意は無い。

「それと預かってたオルクスの指輪だな？」

こっちの方も収納空間が起動していた。

さっきのバイクも余裕で収納出来るし、

今までお前が貯め込んでた魔石や、

換金出来そうな魔物素材も入れといたから、

金が入用になったら売つとけ、途中で町ぐらい寄るだろ？」

「ああ助かる」

オスカーの骸骨が持っていた指輪と、

表層30階層のボスドロップの指輪。

機能的な差異が無いか、調べて貰っていた訳だが？

オスカーの方がマスターキー的な代物で、

ボスドロップの方が解放者の住処まで到達しないと、

フルスペックで機能しないように設定されていただけで、

スペック自体は同じだった。

それは指輪の収納機能も同じで、

所謂ゲームの道具袋的な機能だ。

詳しい最大収納量は不明だが？

ハジメの言うように、余裕でバイクも収納出来る。

更に車やその他武器類も入ったらしく、荷物運びの苦は無い。

「後はこのGPS、ようやく試作品が出来た」

「通信衛星も中継用の電波塔も無しにか？」

「無しだ。だから所詮はトランシーバーLvだ。

それでも近くに居れば、何とか行き違いぐらいは防げる。

どうにも通信系に使える鉱石が、何故か少なかった。

この辺りじゃ珍しいのかもしれない？」

見た目はどう見ても、ただのコンパスだ。

極短距離なら、相手の居場所に反応するらしい。

通信に適した鉱石を必要量入手したら、改良するとの事。

「オレからは以上だ。」

その歌姫とやらを助けに行くんだろ？

オレも準備が終り次第此処を出る。次は青い空の下で、つて事だな？」

「ああ必ず歌姫を連れて来て、ハジメにも紹介するからな？」

「……………修羅場には気を付けろよ？」（小声）

最後の一言を聞き逃したような気もするが？まあ良い。

水晶と共に魔法陣を潜り、ライセン大峡谷側の隠し洞窟に出る。

更にいくつかの隠し扉も越えて、洞窟を出た。

そこは大峡谷の名の通り、地の底では在ったが？確かに外の世界だ。

かなり上方ではあるが青い空が広がり、太陽も出ている。

何より空気の味が違った。

「随分と久しぶりな気がするな？」

「私にとっては千年ぶり、

本当にありがとう、マスター☆」

水晶から感謝の抱擁。

服越しではあるが、感じ慣れた良い感触である。

「とにかく王都だ。急ぐとしよう。」

この大峡谷も、良い場所とは言えない」

このライセン大峡谷は天然の魔力分解作用が働くらしく、

魔法を出したその瞬間から、魔力は分解されて減衰する。

これを力押しで補うと？通常の10倍近い魔力を消費してしまう。

正に魔術師にとつての鬼門！

因みにコチラは、ふたりとも魔術師である。

「私は力押しでも余裕だし、

マスターも対策済でしょう？」

「……………慣れない戦い方を強いられるのは事実だ。

元々このステータスは、近接戦に向いていないしな？」

|||||

清水幸利 17歳 男 レベル：100

天職：闇術師

筋力：700

体力：700

耐性：700

敏捷：700

魔力：3200

魔耐：3000

技能：

闇属性適性「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+魔力効率上昇」「+魔力消費減少」

「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」

・闇属性耐性「+状態異常耐性上昇」「+状態異常自然回復上昇」
複合魔法

・魔力感知・高速魔力回復・従属目録・精神支配無効・生成魔法・
言語理解

|| || || || || ||

15 大迷宮強制突入

「出番だ、グラ！」

早速、専用バイクのグラを召喚する。

受け取ったオルクスの指輪は正常発動して、

召喚陣からグラが、その姿を現す。

「よし！まずはライセン大峡谷を抜けて、

最寄りのブルックだ。そこから街道沿いに王都へ向かう」

「解放者の住処で凡その世界地図も手に入れたから、

ナビゲートも行けるわ。安心してマスター☆」

「流石だ水晶、頼りになる」

水晶が頼りになるのはいつもの事。もう色々と慣れた。

水晶は横座りで乗り込み、グラはコチラで操縦する。

「こう言うのも、悪くないわね☆」

久々の外の世界、バイクでツーリング。

風を切る感覚も悪く無いのだろう。

だがやはり、無粋な輩も居る。ライセン大峡谷在住の魔物達だ。

首が二つの某レックス系や、

プテラノ系の翼竜など、恐竜系がメインと思われる。

ライセン大峡谷は恐竜の住処なのか？

だが悲しい事に世の中には、

理不尽には更なる大理不尽を！と言う言葉が有る。

ライセン大峡谷で、強者として君臨していただろう恐竜達は？

更なる強者たる、後部シートに座る水晶に無双されていた。

久々の外で機嫌が良いのだろう。楽しそうな無双ぶりだった。

「次はマスターもやって見る？」

「……………グラは止めないと行けないが、

試さない訳にも行かないか」

水晶にコネクトを頼んで、次の襲撃はコチラで対応する。

グラも一旦収納済だ。戦闘に巻き込まれて大破するようでは？

今後の移動速度に、深刻な悪影響が出る。

「魔術師が近接戦とか、

進んでやりたい戦法では無いな？」

ライセン大峽谷では魔法を出した瞬間から、

魔力が分解されて減衰現象が発生する。

なら、魔法を外に出さなければ良い。

「ギヤオオオツツ!!」

二つの首が同時に、断末魔の声を上げる。

成功したようだ。

接近して対象となる相手に直接触れる。

直接触れて、零距离で対象の体内で魔法を発動させる。

これなら力押しでは無くても、通常通りの魔法効果が見込める。

双頭は体内を【棘影】でズタズタにされて、崩れ落ちた。

「次は翼竜。対空戦か」

双頭の魔石を回収している内に、三体の翼竜が接近して来る。

対空戦となると、先程の近接体内攻撃は使い辛い。

だが向こうも遠距離攻撃手段が無い限り、

降下してコチラに近づかないと行けない。なら手段は有る！

届きそうな距離になった処で、ステータスにモノを言わせて跳躍！

三体の翼竜に次々と飛び乗る！

飛び乗った際に、足から魔法発動。

やはり体内で魔法を発動させて、三体の翼竜を仕留める。

「このジャンプ戦法、やはり無理が有る気がする。」

次は多殻魔法を試して見るべきか？」

↑

結局あの後も戦って試した訳だが、多殻魔法にも問題点は残った。

多殻魔法は？魔法を多殻層に構成した物で、

ライセン大峽谷の分解作用も、多殻層の外層から作用が働く事が

解っている。

詰り外層を囷に、内層の本命を対象に命中させる魔法だ。

だが結局は結構な魔力消費と、チャージが必要になる。

力押しとどちらがマシか？と言う話だ。

それにライセン大峡谷の魔物の弱さも気になる。
アクマでオルクス大迷宮の奈落と比べて、の話になるが？

この大峡谷は、オルクスで言う処の表層に当たる部分かもしれない。
い。

大峡谷の分解作用は確かに面倒だが、奈落の過酷さに比べればマシンな部類。

此処は真の大迷宮では無い。そう思わせた。

「はい、マスター☆」

「ああ、いつも助かる」

結構な距離を走った気がするが、まだライセン大峡谷の中。

今夜は此処で野営となる。

オルクス大迷宮でそうだったように、

今日も水晶が寝床を用意して、もう飲み慣れた栄養補給飲料を受け取る。

町に着けば、久々の普通の食事となる訳だが？

それは水晶手製の栄養補給飲料より美味しいのか？と言う程のハマリ具合だ。

水晶作のウォーターベッドは、宿のベッドより確実に上等だと思う。
う。

「どうしたの？マスター」

「いつもそうだが、水晶は凄い奴だと思ってる？」

町に着いても、水晶の補給飲料やベッドを忘れられる気がしない」

「今は材料が無いから出ないけど、

普通の料理も出せるから」

「それは楽しみにしておこう」

毎回同じ栄養補給飲料を出していた事を、気にしていたのか？

少し拗ねた感じだ。気にする事は無い。と補給飲料を飲む。

「水晶さんの事、すっかり刻まれてる？」

「ああ、そうだな？」

準備を終えて寝床に入る頃には、いつものようにその気になっていた。
た。

水晶の事が欲しくなる。求めたくなる。
水晶は、やはり今夜も拒まない。

「……………これは、何だ？」

だがいつもと違う事が一つ。

魔力感知に反応有。微弱だが突然現れた感じだ。それも近い。
流石に色々と中断して、感知元へ偵察に向かう。

そこで見つけたのがそれだった。

【おいでませー・ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪】

端的に言えば看板だった。

書いて有る事をそのまま信じるなら、大迷宮の案内板だろう。
しかも夜間仕様なのか？電飾のような灯りまで有る。

魔力感知に反応が出たのは、この灯りだろうと推察。

だがこの軽さは何だ？本当に自分の知る大迷宮か？

この如何にも少女臭い丸文字は、近隣住民のイタズラでは？と疑いたくなる。

だが此処はライセン大峡谷の谷底だ。近隣住民など居ない。
或いは、未確認の少数部族的な亜人が住んで居るのかも？

と意味の無い想像を膨らませてしまう。

「どう思う？」

「……………敢てシリアスに判定するなら、本物だと思うわ。」

まずは【ミレディ・ライセン】のファーストネームの存在。

ライセンの名前は一般的にも伝わっているようだけど、

ミレディの方はそうじゃない。

それにこの灯り、イタズラに使う玩具じゃないでしょう？」

「確かにそうだな」

「それに問題はこれの真贋より、

どうするか、でしょう？」

そうだった。突然の展開で、それが飛んでいた。

確かに大迷宮の攻略は重要だ。

しかも未発見の大迷宮の発見は、更に重要事項となる。
だがコチラは歌姫に逢う為、急いで王都に向かう身！

悠長に大迷宮の攻略は出来ない。

「……………こんな時に残念だが、後回しだ。」

此処は王都の帰りにっ!!」

「マスター!!」

王都の帰りにチャレンジしよう。

と足を一步、看板の前から引いた。だがそこに地面の感触が無かった。

落とし穴。

そう認識した時には、既に落とし穴の中だ。

水晶のコネクトは間に合った。

だから水晶とはぐれる事も、トラップに因るダメージも無い。

だが随分長々とパチンコ台の玉のように転がされて、

気付いた時には、大迷宮の中と思われる場所に転がっていた。

その上最初に目に入ったのは、あの看板だった。

いや正確には違う。彫られている文字がだ。

「あれえ帰っちゃうの?遊んで行つてよ♪」

断つても招待するけどね☆うぷぷ♪」

何だろう?久々にガチギレしそうだ。

この急いでいる時に強制イベントだと!

ダンジョンをクリアして、町に戻つてセーブしようとしたら?

いきなりリヴァイアサンに襲われて、

強制ダンジョン(セーブ不可)に入るハメになって以来の案件である。

「さっさとクリアして脱出する。」

あの日と同じだ」

さてライセン大迷宮では、どんな凶悪な魔物が来るのか?

と構えていたが、やって来たのは物理トラップだ。

オルクス大迷宮の天然系ダンジョンとは違い、

如何にも人工物系ダンジョンのライセン大迷宮を進んでいると、

ガコンと何か嫌な音がして、何か嫌な予感がした。

完全な物理トラップ!

魔力反応が無い為？魔術師の身では事前感知が難しく、盗賊系の罫解除などのスキルも無い。

上手く首と腹を狙って来る回転歯車に、どう対処するのが正しいのか？

「御苦労、アンタレス」

コチラも物理で突破する！

この一ヶ月！

奈落で新たに従属目録に登録した従魔を解凍召喚！

鉱石系甲殻蠍型のアンタレス。

召喚も問題無く行えた。

記憶領域（体内）で魔力を使う分には、分解作用の影響も出ない。

即応召喚されたアンタレスは、

自慢の硬度で二枚の回転歯車を容易く防いだ。頼もしい頑強さである。

更に同じく頑強な鋏で、回転歯車を叩き潰す！

その後になってから不意打ちで三枚目の回転歯車が、

頭上からギロチンの如く降って来たモノの、

アンタレスの甲殻を貫く事は無かった。本当に硬い。

アンタレスは蓄積する魔力次第で、

硬度が増すシユタル鉱石の生体装甲を持つ。

その生体装甲を、コネクトした水晶の魔力で活性化させている。

するとどれ程の硬度になるか？結果は見ての通りだ。

因みにこのアンタレスは？

ユエが封印されていた部屋の番人と、同タイプの魔物らしい。

細部が違うらしいが、ハジメもユエも驚いていた。

曰く、まだ別のヤツが居たのか！と。

奈落の90階層を越えた辺りで、生息していたが？

と返したら、うわあと言う顔になった。

「さてライセン大迷宮！

最速クリアしてやるから、楽しみに待ってる!!」

16 枯渴結界マジアコナトス

「アンタレス、マジ強い」

『そのアンタレスを使役しているマスターも、

大概だと思っけど?』

アンタレスの破竹の進撃は続いた。

回転歯車に始り、

矢が放たれようが、槍が突き出されようが?

何かしたか?とばかりに突破した。

壁や天井が崩れて、押し潰しに来た事も在ったが?

やはりアンタレスはノーダメージ!

何処ぞの映画のような鉄球も転がって来たが、

その鉄球よりも、更に凶悪な尾で振り払われた。

アンタレスの尾は?

シユタル鉱石製の生体装甲と同硬度のハンマーと化している。

あの高硬度／超重量の鈍器でボコられたら、どれだけダメージが入るか?

ならばこれはどうだ!とばかりに、

溶解液らしき物を撒き散らす鉄球も転がって来た。

だが此処でアンタレスの固有魔法が発動!

【地脈操作】土属性のフィールドを操作出来る。

ライセン大迷宮は石造りの迷宮だが、石は石!土属性だ。

パチンコ台のハズレのような穴を即席で作り、

溶解液鉄球を穴に落とした。ざまあ!と思った瞬間である。

その後もトラップは続いた。

落とし穴はそもそも人型を対象にしているのか、

アンタレスの巨体では、サイズ違いで落下のしようが無い。

階段が突然!坂になるトラップも来た。

だがアンタレスが、器用に八本の足で踏み止まる。アンタレス偉い

!

「ライセン大迷宮は魔術師の扱いが不遇な分、

物理が優遇されている気がして来た」

『オルクス大迷宮とはコンセプトが違うのかも？
クリア推奨技能的なヤツ？』

「かもな？」

この調子だと、七ヶ所全てが違うパターンもアリか」

と言っている内に、次のトラップが来た。

怪しいプールの出現である。

この通路を進むには、何とかしてこのプールを渡る必要が有る。

だがこのプールは怪しい。最低でも毒入りは確定。

アンタレスの圧倒的硬度に対抗して、溶解液系の恐れも在り得る。

此処がライセン大峽谷では無いなら、

魔法でプールを凍結させるシーンになるが、

此処は分解作用が働くライセン大峽谷だ。

『私が凍結する？』

「それでも良いがアンタレス、どうだ？」

アンタレスに指示を出す。

【地脈操作】発動。どうやら見つけたらしい。

「ブチ破れ」

【地脈操作】で見つけた場所に、アンタレスの鋏を突き刺す！

すると大迷宮の壁が崩れて穴が開き、その向こうに別の通路が広

がっていた。

『壁が思ったよりも薄かったの？』

「アンタレスが動く時の震動音や、

【地脈操作】の感触が何かおかしいと感じた。

恐らくライセン大迷宮は、時限生成型のダンジョンだ」

+

『時限生成型？』

「大迷宮の部屋や通路をブロックにして、

パズルのように組み立てる。

だから壁を破ると、直ぐ隣に別の通路が有った。

それを一定の時間で組み換えてるって事だ」

『それってゴール出来るの?』

「組み換えているだけならパターンを読むなり、裏技を使えば行ける。今やった壁破りとか、床貫きだな? リカバーが速いと、それもアウトになるが」

『マスターの懸念はそこじゃないのね?』

「時限自動生成なら何とでもなる。」

問題は時限手動生成の方だ。

管理者のキマグレ一つで、

ゴールの手前まで行っても、容易く道は閉ざされる」

『管理者?』

「看板の幼女臭い文字を忘れたのか?」

この大迷宮には、管理者が居る」

その後も探索は続いた。

次々と罠を掻い潜り、不利を悟れば壁を破壊して進む。

そうしている内にらしい場所に出た。

城の謁見の間のような部屋だ。

周囲には王を護る近衛兵のように騎士鎧がズラリと並び、

足元にはお約束の赤絨毯が敷かれていた。

『謁見の間ね?』

如何にも鎧が動き出しそう☆』

「様式美と言うヤツだ。王道に至るテンプレ。」

嫌いじゃ無い。こんな時じゃなければ、だが?」

本来なら、動き出す前に騎士鎧をブチ壊せ!と指示を出す処だ。

だが敢て前に進み出て、空席の玉座に礼を取る。

あたかも王に謁見を求めようにだ。

相手のノリに合わせたロールプレイング!

「ライセン大迷宮の王よ、道中の歓迎は実に熱烈だった。

だがそれも此処まで、これ以上無益な歓迎を続けると言うなら?

無慈悲なる蹂躪戦。無双を始めると、此処に宣言する!」

やって見せる!とばかりに、やはり騎士鎧の近衛兵が動き出す。

だが戦闘行動を取られる前にアンタレスが、

ハンマーのような尾で騎士鎧を薙ぎ払う！

「さて王様、

宣言はした。返答は如何に？」

空の玉座の後ろには扉が有る。

本来ならこの扉の先がゴール。またはラスボスの間へ！と言う処だろう。

だが時限手動生成。管理者のキマグレ一つで、

その鉄板は守られる！と言う保証は無くなる。

全て管理者の匙次第。だから今度はコチラが煽った。

「……………これが答えか、

宣言はしたからな？」

扉を開けた先に在った光景は、

落とし穴にハマられて、大迷宮に入らされたスタート地点。詰り入口。

スタート地点に戻る罠だった。と言う事だろう。

御丁寧な事に、いつも通りの煽り文句の看板も新設して有るが？

それももうどうでも良い。宣言は済ませたからだ。

「理不尽には更なる大理不尽を！と言う良い言葉が有る。

水晶。こんな時に使える手札は、有るか？」

『有るわ☆』

†

「なんなの、これはあぁっつっ!!」

その時、全ての勝敗が決した。

ライセン大迷宮から、一切の魔力が枯渇した。減衰では無く枯渇。

如何にライセン大迷宮が物理トラップの宝庫でも、魔力駆動の要所は有る。

それは大迷宮の司令官の命令系統。迷宮の手動生成の命令手段だ。

時限自動生成の手段もやはり存在したらしい。

だが管理者のキマグレで動く手動生成を完全に封じた。

管理者の正体、ゴーレムも魔力駆動だったからだ。

|||||

技能：



真名看破・啓示・世界の裁定・枯渴結界

・コネクト・アルマノクス召喚・永劫の誓い・生成魔法・言語理解

枯渴結界（マギアコナトス）

世界から魔力が失われようとも、魔術師は魔法を忘れられ無かつた。

ならば世界もまた、魔力を求めよう。

効果／

マギアコナトスの裁定者（ルーラー）の固有クラス技能。

魔力が枯渴した結界世界、マギアコナトスを限定創造する。

このマギアコナトスでは、

アルマノクスを駆る選ばれし魔術師以外は、一切の魔力行使が不能となる。

アルマノクス召喚

効果／

水晶の固有技能。

水晶のアルマノクス、ドロセラノクターンを召喚可能。

但しマギアコナトス外での運用には、莫大な魔力を消費する。

ライセン大迷宮の全域が、枯渴結界マギアコナトスに囚われた。その瞬間から、ライセン大迷宮は沈黙した。

物理稼働のトラップは？確かにまだ生きていた。

だが此処は既にマギアコナトスの中。水晶の掌の中だ。

トラップの配置。稼働範囲。配置変換可能範囲。全てが掌握された。

それは大迷宮その物も変わらない。

大迷宮の構造。構造変換パターン。構造変換可能範囲なども全てだ。

重ねよう、ライセン大迷宮は沈黙した。

位置情報的には？やはり謁見の間の奥だった。

そこに玉座の間が有る。

玉座の間は、何ともSF系に出て来そうな動力区画のような場所だ。

本来なら神代魔法の重力魔法で、

ブロックなども浮遊するそれらしい神秘空間だった筈だが、

マギアコナトスに囚われた事で、一切の魔力が枯渴した。

ブロックや、配置されていた護衛の騎士鎧は全て墜落。沈黙。

本来ならこの玉座の間で待ち受けるボスの、

大型の騎士鎧のゴーレムも、稼働不能となっている。

この大型ゴーレムが、ライセン大迷宮の管理者。

解放者ミレディ・ライセンの記憶を、AIのように残した存在だった。

「その初めて見るゴーレムの力？」

魔力が一切使えない！このゴーレムまで動けない何て!!」

結界内で一切の魔力を枯渴させるマギアコナトス。

そのマギアコナトスで、自由に魔力を行使可能なアルマノクス。

水晶のアルマノクス、ドロセラノクターン。

アニメ通りのドロセラノクターンが、

身動き一つ出来ないミレディ・ライセンのゴーレムを見下ろしている。

まあアニメと違う点を述べるなら？

ドロセラノクターンの内部が、当然のように複座になっている事だ。

水晶が操縦する後ろに、新たに複座シートが設けられている。

そこに座っている訳だが？ 特等席で観戦出来るだけで、

特に出来る事は無い。文字通りの観戦モードである。

「魔術師が見続けた千年の夢、

貴方も堕ちてしまったの、もう眠りなさい。

オーバードスペル【忘れられない記憶】」

ドロセラノクターンの周囲に展開された、無数の杖状の浮遊砲台群。

その一つ一つが魔力を求め、敗れた千年の夢の欠片。

その全てを操り、滅びの砲火とする。

それが水晶のオーバードスペル。【忘れられない記憶】

滅びの砲火は放たれる。

魔力が枯渇し封じられて身動き一つ出来ないミレデイ・ゴーレムに、

情け容赦無く光りの砲撃が降り続いた。

水晶得意の全方位からの飽和砲撃だ。

やっている事は、

前回おふぎけでファン〇ル♪とか言っていたアレと、

全く同じ術式だが、出力と飽和密度のケタが違う。

しかも今はローブを纏った魔術師形体なので、

最終形体の全力状態では無い。これからまだ上が有る。

正にラスボスの貫禄である。

だがミレデイ・ゴーレムはそこまで耐え切れ無かった。

ミレデイ・ゴーレムは蒸発して消滅した。欠片の一つも残らない。

判定を待つ必要も無い、水晶の圧倒的勝利だ。

戦いを終えたドロセラノクターンは、最奥のブロックゲートの前に着地。

そこで召喚は解除。ドロセラノクターンを還す。

マジアコナトスで掌握した大迷宮の情報では、

このブロックゲートの先が、ミレデイ・ライセンの私室。

神代魔法／重力魔法の修得場所になるらしい。

強制突入させられた大迷宮だが、

クリアしたからには、貰える物は貰って行く。

「行きましょう、マスター」

「そうだな？まだ最後の仕上げが残っている」

17 たとえ物語が終らなくても

「やつほー、さっきぶりーミレデイちゃんだよー!」

ブロックゲートを潜り、抜けた先でそれは待っていた。

ローブを纏った小柄な人型ゴーレム。

マジアコナトスで掌握した事前情報で知っていたが、

そうでも無くとも最初の一言で解る。

こいつがライセン大迷宮の管理者、解放者ミレデイ・ライセンだ。

「調子に乗るな、ボケが!」

「ぶべらっつ!!」

そしてあの煽り看板の作り主であり、

王都へ急ぐ処だと言うのに、大迷宮に強制突入させやがった腐れ外道である。

情け容赦無くミニ・ミレデイの足を払って転倒させた処で、頭部を踏み潰して黙らせる。

「こつちも暇人じゃない。まずは神代魔法とクリア証を渡せ!」

「いたたたた、」

その前に訊いて良いかな、何の為に神代魔法が欲しいの?」

「基本故郷に還る為だ。」

既にオルクス大迷宮を攻略して、そちらの事情も把握している。

例のカミサマに異世界から強制召喚された。

今は解放者の神代魔法をアテにして、旅をしている!」

「あの腐れ神を殺してくれないの?」

「異世界から強制召喚をやらかすカミサマだ。」

妨害や再召喚の危険性は把握しているし、決戦も考慮している。

だがまずは帰還の手札だ!」

それでひとまず納得したのか、

神代魔法の重力魔法はふたりともゲットして、クリア証の指輪も受け取った。

「結晶精霊何て、規格外の助っ人が居たんだね?」

適正は間違い無くMAX!主君の方も中々のモノだよ?」

「それはどうも、なら次は情報だ。」

他の大迷宮の正確な位置を吐いて貰う。

それと手に入る神代魔法の内容もだ」

「……………それぐらいなら良いけど、

神代魔法は目当ての物じやなくても、全て集める事を勧めるよ？

それが主君の願いに通じる筈だから」

「答えを全て言う気は無しか。」

喋り過ぎると、他のクリア判定に影響が出るパターンか？」

他の大迷宮の位置は訊いた。手に入る神代魔法の内容もだ。

全て手に入れるのが推奨展開なら、全てを巡る必要が出て来る。

「王都の神山にも大迷宮が有るのか、だが聖教教会の総本山。」

あのカミサマを信仰する宗教だ。別に構わないか」

これから行く王都の神山にも、大迷宮が有るのが解つたのは大きい。

やはり情報は大事だと実感させられる。

「他のクリア報酬の鉱石類は良く解らないな。」

サンプルにいくつか持って行って、後はハジメ待ちだな？」

「ハジメ？」

「仲間の錬成師だ。」

後で此処にも攻略に来るだろう」

「へえ、他にも挑戦者が来るんだ！

それは楽しみかな☆」

チャライポーズを取ってやる気を出すミニ・ミレディ。

だがそう簡単には行かない。

「悪いがそうは行かない。お前は今日、此処で終る。」

そうなればライセン大迷宮の試練は時限自動のみ、難易度激減だ」

神代魔法修得の魔法陣を起動させる為、

既にマギアコナトスは解除済。魔法が使える。

討ち漏らしが無いように、使う魔法は【陽影】既にキルゾーン内。

「ちよっ何で!？」

「言っただろう？試練の難易度を下げる為だ。」

それに大迷宮では命のやり取りをして、勝ったのはコチラ。詰り勝者が敗者に何をしても、当然の権利!

歴戦の解放者たる者、戦場の理を知らないとは言わないな?」

「ま、待ってよ! 私ほ」

「まだ生きたい、か?」

人の姿を捨ててまで生きて、何をしたいと?」

ミレデイの言い分は、

要するに腐れ神をブン殴りたい。殺したい。仇を討ちたい。一矢報いたい。

このままで終りたくない。それに尽きる。

世界に等しい神に反逆して、人の姿を捨ててまで在り続けた。

終らせる事が出来無かった物語を、終らせる為に。

エンディングまでプレイするのは大事だ。嫌いじゃ無い。

魔法を解除する。

「主君?」

「なら取引だ。」

条件を飲むなら、見逃してやる」

「聞かせて」

「もしカミサマとやり合うハメになったら、

一矢と言わず、二矢でも三矢でも止めを刺しても良いから参戦しろ。

ちよつと肉壁になり来い、ミレデイ・ライセン」

†

「酷い目に遭った」

何とか無事に地下水路から脱出する。

やはりミレデイは腐れ外道!それを再確認した。

腐れ外道のミレデイは、結局取引に応じた。

カミサマとの最終決戦には、必ず馳せ参じる!とテンションを上げていた。

仮定の話だ。と言っても応じない。終いには、

「戦うよ。主君が主君である限り、君は神殺しを為す」

「主君は主君の思った通りに生きればいい。君の選択がきつと、この世界にとつての最良だから」

などとシリアスモードに移行する始末。

最後に出口は何処だ？と訊くと、ヤツは躊躇わずその紐を引いた。

「大峡谷の外まで出る直通ルートだよ」

町も近くだから感謝してね☆」

オイそれは！と思った時はもう手遅れ。

マジアコナトスの情報掌握で、その存在は把握していた。

だがこのタイミングで！と言うのは在っただろう。油断である。

床の感触が消失して落下！その上激流に飲まれる。迷宮排出のト
ラップ。

助かったのは、いつも通り水晶のおかげだ。

咄嗟に結界を張って護ってくれた。本当にいつも助かっている。

「下手に女を口説いた罰かも？」

少し妬けるわ☆」

「止める。アレは趣味範囲外だ」

「……………なら、私は範囲内？」

まさか本当に妬いたとでも？水晶が？

だが確かに水晶から、不安の影を感じる。

「水晶を手放すとか、欠片も在り得ないからな？」

正直アレが口説きに入るのか？とか、

毎晩やる事やっているとのか？とか、

言いたい事は有った訳だが？

目の前で少し不安の影を宿した水晶を見ると、何も言えなくなる。

だから言葉の代りに、水晶の唇を塞いだ。

もう夜には何度もした行為だが、何処か新鮮な気持ちになる。

〓〓〓

中々見れない水晶のテレ顔レアショットです！

うん、またしたくなって来た☆

水晶を顎クイして、キス体勢に入る。抵抗は無い。

よし、行こう！と言う処だったが？

「わっわっ、何?! 何ですか、この状況!?!お外なのに!」

「あら? 貴方達……………」

何やら観客の声が聞こえて来る。

そう言えばミレディは、町の近くに出る。と言っていたか?

結局観客の人達から、

やはり此処がブルックの町の近くだと確認。

町まで戻る処らしく、同行させて貰う事に。

「さて、どうするか?」

町の入口には検問が有る。

何でも? 身分証になるステータスプレートのチェックが入るらしい。

プレートは有る。が、水晶の分は無い。当然である。

ハッキリ言って、水晶の正体をバカ正直には話せない。

神結晶の結晶精霊とか! 無駄な争いの元である。

此処は穩便に、適当な事情説明でOKだろう。

或いは水晶に頼んで、検問担当者に幻術や暗示を掛けるのもアリだ。

「一番スマートなヤツで良いだろう。

水晶。暫くコネクトを頼む」

「町に入ったら、ショッピング!」

ウインドウじゃ無い方ね☆」

「……………先に資金を調達してからだ。

金が無いと何も買えない」

一番スマートな人数減らしで行く事にする。

幸い此処まで一緒だったキスシートの観客一同は、

住民用の入口の方に行つて別れている。

並んでいた外部の人間用の列を一旦離れて、

コネクトを済ませてから、列の最後尾に戻る。

検問は問題無く通過。

レベル:100は流石に無駄に目立つかと思つて、半分の50に隠蔽。

基礎ステータスも適当に半分にして、スキルは全て隠した。その後まずは冒険者ギルドに向かう。

手持ちの魔石やら魔物素材やらを売却して、資金を得る為だ。

因みにギルドに向かう前に、コネクトは人気の無い場所で解除。

久々の町到来で、水晶の機嫌は→→である。

ギルドでの換金も問題無く終った。資金ゲット！

ついでに何かと特典の付く、冒険者の登録も済ませる。

ステータスプレートにその旨が登録された。ビギナーの青ランクだ。

その日はギルドの（多分歴戦の）受付から勧められた、風呂付きの宿で休む。

やはり風呂やベッドは、水晶手製の方が上等である。

食事は流石に久々の異世界飯に喜びを覚えた。

夜は念の為、防音結界を頼む。

異世界の宿の壁が、どれだけ信頼を置けるか？と言う話だ。

色々とやる事が有り、結局は流れて翌日。

今日は旅の準備と、水晶のショッピングに付き合う日だ。

「行きましよう？」

「楽しみね☆」

「マズいな、

これ確実に長大なヤツだワ☆」

予想よりもマトモだった。と言った処だと思う。

原因は水晶が贅沢だったからだ。

水晶はアホのように、

服やら靴やらアクセサリーやらを買い貯めるタイプでは無かった。

水晶は、デザインと機能を兼ね備えた名品を求めたのだ！

そんなレアモノ！普通に店売りしている筈が無い！！↑ゲーム脳判定。

ハジメに依頼した方が、まだ現実的な選択だった。

「ハジメは服も錬成出来るのかしら？」

「機能美溢れたアーティファクトの服なら行けるかもな？」

だがデザインはユエが担当。

解放者の住処で着ていた服は、全部ユエの御手製だ」

「私達も、生成魔法で服を作ったりは？」

「魔法の腕より、裁縫やら被服やらのセンスが要ると思うが？」

結局水晶は？美的感覚が日本人よりだった。

ファンタジーのデザインだけの服が、中々受け入れられないらしい。

機能勝負なら、自前の初期装備の方が優秀だった！（笑）

「デザインだけでも、もっとマトモな服は？」

「レアドロップの世界だな」↑ゲーム脳判定。

肌着やら下着やらの替えを買うだけで、終りそうな雲行き。

だが転機は訪れた。クリスタベル服飾店である。

「あらくん、いらっしやい♥来てくれて、おねえさん嬉しいわあ、

たくぷりサービスしちゃうわよおくん♥」

そこに所謂漢女な店員が居た。

だが流石だ精神支配無効！漢女と突然遭遇しても、精神汚染は無
い。

そして水晶は流石の年長者！欠片も動揺の気配が無かった。

と言うか先日の子スシシーンの観客に、

あんな感じの漢女が居たような気がする。

水晶は漢女な店員、クリスタベルのお勧めで服を見ている。手持無沙汰になった。

この店にはアクセサリーのコーナーも有る。

そちらでも見て、時間を潰すか？

「これは！」

と思ったが、一着のドレスが目にとまった。

黒い肩出しのドレスだが、直感だった。

これはきつと歌姫に似合う。

このドレスを着た歌姫を見たい！という衝動に駆られる。

いきなりドレスのプレゼントとか重いかな？とか、

ドレスのプレゼントって、脱がせたい！というメッセーじだったよ
うな？

と言う発想は無い。ただこのドレスを着た歌姫が見たくなっただ
けだった。

「これも良い気がする！」

調子に乗ってアクセサリーも選んだ。

薔薇の髪飾りだ。

少し大きめで、薔薇の名に恥じない派手さだが？

歌姫の銀髪で咲き誇るなら、アリだろう。行ける！

更にブーツも選んだ。

此処まで行くと、もうノリノリである。

サイズを外していない自信も有る。

いざとなったら生成魔法で微調整だ。素直に王都の仕立屋で直し
ても良い。

王都への道が拓けて、何処か気が弛んだのかもしれない。

気持ちの良い衝動買いだった。

クリスタベル服飾店を出て、旅の準備を進める。

水晶とふたり、町を歩いて居ると？

愚かなナンパ野郎共が、水晶に群がって来る。

クリスタベル服飾店で買った、新しい服の効果がもう出ている！

水晶は暫くの間、面白いゴミを見る目で対応していた訳だが？
厭きたらしい。ただのゴミを見る目が変わった。もう良いだろう。

【恐慌】（フィアー）

小声で魔法を発動。

【恐慌】 幻覚を見せる。恐怖付与。

この魔法は、幻覚を見せて恐怖の状態異常を付与するモノだが？
幻覚の内容を設定出来る。

趣味に走った。趣味に走って、

クトウルフっぽい幻覚を脳に垂れ流してやった。

リアルSAN値を削られて、夜中にいあいあ言い出すが良い！

「アイデアロールまで成功したか？」

ナンパ男共は全員倒れた。

SANチェック処か、アイデアロールまで成功したのかもしれない。
い。

一時的狂気の発症である。

「どうするの？」

「放って置いても治るだろう？数時間で」

そう言うケースも有った筈だ。

不定の狂気を発症していても、知った事では無い。

ナンパ男共から離れる。

「水晶の新しい服が、似合い過ぎた結果か？」

「……………言うのが遅いわ、マスター☆」

水晶が腕に抱き付いて来る。

どうやらギリギリセーフか？

ドレス選びにはまり過ぎて、

水晶の新しい服を褒めるのが遅れた。危ない処だった。

†

その後は順調に旅が進んで王都到着！

と言っても、まだ王都を囲う城壁の外だ。

このまま正規ルートで王都に入るなら、

ブルックの時と同じく、検問を抜ける必要が有る。

当然！ステータスプレートの子エックが入る。身元確認だ。

「此処からは、隠密行動で行く」

だがこれから王都でする事を考えると、自分は居ない事になったままの方が好ましい。

王都の検問がどれだけ厳しいか解らないが、

コチラはオルクス大迷宮で、生死不明になった神の使徒の一人だ。

清水幸利の名前が、チェック対象に含まれていてもおかしくは無い。

「往年のスパイ映画も、バカに出来ないな？」

まず水晶にコネクトを頼んだ。

光学迷彩の不可視化の魔法も掛けて貰う。

いつぞやはハジメ達に、

夜の行為を見せない為に使っていた魔法だ。

そして検問の順番待ちをしている馬車に隠れた。

検問突破。王都へ潜入を成功させる。

そこから亜人街に急ぐ。

亜人街の、あの枯れた噴水の前だ。

思い返せば何と言う接点の薄さだろう。

約束？破られて当然だ。いつ頃戻れるかも話していない。

行き先はあのオルクス大迷宮だ。

とつくに死んだと思われてもおかしくは無い。

だと言うのに、また逢えると根拠も無く信じていた。

「約束、果たしに来た」

「幸利」

果たして歌姫はそこに居た。

他に誰も居ない枯れた噴水の前に、歌姫が居る。

歌姫はコチラを認識すると、飛び込むように抱き付いて来る。

腕の中の彼女を見る。間違い無く自分が知る歌姫だ。

「お帰りなさい、幸利」

「ああ帰って来た。帰って来たぞー！」

『良かったわね、マスター☆』

「???

コチラが一大イベントをクリアしたかのような盛り上がりを見せる中、

流石に不思議そうな顔をする歌姫。

そう！とうとうクリア報酬を受け取れる時が来た!!

「名前、歌姫の名前を聞かせてくれるか？」

「そうだったわね？」

ユキナ。私の名前はユキナよ」

ユキナ。

ユキナが、腕の中で微笑む。

帰って来た。

自分は無事ユキナの元に帰って来たのだと、この時実感した。

↑

その後は暫く、再会を喜び合った。

ユキナと別れてからホルアドへ行つて、

オルクス大迷宮に挑んだ顛末を伝える。

流石に世界の真実やら、水晶の事はまだ伝えていない。

今はただ、ユキナとの再会を喜びたかった。

「今度はユキナの事が聞きたい処だな？」

「私？私は……」

歯切れが悪くなったが、ユキナは話してくれた。

ユキナと別れた後日、怪しい二人の男と接触が有ったと！

二人。水晶の啓示とは人数が違うが？

例のユキナを連れ去る奴で間違い無いだろう。赤毛と言う符合する点も有る。

その二人の男。

一人は体格の良い金髪の戦士風で、

この戦士風の男とは顔を合わせた程度で、特に話もしていないとの事。

問題はもう一人の赤毛の方で、こいつが水晶の啓示に出たヤツだろう。

耐性貫通

効果／

耐性技能を貫通して無効化する。

無効技能を貫通する事は出来ない。

蒼海の羅針盤

効果／

海人族の種族技能。

海で決して方位を誤らない。水中で呼吸可能。暗視可能。

ローレライの歌声

効果／

海人族が稀に発現させる固有魔法。

歌唱極大→魅了付与。

セイレーンの誘い

効果／

海人族が稀に発現させる固有魔法。

精神干涉系全状態異常付与。

|| || || || ||

|| || || || ||

メロウの寵愛（使用済）

効果／

海人族が稀に発現させる固有魔法。

初めての愛を捧げた者に加護を与える。

加護の内容は、愛の在り方によって異なる。

|| || || || ||

『ただでさえ珍しい固有魔法を、3つも発現させているわ。

でも問題は「セイレーンの誘い」ね？』

他にもツツコミ処は有ると思うが？

取り合えずユキナの歌を、誰も聴こうとしない理由はそれか！

下手に精神支配無効が在ったから、気付か無かった。

だがこれで決まりだ。

アレは、固有魔法にも効果が有るのか？

「ユキナ、

ユキナの歌を聴かせて欲しい」

「でも私は、

私の歌は………」

返って来た水晶の答えはYesだ。

ユキナが歩む筈だった道は、此処から始る。

「大丈夫だ。

ユキナなら行ける！」

「解ったわ、

聴かせてあげる。私の歌を！」

19 Roselia II

演奏が終る。

割れんばかりの大歓声と、アンコールを望む声が響く。

今日も彼女達の、Roseliaのライブは大成功で幕を閉じた。

「お疲れ、

FB！今日も素晴らしかった」

「ありがとう。

幸利もお疲れ様」

ユキナを先頭に、Roseliaの面々が楽屋に戻って来る。

ユキナはいつかの、

ブルツクのクリスタベル服飾店で買った黒いドレスと、

薔薇の髪飾りで飾ったステージ衣装姿。

何と言うか？すっかり見慣れた姿になった。

「どうしたの？」

「いや、ユキナのステージ衣装姿は？」

今日も似合っていると思つてな、少し見惚れていた」

「バカね、もう何度も見ているでしょう？」

と言いつつも、微笑むユキナ。

他のメンバーから、惚気るのは解散してからね？

と言う声が聞こえて来る。

Roseliaのメンバーを見る。

突然だが？此処でユキナ以外のメンバー紹介と行こう！

まずはベース担当のリサ！

商家出身の娘で、パツと見ギャル風の緩衝材系ムードメーカー。

コミュ力が高く女子力も高く、嫁力も高い侮れない女だ。

居ると助かるイイ女。それがリサである。まず手放してはいけな

い。

それは冒険者パーティーでも、バンドでも変わらない。

ライブでも、ソロよりセツションで真価を発揮するタイプ。

実は前世でもユキナと親友同士だったのでは？と言うぐらい、

波長が合ったのか？仲良くしている。

何でも世話を焼きたくなるタイプらしい。リサ自身は世話焼きである。

次にギター担当のサヨ！

裕福な一般家庭出身の娘で、委員長系のしつかりさんだ。

以前は双子の妹と共に、宮廷楽士を目指していたらしいが？

妹は突然！吟遊詩人になって旅に出た。訳が解らない姉。

だが結局、二人は姉妹だった。

宮廷楽士とは？貴族や教会の干渉を受け易く、自分の音楽を貫け無い。

姉は妹の決断の意味を知る。

やがて妹と同じく、フリーの吟遊詩人の道に進んだ。

サヨの演奏は機械のように、氷のように正確だった。

個性が無い。そう言うヤツも居るかもしれない。

だかこれも、サヨの持ち味だと思っている。

その次はキーボード担当のリンコ！

貴族出身の娘で、清楚で内向的なインドア系だ。

だがその経歴は？どう考えてもアクティブキャラである。

まずは貴族／市井を問わずピアノコンクールに出場し続けて、華やかな結果を残し続けた。

教会主催のチャリティーコンサートにも、足を運び続けた。

勿論鑑賞では無く、演奏の方で！である。

内向的な筈のリンコを、何がそうさせるのか？

リンコの夢は冒険者だった。

冒険者になって、世界中を旅したいらしい。

リンコは貴族だ。いつかは結婚して、家を守る立場になる。

リンコは人気者だった。既に何件もの求婚を受けている。

だがリンコは冒険者に憧れていた。

物語のような旅をしたいと！胸を高鳴らせている。

コンクールやらコンサートやらに出るのも、

外部と接触の機会を持って、

密かに冒険者ギルドの初心者講習を受ける為。

リンコは本気だ。本気で、自分の夢の為に進めるヤツだった。時折ポロリと、コチラがゲームネタを披露すると？

何か自分が知らない冒険譚かと？続きをせがんで来る。

実はユキナ以外では、一番話をするのがリンコだったりする。

因みにユキナ以外のメンバーのステージ衣装は、リンコ作である。

ユキナの黒ドレスをモデルに、お揃いの物を作った。

薔薇の髪飾りは、水晶が生成魔法で人数分用意した。

ドレスは無理だったが、アクセサリーは行けたらしい。

更にその次はドラム担当のアコ！

貧民街出身の娘で、現役の冒険者だ。リンコの親友でもある。

リンコとは、リンコが出演した教会のチャリティーコンサートで出逢った。

日々の生活の為！

既に冒険者として活躍するアコは、リンコ的に眩しく見えたらしい。

因みにアコの冒険者ランクは紫。ビギナー卒業済ランクである。

そうして最後にユキナを見る。担当はボーカル。

自身の強力な固有魔法「セイレーンの誘い」の効果で、

多重状態異常を歌に乗せてしまっていた。

水晶の話では？Lvを上げて経験を積みれば解消するらしいが、

固有魔法を暴走させているようでは、経験を積む機会が無かった。

と言う訳で、水晶の「世界の裁定」で「セイレーンの誘い」を封印した。

この試みは見事成功！ユキナが一曲歌うだけで、観客が押し寄せた。

その時のユキナの驚いた顔は見物だった。そして延々と続くアンコール。

ユキナの歌姫としてのロードは、此処から始る。

それから一ヶ月近くが過ぎた。

ユキナにも共に響き合う仲間が出来て、バンドを組んだ。

Roseliaの誕生である。

コチラはスケジュールとメンバーのメンタル管理。雑用と楽器のチューニング担当。チューニングは生成魔法を利用している。

やっている事は、既にマネージャー業だ。

因みに水晶は照明と音響とメイク担当。照明と音響は魔法。

メイクは生成魔法で作った自作の化粧品を使用。中々の評判である。

神代魔法を探す旅に出て、何故バンド活動？

と思う処だろうが、別にそちらも遊んでいた訳では無い。

今は芽が出るのを待って居ただけ。

決して、ユキナの笑顔を見続けていたかつたからでは無い。

次の大迷宮は隠密戦になる。深く静かに侵攻せよ！だ。

†

「陰気な女かと思っていたが、変わったモノだな？」

今日のライブも終って夜。

もう遅いので、

Roseliaのメンバーを送ろうと言う時に、そいつは姿を現した。

「貴方は……………」

「ミハイルだ。まあ互いに興味は無いだろうか？」

返事を聞きに来た。解るな？」

体格の良い戦士風の金髪。

主犯格の赤毛の取り巻きの方だったか？

水晶の啓示では？タイムオーバーが一ヶ月後だった。

王都に来て、一ヶ月バンド活動をしていた訳だから？

時期的には符合する。

本来の歴史では、此処でユキナが行ってしまう訳だが？

「お断りするわ。」

本当は気付いていたの、貴方達と行ってもそこに居場所は無いって。

貴方も本当は辛かったでしょう？」

「まあな？」

それはユキナの状態異常ラッシュの事か！

しかも耐性貫通付きだ。これはキツイ。

どうやって耐え続けた？それとも治し続けたのか？

鼓膜を破る程度では、恐らく防ぎようが無い筈。

「こんな私にも居場所が出来たの、

此処には私の歌を聴いてくれる人達が居て、仲間が居る。

着いて行けないわ」

「オマエの力は強力だ。敵に回した時の恐ろしさは体感済。

来ないなら始末するように命令されている。悪く思うなよ？」

テンプレである。そして話が長い。

手早くコネクトも済ませて、戦闘体勢に入る。

だが気に入らなかった。せっかく再会出来たユキナを始末だと！

気付いた時には、ユキナを背中に庇っていた。

「何だオマエは？」

「ユキナは渡さない」

初めて視界に入った。と言う顔のミハイルとやらに告げる。

ダメだった。

またユキナが自分から離れるのを、耐えられる気がしない。

【深遠】（シンエン）

此処は貧民街とは言え王都で、相手は魔人！

騒ぎを大きくするのは今後の為にNG！確実に静謐に始末する。

闇の結界が周囲を覆い隠す。

この結界内では視界を奪うだけでは無く、

平衡感覚や魔力の感覚も狂わされる。

詰り気配感知や魔力感知の、サーチ系が無効となり、

照明魔法や、灯りになるアイテムも闇に吞まれる。

更に音も外に漏れない。徹底した隔離結界だ。

「皆、ハッパッパ」

この闇の中で必要なのは？

照明でもサーチでも無い。暗視である。

ユキナが暗視スキル持ちなのは把握していた。

予想通りユキナが、

他のメンバーの手を引いて、暗闇の中を撤退して行く。

「この闇の中で、闇魔法を凌げるか？」

答えはNO！

この魔人、大したヤツでは無かったか。と言うのが感想。

【穿針】で全方位からハリネズミにして、【陽影】で止めを刺した。

水晶にも調べて貰ったが、やはり魔人は焼失している。

結界解除。静謐なる始末完了。

これなら警邏の者すらこないだろう。

「だが魔人は戻らない。次が来るかもしれない。

そろそろ王都を出る準備の時間だ」

ユキナの、Roseliaのメンバーの無事を確認する。

突然の襲撃に驚いてはいるようだが、混乱は無い。

逞しくて結構な事だ。

「突然で驚きましたが、マネージャーは凄いですね？」

「そうだね？ユキナも冷静だったし☆」

「☆☆」

「うわっ、リンリンが目を輝かしてる」

現役冒険者のアコが？一番動揺しているような気がする。

だがそれより、今後の予定だ。

「ユキナ、

次の休みに神山（教会）に付き合っただけだ」

「／／／」

「おおお〜っ、やつるう」

「畳掛ける心算ですね」

「ツツツ!!」

「リンリン、リンリンしっかり〜」

「何やら妙に盛り上がっているな？」

ユキナも頬が赤い気がする。

何が起きたか解るか、水晶？

『言わない方が面白そうだから、黙っておくわ☆』

水晶が黙秘権を行使！

水晶とユキナは、割と仲が良い。いじり相手として気に入ったらしい。

「まあいい、次の休みで決める！」

〃〃〃

ユキナはずっとこんな感じだった。

ユキナだけでは無く *Rose lia* の面々が、

神山（教会）へユキナを誘うのを見て、告白の次はプロポーズだよ

！

と盛り上がっていた事実を知るのは？後の話である。

↑

オリキヤラ&クロスキャラ設定

2 / 歌姫↓ユキナ（湊友希那）

銀髪の歌姫。海人族。半クロスキャラ。

友希那からキャライメージを貰った半クロスキャラ。

本人が異世界転移したり転生した訳では無く、異世界人！と言う設定。

その優れた歌声で歌姫として評価されるモノの、

三つの固有魔法を発現して、故郷であるエリセンを追放される。

特にセイレーンの誘いは凶悪であり、誰もユキナの歌を聴く事が出来ない。

流れ着いた王都の亜人街で、清水（挫折）と出逢う。

清水（挫折）は精神支配無効の保有者であり、

ユキナの歌を聴ける存在だった。

だが訪れた幸せな時間にも終りはやって来る。

清水（挫折）は、オルクス大迷宮に挑む。命を賭けた挑戦。

せっかく出逢えた初めての相手は、

もうこれで逢う事も無いかもしれない。もう最後かもしれない。生きて帰る事が出来ても、

大迷宮攻略と言う大事の中で、自分の事など埋没して忘れられるかもしれない。

それは嫌だと、どうしても手放したくない!と思った。

こんな追い込まれた時、皆さんの中に居る友希那はどう出ますか？

↓無茶をする。

私の中に居る友希那はこう出ました。

ユキナには、頼れる幼馴染も居ません。

04の夜の展開は、やらかしコースでしたが？

清水（挫折）は元々他人に興味の薄い人間です。

何事も無く別れていれば、此処までの執着は無かった筈。

互いに逢えない間に想いを募らせました。

04や05を投稿した際は、やらかしたかな?と思ったモノです。

ですが05の朝!清水（挫折）やユキナも、

同じように悩んだのでは?と思いました。

今では良い想い出!と言うヤツです。

04の夜の事を思い返す二人も、

似たような気持ちのような気がして来ます。

20 神山制圧作戦

「聖女レティシア。汝に新たな試練を与える」

「はい、教皇殿下」

何も知らない自分。何も知ろうとしなかった自分。

ただ神に祈りを捧げていた自分。ただそれだけで満たされていた自分。

滑稽ですね。今ならそれが理解出来ます。

神山の聖教教会、教会施設の地下深く。

そこに新たな未踏破区画が発見されたと、教皇殿下から告げられました。

そこで私に、調査の命が下されます。

魔物退治の経験なら有りました。けれど未踏破の施設探索など初めてです。

これも試練。全ては御心のままに。

そこに絶望が眠っている事を、まだ私は知らない。

未踏破区画の調査が始まります。

未踏破区画は一部崩落が有り、今回の新区画発見に到ったと聞いています。

本来の入口は別に有るらしく？そこは封印されたままだと。

新しく繋がったルートから、未踏破区画に入ります。

そこで私は真実を知る事に。

まず調査隊の他のメンバーが倒れました。

皆盛んに、一心不乱に神に祈りを捧げています。

それはもう狂っているかのよう。いえ、もう狂っていたのかもしれない。

無理も無い。

未踏破区画の調査が始り奥に進むに連れて、

直接頭に流れ込んで来る。

今まで知らなかった世界の記憶が。

人類と魔人と亜人の戦争の記憶。

互いに殺し合い憎しみ合う、血と汗と涙と鋼の記憶。けれど時として手を取り合うも、

一部の愚か者の手で血の時代に戻る。その繰り返し。

それを、その愚かな歴史を！神は天上より愉し気に見下ろしていました。

それが神の正体だと！この記憶は語ります。

「嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だあああつつつ!!!」

けれどその記憶は余りに鮮明で、!!!」

救いを求める声が、無残に散って行く命が、何も護れ無かった慟哭が、

それが真実で在ると告げていました。

「ああああああアアアツツ!!!」

認めてしまった。これは真実で在ると。

そしてまた流れ込んで来る記憶。流れ込む力。

私は立ち上がる。

気付けば金の髪は灰に、肌は白く堕ちていました。

「嫌な記憶。嫌な世界。」

皆死んでしまえば良いのに」

そう口にするも、今日も生きる為に戦う。

寢床から起き上がって戦仕度を整える。

今日は近隣住民から、魔物退治の依頼が入っています。

破戒聖女の出番です。

+

「待たせたかしら？」

「体感的には待った気がしない。

ユキナの私服姿を妄想している内に、本人が来たからな？」

「そう、それでどうかしら？」

「知的な落ち着いた感じが良いと思う。

似合っている」

「ありがとう、

じゃあ行きましょっつ。」

ユキナと手を繋いで王都に行く。

泊まっている宿は同じだと言うのに、デート風に待ち合わせて外出。

だが残念ながらデートでは無い。水晶ともコネクト済。

今日はこれから神山の大迷宮、バーン大迷宮攻略の時間だ。

「それで。神山に行くのよね？」

「ああ、素直に正面からゴンドラで行く。

上の方では既に手を打って在る。

下からは目立たないように、カップル設定で行く」

「カ、カップル／＼／」

「昨日も説明しただろうに」

とは言うモノの、テレるユキナが可愛い。

昨夜は色々だった。

まさか大迷宮探索の誘いを、プロポーズのお誘いだと誤認されているとか！

誤認とは言え、ユキナはその心算で誘いを受けた。

そして前回の追手の一件で、

ユキナへの気持ちは自覚してしまっていた。

今日は朝までユキナと一緒にだった。一緒に色々確かめ合った。

「本当に良かったのか？」

神山へのゴンドラに乗る。

上まで偽装に付き合っただけで、

大迷宮まで付き合わせる心算は無かった。

繋いだ手が、無意識に強くなる。茶番だった。

この手を離す心算など無い癖に。

それがもう伝わっているのだろう、ユキナは微笑む。

「私を置いて行く心算かしら？」

ユキナは渡さないって、言ってくれたのに？

今もこうして、離す気なんてないのには？」

それでも危険なのが大迷宮攻略だ。

それでも危険なのが、これからの旅でもある。

だがこの笑顔を、これからも向けられていたいのだと自覚する。
「ああ、もう離す気なんてない。

ユキナを連れて行く。これからずっとだ」

「バカね、最初からそう言えば良いのに」

ユキナを抱き寄せて、口付けを交わす。

この時点で感じ慣れた魔力と視線を感じていたが、直ぐにどうでも良くなって、口付けを続ける。

ユキナの感触の方が大事だった。

「昨日は違うって言ってたけど、
本当になったわね？」

†

「ご、ごめんね？本当に」

一同を代表して謝るリサ。と言うか全員居る。

魔力は感じていた。

どうやら先に、ゴンドラに乗り込んで張っていたらしい。

「幸利も気付いていたの!？」

「途中で気付いてはいた。

だがユキナの感触を優先した。後悔はしていない！」

／／／

結局 Roselia が勢揃いしてしまう。

大迷宮の攻略を、

デートを覗く気分でやらせる訳には行かないが、

もうゴンドラは頂上に着く頃だった。

「よろしいですか？マナージャー。」

今回の件は本当に申し訳ありません。

ですが、確認しておきたい事が有ります」

「サヨは気付いたか？」

「これがただのプロポーズの覗きなら、

私達が謝っておめでどう、と言えば終りです。ですが」

「そこから先は着いてからだ。

その方が解り易い」

もうユキナだけでは無く、Roselia全員を巻き込んでいる。準備の空き時間にバンド活動をやっていたのが、やはり大概だったようだ。

だが間違いだったとは思いたくない処である。

神山の頂上に到着。

ゴンドラを操作していた神官は、直ぐに異変に気付いた。

気付いて直ぐに黙る。いや喋れなくなった。

「全員、離れるなよ?」

「これは何なの?」

神山の頂上は緑の霧に覆われていた。

そこに何の表情も浮かべていない神官達が佇んでいる。

どう見ても非常事態だろう。犯人が此処に居なければ、だが?

「御苦労、アリア」

虚空に声を掛けると、植木鉢サイズの浮遊する花が姿を現す。

従属目録の登録従魔のアリアだ。

この一ヶ月。麓の王都でバンド活動をやっている間、

神山の頂上にアリアを放っていた。

頂上に行く者に憑けて、神山全域をアリアの支配下に入れた。

神山の神官達は、皆アリアの花洗脳の支配下!これで教会の妨害は封じた。

因みに花は?如何にも怪しく頭から生やしてなどいない。

小さい花を、口の中に咲かしている。これなら簡単に気付く事は無い。

情報も抜いている。神山の教会施設には、封印区画なるモノが在るらしい。

そこがバーン大迷宮である事が濃厚。

封印区画に向かいながら、未だ状況を飲み込めない面々に事情を説明する。

「詰りマネージャーは異世界召喚された神の使徒で、

元の世界に戻る手掛りを求めて王都にやって来た。

その手掛りは神山に有って、手加減無し強行策を取った。

と言う事ですか?」

「王都にはユキナを迎えに来たのがメインだが、
大体そんな感じだな?」

「教会が、

エヒト神が戦争を影から操って、愉しんでいると言うのは?」

「突然で信じられないだろうが事実だ。

だから強行策も迷わず取った」

サヨは絶句している。

聖教教会は世界規模の大宗教だ。

それが突然! 諸悪の根源だと言われても、厳しいだろう。

「幸利、これでどうかしら?」

「水の防護膜か」

ユキナは自分の水魔法でアリアの胞子から身を護っていた。

ユキナもかなり強くなった。

何故かライブを成功させる度にガンガンLvが上がって行く。

観客動員数が多ければ、多い程経験値が入っている感じだ。

歌姫の特性的な、何かなのか?

「ユキナさんは聞いていたんですか?」

「海人族はエヒト神を信仰している訳じゃないけど、

それでも神の存在は信じているもの、

サヨの気持ちも解らないとは言わないわ」

「なら、どうしてです?」

「私は幸利に着いて行くと決めたから、

それに、歌は何処でも歌えるでしょう?」

「…………ユキナさんは、

変な処がヒナに似ています」

†

封印区画に着く前、

異世界召喚で最初に訪れた祈りの間（仮）を通り掛る。

そこに教皇イシユタルが居た。

他の神官同様、アリアの花洗脳に囚われている。

「教皇イシユタルか」

コイツは必ず敵になる。此処で確実に始末するべき。だが既に花洗脳の支配下だ。何かの役に立つかもしれない。即座に殺すべきか？利用方を考えるべきか？迷い処だった。

「幸利？」

「ああ、今行く」

だが何にしても、ユキナ達の前で殺すのはまだ早い。祈りの間（仮）を出てから、アリアに教皇の殺害を命じて置いた。今頃は花が、頭を突き破って死んでいるだろう。

封印区画に着く。

封印の名の通り、扉は固く閉ざされている。

だが御丁寧な事に？解放条件がしっかりと記されていた。

「他の大迷宮を二つ以上クリア、か。」

オルクスとライセンのクリア証で行ける」

ライセン大迷宮をクリアしていなければ、無駄足だった計算になる。

だがそもそも、神山に大迷宮が有る事を聞き出したのもミレデイからだ。

「余りミレデイに感謝したくない処だ」

「ミレデイ？」

「真性の腐れ外道だ。感謝の必要は無い」

オルクスとライセンのクリア証で、封印を解く。

バーン大迷宮は試練の挑戦者を受け入れる為、その扉を開いた。「此処からが、真のバーン大迷宮だろう。」

覚悟は良いか？と訊かれて、たった今想定した以上の覚悟が必要だ。

「それでも行くか？」

「えあ、私は幸利に着いて行く。」

「そう決めたから」

ユキナの力強い決意を聞く。

他のRoseliaのメンバーからも、引き返す者は居ない。

バーン大迷宮の攻略が始った。

21 破戒聖女

「今回はメンタルブレイクで来たか」

バーン大迷宮の攻略が始る。

攻略を始め奥に進むに連れて、大迷宮の試練は牙を剥いて来た。それは延々と続く戦争の記憶だった。

憎しみ殺し合う、血と汗と涙と鋼の記憶。

それが実体験の如く、頭に直接流れ込んで来る。

だが此処でも精神支配無効は頑強だった。

本来目を反らしたくなる程の記憶も、戦争映画程度の難易度になる。

「これは相性有利が入ったか？」

『でしようね？』

此処は余裕の有るマスターが、メンタル管理する場面じゃない？」

この調子では、水晶共々ヌルゲー展開である。

だが今回はユキナを始め、Roseliaのメンバーが居る。

このメンタルブレイクに対して、反応は如何に？

「ユキナ、無事か？」

「流石に来るモノがあるわ、

でも幸利は平然としている感じね？」

「対抗スキルが有るからな？」

相性有利が入った。この手の精神干渉には強い」

「他の大迷宮でも、こんな感じだったの？」

「オルクスは全200階層の広大な大迷宮で、

特に深層100階層は、生息する魔物が鬼畜な強さだった。

ライセンは物理トラップ祭りだな？」

しかも時間経過で構造が変わる。

腐れ外道の精神が形になったような大迷宮だ」

「さっきも言っていたわね？」

ミレディさん、だったかしら？」

「アレは腐れ外道で充分。」

ユキナに逢いに王都へ急いでいる時に、大迷宮に強制突入させたヤツだぞ？」

そう言つてユキナを抱き寄せる。

間に合わなくなつて、この温もりがなくなつていたら？

と言うパターンは、余り考えたくない。

「そんなに、私に逢いたかつたの？」

あの時の気持ちを言葉にするのは難しい。

ユキナを抱き締める力が強くなる。

「…………その、何と言いますか」

「ああうん、解るよ？」

私もちよつと、恋人欲しいなあゝつて思つたし☆」

「／／／」コクコク。

「うわっリンリンの首が凄い事に！」

いつの間にか視線が集まつていた。

特に隠していないので、当然の展開である。

「まあおかげで、

頭の疲れが何処かへ行きましたが」

「そうだね？」

普段なら、リア充爆発しろ！つて感じだけど☆

ありがとうユキナ♪」

「何故かしら？」

余り嬉しくないわ」

探索を再開する。

流れ込む記憶は止まらないモノの、足取りはマシになっていた。

記憶に対して、折り合いが付いたのかもしれない。

探索のスピードも上がる。

「大迷宮で通勤ラッシュか」

『この電車に、復旧の見込みは無いけど☆』

軽口に応えたのは、対抗スキルの有る水晶だけだった。

流石にRoseliaの面々は顔色を悪くしている。無理も無い。

大迷宮を進むと、開けた場所に出た。

大聖堂か何かの類だろう。

その大聖堂が、ゴースト系の魔物で通勤ラッシュを起こしていた。数えるのがバカらしい数のゴーストである。

「これも大迷宮の試練なの？」

「いや、これはガチのゴーストかもしれない」

「ガチのゴースト？」

「これまで散々、神や教会の所業は見て来ただろう？」

その犠牲者が溜まって、今も此処に！と言うパターンかもな」

だが何にしても、先に進むには此処を通る必要が有る。

無双タイムかな？と言う処だが、ユキナの要望は楽器の用意だった。

「祓う心算か？」

悲惨な記憶が続いた後だが、背負う必要は無い」

「それは違うわ」

普段から楽器は、

オルクスの指輪の収納で預かっているのです、此処で出すのも問題無い。

取り出したマイクを手に、ユキナは起つ。

そこに居るのは、起つべきステージを前にした歌姫の姿だ。

「解るの、此処は私達のステージだって。

だから歌うわ、Roseliaの歌を」

突発ライブの準備が整い、Roseliaのステージが始る。

演奏が始り、色々と凄まじい事になった。

通勤ラッシュ状態のゴーストが、凄まじい勢いで昇天して逝く。

ハッキリ言って、あの演奏には退魔系の効果は無い筈。

本当に演奏だけで！通勤ラッシュのゴーストを祓っている。

「行かせない、

此処から先はRoseliaの舞台だ」

中には元気にRoseliaの舞台上がろうとした輩も居たが、そういう輩はコチラで迎撃したり、凌いだりで近づけさせない。だが大部分のゴーストがRoseliaの演奏で昇天して逝く。

ライブが終わった頃には、大聖堂に静寂が戻る。

RoseliaのFULLCOMBO！達成である。

†

「もう二度目だからな？」

同じ話で盛り上がれない」

『マスターは元からでしょう？』

通勤ラッシュを祓った辺りで、大迷宮攻略は山場を越えた。

クリアは厳しいかと思われたRoseliaの面々も、神代魔法をゲット出来た。

やはり通勤ラッシュを祓った事が、大きく評価されたいらしい。

今はバーン大迷宮の創設者、

ラウス・バーンの記録魔法から、真剣に世界の真実を聞いている。

だがコチラは水晶とふたり、

同じ話で盛り上がる事も無くクリア証の指輪を回収。

問題無く手にした神代魔法の具合を確かめていた。

「魂魄魔法か」

『魂や精神に作用する魔法みたいね？』

マスターとも相性が良さそう☆』

元々精神支配無効のスキル持ちだったからな？

そう言う事も有るかもしれない。

「幸利」

「ユキナ、もう話は終わったのか？」

「ええ、皆は少し休んでいるわ」

「今回のライブは圧巻だった。

アレは解ってやったのか？」

「いいえ。でも、やれる気がしたの」

「無茶をする」

「それでも、幸利は信じてくれたわ」

そしてユキナは、

自身のステータスプレートを取り出す。

|||||

|| || || || ||

ユキナ 17歳 女 レベル：100

天職：歌姫

筋力：200

体力：200

耐性：200

敏捷：200

魔力：12500

魔耐：6700

技能：

歌唱

・水属性適正「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+魔力効率上昇」「+

魔力消費減少」

・水属性耐性「+水属性無効」「+水属性状態異常耐性」「+水属性

状態異常無効」

・魔力感知・高速魔力回復・耐性貫通・蒼海の羅針盤

・ローレライの歌声・セイレーンの誘い・メロウの寵愛

・境界の歌姫・魂魄魔法

|| || || || ||

|| || || || ||

|| || || || ||

|| || || || ||

境界の歌姫

ただ一人の為に届けたい歌がある。

歌は世界も越えて、清水幸利に届く。

効果／

ユキナの固有技能。

清水幸利限定の無制限通信。

この通信に音声系技能を乗せる事も可能。

|| || || || ||

|| || || || ||

「これを伝えに来たの、

さっきのでカンストしたみたいね」

「通勤ラツシユの分か、早かったな。

それと、これは固有スキルか？」

「幸利の為だけの歌よ」

『神山に昇った時に、ね』

別のユキナの声が、頭にも聞こえて来る。

この念話のようなヤツが、ユキナの固有スキルか？

そして意味有り気に唇に触れている辺り、

発現したのはゴンドラで告白した時だろう。

そのまま目を閉じて待ち態勢に入ったので、

迷う事無くユキナの唇を塞ぐ。

「態々この念話っぽいので促さなくても、

キス待ちされたら、解るからな？」

／＼／

こうしてバーン大迷宮の攻略は終わった。

だが全てが終る事無く、アリアから緊急連絡が入る。

「侵入者が？」

『迷いが無い感じの動き、危険な相手ね』

何者かが神山に侵入！

支配下の神官達を躊躇い無く始末しつつ、奥に進んでいるらしい。

花洗脳も効果が無い。何らかの対抗スキル持ちと予想される。

謎の侵入者とは、祈りの間（仮）近くの回廊で接敵した。

それは血塗りの聖女だ。そう確信させた。

解り易く、返り血を浴びているからでは無い。

返り血を浴びて、愉し気に口を歪めていたからだ。

「見つけました。

貴方の仕業ですね？」

「ああ、そうだ」

血塗りの聖女は、

ユキナ達には興味が無い様子で、コチラだけに視線を向けて来る。

「教皇猊下も貴方が？」

「……………そうだ」

これは嘘が通じないヤツだな？と悟ってアツサリ肯定。すると回廊に聖女の狂笑が響く。

確実に不定の狂気を発症している。そんな笑いだった。

「素晴らしい。素晴らしいわ、アナタ」

聖女は花洗脳を受けて佇む神官に近づくと、無造作に顔をつかんだ。

すると神官は痙攣して、内側から爆ぜた。

返り血が飛び散り、聖女が更に赤く染まる。

「今のは、回復魔法か？」

「ええそうです。私は反転回復と呼んでいます。」

ですがこれを見ても、顔色一つ変えずに分析ですか？

お連れの方達は、顔色が悪いようですよ？」

ユキナ達には悪いが、

こんな危険人物を前に後ろは向けない。

それが解ったのか？やはり聖女は笑みを浮かべる。

「やはり良いわ、

アナタ、お名前は何と言うのかしら？」

「テンプレだな？」

先に名乗れよ聖女様」

「レティシア。」

破戒聖女と呼ぶ人も居ます」

「幸利、清水幸利だ」

再び聖女の狂笑が響く。

待ち望んだ運命に出逢ったかのよう、そう思えた。

「ねえユキトシ、

あの狂った神を、教会を全て滅ぼしてしまいませんか？」

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

5 / 聖女レティシア

聖教教会の聖女。やさぐれ聖女様。オリキャラ枠。

崩落により新たに発見された未踏破区画（バーン大迷宮）を調査して、

クリアしてしまった聖教教会の聖女様。

神と教会の真実を知り、信仰は死に絶えた。

精神の均衡を失い廃人になる筈だったが、

手に入れたばかりの魂魄魔法で、何とか精神を保っている。

精神的なショックで回復魔法をマトモに使えなくなってしまう、

回復を攻撃に転化した反転回復を使つて戦う。

その残忍な戦闘スタイルから、破戒聖女と呼ばれる事に。

神と教会は滅ぶべきと判断してはいるが、

自分一人では到底不可能！と冷静な部分も残っていた。

だが今回のようなチャンスに巡り合うと、平然と凶行に踏み切る。

魔物に憑かれていたので、何とでも言い訳は出来る！と言う判断。

因みに教皇を殺していなかったり、

対面で嘘を吐いていたりすると？気に入られる事無く戦闘開始！

反転回復の脅威を目撃する展開になった筈。

バーン大迷宮は聖教教会の内部に有る設定なので、

運悪くクリアしてしまった教会関係者も居るのでは？

と言うキャラコンセプトです。

22 最弱ウサギの樹海散策

「故郷が懐かしいか？ウータイ」

「……………」フルフル。

猫のように膝の上でくつろぐウータイが、否定の身動きをする。

コイツは兎人族なのだが？動作は猫のようだと思える。

「戦えるか？相手はフェアベルゲンだ」

「……………」コクコク。

今度は肯定の意思を示すウータイ。何とも平和だった。

現在帝国は、森の亜人国家フェアベルゲンに侵攻している。

だがハルツィナ樹海は深く広大だ。

今回引き連れて来た程度の部隊では？フェアベルゲンの陥落は無
い。

相手もそれに気付いたのだろう。今は静かに樹海の奥で籠城して
いる。

硬直状態と言うヤツだ。そもそも人類は森に不案内。地の理が無
い。

亜人の国家を攻めるのに、亜人の助けが要る矛盾した展開！

亜人奴隷は確かに居る。

だが故郷を攻め落すのに協力的な者がどれ程居る？どれ程信用出
来る？

「故にウータイを呼んだ訳だが」

「……………」ゴロゴロ。

撫でてやると、ウータイは気持ち良さ気に鳴く。やはり猫のよう
だ。

ウータイは以前拾った兎人族の亜人奴隷だ。

フェアベルゲン出身らしいが、奴隷狩りに捕まり帝国で売られた。

帝国ではとある魔術師に買われたそうだが、そこで問題が起きる。

魔術師はとある実験を行った。

そこで自身の才能を開花させる結果となる訳だが、

主となった魔術師は破滅。他にも多くの犠牲が出た。

黒ランク冒険者である自身にも、討伐依頼が来た。暴走する亜人を討て！」と。

結果だけ述べるなら、亜人奴隷の捕獲に成功した。更に殺処分される処を、拾って新しい主にもなった。

新しい名前も付けた。ウータイ。それがコイツの新しい名前だ。

「ガライ様、部隊の編成が整いました」

「解った。行くぞ、ウータイ」

「……………」

ウータイの案内で樹海に攻め込む。

案内が有っても不利は覆らない。だが不意は討てた。

フエアベルゲンの拠点をいくつか落して、相応の奴隷を捕らえた。

ハッキリ言ってこれ以上は深追いになる。

だが戦勝に酔う奴隷狩り部隊は、それに気付かない様子だ。

さてどうするか？と言う処で報告が入る。

兎人族の一団が樹海を離れて移動中との事。

今は巡回に掛り、ライセン大峡谷に向かっていると！

「このタイミングで樹海を離れる、か。」

フエアベルゲンから逃亡する心算か？」

「如何なさいますか？」

「先にこの兎人族を抑える。ライセン大峡谷に向かう！」

此処で熱を冷ます時間を作る。

兎人族を捕えて冷静になった処で、今回の奴隷狩りは終了とする。

こんな処だろう。だがこの選択は間違いだった。

この兎人族！ハウリア族の一団には、あのバケモノが居たからだ。

†

「奴等は来るでしょうか？」

「兎人族の、ハウリア族だったか？」

ハウリア族にライセン大峡谷で生き抜く力は無い。

時機に上がって来る」

逃亡したハウリア族はライセン大峡谷まで逃げ込んだ。

だが脆弱な兎人族が、大峡谷で生きて行けるとは思えない。

奴等は耐え切れずに上がって来る。

コチラまで大峡谷に入る必要は無い。

奴隷狩り部隊を大峡谷の出口に配置する。

出口は崖を登る一本道だ。

一本道を登った先に弓兵隊を配置すれば、一方的に射殺す事が出来る。
る。

更に念を入れて、弓兵隊を三つに分けた。

三段射ちと言う戦法だ。相手に隙を与える事無く、連続斉射が可能。
能。

これを突破出来る奴は確実にバケモノだろう。

ハウリア族がいつ上がって来るか、正確な時間は解らない。

奴隷狩り部隊には、交代で休みを取らせる事にした。

自身もウータイの元へ戻る。

先程のバケモノのキーワードで、ウータイの事が思い浮かぶ。

ウータイなら、この包囲網も突破出来るだろう。

バケモノとは常識の埒外であり、確実に存在するモノでも在る。

「今戻った」

「……………」コクコク。

ウータイは天幕の中で大人しく待っていた。

改めてウータイを見る。相変わらず無駄に良い身体付きである。

これを迂闊に外に出して置くこと？

相手が亜人奴隷だと思って、

平然と肉欲的に手を出そうとする輩が頻発する。

「……………」スリスリ。

コチラが自分の身体を見ている事に気付いたのだろう。

ウータイが魅力的な身体で擦り寄って来る。もう何度も抱いた身体だ。

ウータイは戦闘であの力を使うと、必ず暴走する。

それでも指示には従うので運用は可能だが、暴走は自然回復しない。
い。

だがこれにも対応策は有る。ウータイは自浄技能も有していた。

但し発動条件はウータイを抱く事。

肉体的な繋がりの中で、ウータイは正気を取り戻す。

「欲しいのか、ウータイ」

「……………」コクコク。

初めは主としての義務だったり、効率的な選択だったりもした。だがそれ以外の時もウータイを抱くようになって、今に至る。それだけ魅力的な身体だった事も否定はしない。

†

思ったよりも粘った方だろう。

だがハウリア族はやはり戻って来た。それは良い。

問題は先頭に居る二人組だ。白髪の男と金髪の少女。

特に白髪がマズイ。

冒険者の勘が告げている。アレに関わるのはマズイ!と。

だがこれも仕事だ。現実是非情である。

「そこで生まれ、ハウリア」

一応の降伏勧告に、文字通り止まったのはハウリア族だけ。問題の白髪は逆に突っ込んで来る!強行突破の心算だろう。奴隷狩り部隊は動かさず、ウータイと共に崖下に降り立つ。

因みにウータイの基礎ステータスでは、

崖下に降りるなどと言うマネは出来ない。

出来ないので、ウータイは所謂お姫様だっこで運ぶ。

何とも緊張感の無い絵だが仕方無い。

「蹂躪しろ、ウータイ!!」

「アアアアアツツツ!!!」

そして此処からウータイの真骨頂!

ウータイの凶悪な強化技能が連鎖的に起動して、変貌する。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ウータイ 19歳 女 レベル: ■■■

天職: 墓守

筋力: 10+10000+10000

怨恨解放

効果／

墓守の固有クラス技能。

怨恨を一部解放して、推進力とする。

敏捷極大→

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || ||

怨恨圧縮

効果／

墓守の固有クラス技能。

怨恨を圧縮して、攻撃に転化する。

筋力極大→

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || ||

ミンナノウラミ

効果／

墓守のクラス技能。

対象が纏う怨恨の数だけダメージを与える。

人型、魔物を問わない。防御無効ダメージ。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || ||

無痛覚

効果／

痛覚を遮断する。

ダメージ疑似軽減。 気絶耐性→

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

擬心

効果／

部位欠損を応急補強可能。

不屈付与。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

シフトダウン

効果／

身体ダメージを魔力ダメージに変換する。

魔力が尽きるまで、身体ダメージを負わない。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

閨の心得

効果／

肉体的な繋がりによつて魔力の譲渡、または略奪を行う。

魔力極大回復。状態異常回復。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

無垢の忠心

ガルヴェイラに救われたウータイの絶対の忠誠。

何が在ろうと、決してガルヴェイラを間違えない。

効果／

ウータイの固有技能。

ガルヴェイラを間違えない。

幻惑無効。魅了無効。

|| || || || || || ||

これが怨念を吸収し続け、己のモノとするウータイの力！

この暴風に抗えるか、白髪？

23 かつて家族だった兎たちへ

「アアアアアアツツツ!!!」

ウータイの暴風の如き攻撃が白髪を襲う！
だが白髪も上手く捌いている。致命打を避け、他は防御で凌ぐ。
防御技能も持っているようだし、あの籠手自身の防御力も高そう
だ。

何より白髪の命を繋いでいるのは、戦闘経験だろう。
勘でウータイの攻撃を回避しているフシが有る。

どれ程の戦闘経験。どれ程の修羅場を潜って来たのか？と言った
処だ。

ウータイの攻撃が、ステータス頼りと言うのも要因の一つだろう。
元々ウータイは脆弱な兎人族だ。

いくらステータスが鬼畜でも、戦闘技術的な技能が無い。
正に力任せの暴風！同格以上の相手に有利は取り難い。

「ウータイ！」

「アアアアアアツツツ!!!」

だがやりようは有る。

白髪が防御したタイミングで指示を出す。

ウータイの「ミンナノウラミ」が発動！

防御姿勢の白髪に、防御無効ダメージが入る。

これはダイレクトヒット！だが白髪は崩れない。

予想外のダメージだろうに？大したモノだ。

「弓兵隊！ハウリア族を撃て!!」

白髪の視線が一瞬、金髪少女に向いたのを見逃さない。

崖の上の奴隷狩り部隊に指示を出す。

ハウリア族へ三段射ちで連続斉射！

これを護るのは、後方に残った金髪少女だ。

金髪少女の魔法の冴えは見事だった。

此処がライセン大峽谷だと忘れてしまいそうになる。

だがハウリア族全体を護りながら、白髪の援護は出来ないだろう。

対する銀髪のコチラを見る目は険しい。無理も無い。無理も無いが、見当違いだ。

「姉さんに、何をしたんですか!」

「期待通りの事は何も無い。」

やったのは別のヤツだ。もうウータイ自身がケリを付けた。

コチラがやったのは、生き残れる道を示しただけだ。

だからウータイも従っている」

†

帝国でウータイを買った魔術師は、

腕の立つ死霊術師（ネクロマンサー）だった。

ネクロマンサーは、ウータイの才能に気付いた。

ウータイは怨念吸収体質だった。霊媒体質とも触媒体質とも言える。

天職：墓守の者が稀に発現する体質らしい。

怨念が籠る場所、或いは人物に近づくだけで怨念を吸収する。

吸収して、力を増大させて行く。

その力をネクロマンサーは、触媒として活用出来る。

だから調子に乗ったのだと、後の暴走事件の調査団は判断した。

ウータイを次々と古戦場に連れ回して、そこで怨念を吸収し続けさせた。

ネクロマンサーは大いに喜んだだろう。

貴重な触媒がアホのように貯まるからだ。

だが流石に限界は存在する。

限界を超えた怨念はウータイから零れ出した。

零れ出した怨念の濁流は、最初にネクロマンサーを焼き尽した。

その後舵を失くしたウータイは暴走。

怨念の衝動に従い、近くに在る者から屠り始めた。

討伐隊も組まれた。

だが敗れたのは討伐隊の方だった。

無理も無い。ウータイの力を把握している今なら、理解出来る。自身にも討伐依頼が来る。

暴走する亜人の討伐依頼！

依頼が来た時点で、既に討伐隊は敗走している。

ギルドの空気は重い。これは絶望の空気だ。

たった一人の亜人の暴走に因る絶望。

此処で滅びるのが帝国の宿命か？

今まで亜人奴隷を浪費し続けた罰か？

亜人奴隷達は、帝国など滅んでしまえ！と昏い喜びに震えているのか？

「関係無いか、

討伐対象を斬る。それが冒険者の仕事だ」

そつと愛刀を撫でる。

コイツの出番かもしれない。

自分の知る限り最も危険で、最も妖しい刀だ。

戦場は嵐の通り道のようなだった。

生ける暴風が荒れ狂い、今も破壊の限りを尽している。

この暴風自身が一人の亜人。滅びの災禍。

「コイツ、抑えようとしているのか？」

「……………」

だが戦闘が始って直ぐに気付いた。

この暴風は恐ろしい破壊力だが、殺意に欠けている。

しかも抑えようとしているフシが在る。まだ意識が？

「なら行けるな？」

起きろ、骨喰宗近」

切札となる愛刀を抜刀する。

骨喰宗近。

確実に妖刀の類である。

抜刀と同時に所有者を支配しようとする試み、

更に無形の触手を伸ばし、周囲を次々と支配下に置こうとする。

妖刀の支配は、いつものように自力で抑え付けて活用する。

無形の触手は荒れ狂う暴風を支配しようと、伸びて襲い掛る。

やがて触手は檻となり、暴風を捕えた。

「……………」

「コイツが暴風の正体か」

治まった暴風の中から現れたのは、一人の亜人の女。強者では無い。ただの脆弱な女に見えた。

こうして事件は解決して、問題の亜人の殺処分も決定。

無理も無い。それだけの被害が出た。

だが未曾有の依頼達成者の権限で、問題の亜人を生きたまま引き取る。

コイツには被害を抑えようとする意思が有った。

生ける災害となる事を拒み続けた。だから妖刀の支配が及んだ。

コイツには、抗い続けた報酬を受け取る権利が有る。

「ならオマエは、今日からウータイだ」

「……………」コクコク。

ウータイは暴走の後遺症なのか？

或いは何か処置を施されていたのか？言葉を失くしていた。

自身の名前も訊き出す事が出来無かった。

だから新しい名前も付けた。ウータイと言う名前は、その時付けた。

意思の疎通は出来る。問題無い。

†

「無駄話が過ぎたな？」

互いの間が微妙な空気になる。

ウータイが自身の意思で戦っているのか、判断が難しいのだろう。

当事者のウータイから直接訊く事が出来ないからな？

だがその困惑に付き合う義理は無い。

それにどうやら白髪も同じ意見らしい、戦闘体勢を取る。

「ハジメー」

だが離れた場所で、

話を聞いていなかった金髪少女が事態を動かした。

響き渡る爆音、爆裂系の魔法。崖の上から！

どうやら金髪少女が、

大峡谷の中だと言うのに大技を放つたらしい。大したモノだ。

「しかもこの威力、

偶然か？狙ったのか？」

駆けつけて合流した金髪少女を見る。

何とも絶妙の威力だ。

今の爆裂魔法で、崖の上の奴隷狩り部隊は戦闘不能。

そう戦闘不能！まだ生きている可能性が有る威力だ。

救援に行くか？見捨てて戦闘続行か？

大峡谷の分解作用で偶然威力が弱まったと考えるのは、如何にも温い。

白髪の苦戦を察して、交戦理由を崩しに来たのか？

「良いパートナーだ、白髪」

「当然だな」

コチラは雇われの指揮官。

此処で部隊を見捨てては依頼は失敗！どうやら退くしかないようだ。

だが隙は見せない。切札の愛刀を示して問う。

「続けるか？」

「退きたいのはそつちだろう？行けば良い。

シアの姉とやらと一緒にでも、追いはしない」

白髪もかなりのダメージの筈だが隙は見せない。当然だった。

だが今回は、白髪の申し出を受けるとしよう。

「ガライだ。

冒険者をやっている」

「ハジメ、南雲ハジメだ」

「ユエ」

「シアです！

シンシア姉さんの妹的妹です☆」

何か一部、おかしな単語を聞いた気がする。

それに南雲ハジメ！コイツが生死不明だった神の使徒か？

「まあいい、撤退だ！ウータイ」

「……………」

これで奴隷狩り部隊の護衛依頼は終了。
部隊も思ったよりは生き残りが居た。とだけ記して置く。
バケモノと遭遇戦など！避けたいモノだ。

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

6 / ウータイ (シンシア・ハウリア)

元ハウリア族の兔人族。オリキャラ。

今回の奴隷狩りとは別口の奴隷狩りに捕まり帝国へ！

その経緯は作中で語られた通り。

シアとは血の繋がりは無く、シアの姉的存在。

シンシアの名前の中にシアの名前が！

と言う名前ネタで仲良くなった経緯が有り、

固有魔法の件でいつも泣いてばかりだったシアをナデポしていた。

ハウリア族だった頃から無口キャラで、実は余り変わっていない。

怨念を暴走させた件で救ってくれた事。

殺処分される筈だった処を拾ってくれた事。

生きる場所を用意してくれた事。

ウータイの忠誠心は既にカンスト済。

ガルヴェイラ (ガライ) の子を産みたいな♪とポヤポヤしている。

戦闘後の閨は？ウータイの密かなご褒美。

ステータス頼りの戦いしか出来無いとは言え、そのステータスが高

い。

生存系の技能も多く積んでいて、とにかくしぶとい。

対ハジメ戦では？ドンナーやシュラークではダメージが入らない

堅さで、

限界突破や、もつと大型兵器の投入が必要となる。

その反面バフ系の超強化キャラなので、強化解除や技能封印に弱い。

→水晶とは相性最悪！瞬殺確定案件である。

帝国が樹海に本気で侵攻するなら、亜人の協力が必要なのでは？

と言う疑問がウータイのキャラコンセプトです。
故郷を裏切っても、帝国に協力する亜人が必要となりました。
やはり帝国にも勝ち目が無いと面白くないので☆

24 グリユーエンへの道I

「行ったか、帝国も侮れないな」

オルクスの奈落で地獄を経験した。

その地獄を生き抜き、這い上がって強くなった心算だった。

だが外の世界には？まだまだバケモノが居るらしい。

ああ言ったバケモノこそ、魔人と戦えば良いと思う。

「ハジメ！大丈夫？」

「ああ、まだ神水が有って助かった。

何だあの防御貫通技は！」

途中までは何とか捌けていた。

だがあの防御貫通、いや防御無効か？アレを貰ってから辛くなつた。

力押しのパワーサーカーかと思つたら、面倒な技能を積んでやがる！

「おい、シア！」

お前の姉はガチでバケモノ何だが、何か心当たりは？」

「姉さんがあんなに強い筈ないんですが、ひ弱だったぐらいで」

「アレの何処がひ弱だ!!」

言語理解の技能が死んだか？

それとも戦闘の後遺症でオレの耳が死んだのか？と言いたい。

シアからは実の姉では無く、いつも一緒だった姉的な人だとか？

シンシア姉さんの名前の中に私の名前が有って、

それが仲良くなったキツカケだとか？

訊いていない特に意味の無い情報ばかり聞かされ続けた。本当にウザイ。

「じゃあアイツの言っていた通り、帝国で！って事か」

「姉さんの才能ですか、確かに姉さんの天職は墓守でしたが」

その墓守の天職に関してシアを始め、

他のハウリア族の奴等も心当たりは無いらしい。使えねえ！

「こう言う時に水晶が居ると助かるんだがな？」

「水晶は知識もチート」

幸利は絶対！こう言う処で楽をしていると思う。
ついでに言うなら、

神水の残量を気にする必要が無いのは？酷いチートである。

「アレはオレから頼める空気じゃねえ」

「ん、アレは愛妻弁当の領域」

例の栄養ドリンクも神水製だ。

神水ってレアアイテムじゃ無かったのか？って感じだよ！

「まあ居ない奴には頼れないからな？止めだ。

それより無駄に疲れた。先に町に行く」

ハウリア族の奴等が居るからな？

先に樹海の件を片付ける心算だったが、もう疲れた。

町に行つて異世界飯を食つて休みたい。宿は風呂付きだ！これは譲れない。

「バーサーカー女以外にも、

あの刀がな？」

直接戦つたバーサーカー女ばかりに目が行くが、

あのガライとか言う冒険者もマズイ。

何がマズイかと言うと、アイツが持っていた刀だ。

アレはマズイ。マズイ物だと、オレの錬成師としての勘が告げている。
†

最寄りのブルツクの町に着く。

ハウリア族の奴等は、町から離れた場所に置いて来た。

亜人を人間の町に入れるのは、色々と面倒だからだ。

だがシアだけは一緒だった。妙に懐かれている。

因みにシアは、亜人奴隷枠で検問を突破した。無難な選択である。

「さて、さっさと食糧調達を済ませて宿に行くぞ？

風呂に入つて寝る」

まず冒険者ギルドに行つて換金も済ませた。

冒険者登録も済ませて、歴戦の受付嬢？からお勧めの宿も訊いた。
なら後は休むだけだ！さっさと食糧調達も済ませる。

「ハジメ？」

「GPSが反応した。」

「幸利が近くに居るらしい」

「宿に急ぐ中、コンパス型のGPSが反応した。」

「近くに幸利が居る。」

「宿に行くのは中断して、幸利を捜す。」

「捜している内に町の大通りに出る。人口密度が増えた。」

「にしてもいくら大通りとは言え、人口が多過ぎ無いか？」

「それに何か盛り上がっている空気だ。何かの見世物でも始まるのか？」

「？」

「大道芸？サーカス？と思っていた訳だが違った。」

「何か、見覚えが有るんだがな？」

「GPSの反応は、更に人口密度が増える方向に続いた。」

「やがて公園広場らしい場所に出る。」

「そこにそれが有った。まずは野外ステージらしき物だ。それは良」

「い。」

「これから何か始まるらしいからな？特に問題は無い。」

「問題はそのステージに飾られた、見慣れた異国の文字。」

「何て書いてあるんでしよう？」

「ううん、読めない」

「樹海出身で文字の読み書きも怪しい気がするシアは勿論、」

「元王族で十分な教養も有る筈のユエもギブアップ案件なその文字」

「は、」

「どう見てもアルファベットに見えた。」

「R・o・s・e・l・i・a。」

「読み方はRoseliaか？」

「久々に見るアルファベットを読み上げると、」

「タイミング良くステージが上がる。」

「魔法の演出なのか？急に辺りが暗くなり、」

「それに反してライトで照らされるステージ。」

「そこにいつの間にか五人の奏者が立っていた。」

銀髪のボーカルをセンターに、それぞれ異なる楽器を手にしている。

そしてRoseliaの舞台が始った。

「此処は本当に異世界か？と言う無駄に凝った演出！

覚えの有る魔力！それにバンド名のアルファベット！

アイツの仕業だな？」

良く確かめて見ると？

トータスの文字で小さく、ロゼリアとルビが入っている！

とかどうでも良い事に気付いたのは、全ての演奏が終わった後の話だ。

†

「ブルックに戻って来た訳だが？」

此処に戻るまで色々有った。

本当に色々有った。まずは聖女のお誘いの件は？

「あの狂った神を、教会を全て滅ぼしてしまいませんか？」

「無策で挑む相手じゃない」

神は更にグレードが違うが、

教会を殲滅するのも面倒な案件である。

聖教教会は国の垣根すら越えた世界宗教だ。

今回のように教皇を一人二人処理しても、教会そのモノが潰れる事は無い。

直ぐに次の有力者が後を継ぐだけだろう。

勿論信者を塵殺するのは現実的では無い。手間が掛り過ぎる。

教会を滅ぼすなら、信仰を殺す必要が有る。

幸い神の正体は悪辣な邪神！これを暴き広めて、信じさせれば良い。

だが当然これは難しい。

トータスの大半の人間は聖教教会の信者で、エヒト神を善神だと信じている。

一ヶ月の間！

バンド活動で苦楽を共にしたサヨ達も、言葉だけでは信じられ無

かった。

大迷宮の経験を経て、ようやく常識と言う名の偽りをブレイクした訳だ。

無論世界の信者全員に大迷宮を突破させる！と言うのは更に非現実的。

そんな面倒な手段を取る必要は無い。

「では策は有る。と？」

一番マトモな策は？新しい健全な宗教を広める事だろう。それで古い宗教を廃れさせる。

使えない者を排除して使えそうな駒を頭にする。

自分でやると面倒なので、やりたい奴を捜してやらせる。

「ではその時に声を掛けて下さい。絶対ですよ？」

こうして面倒そうな聖女と敵対する事無く別れた訳だが、

やはり不安は有る。コイツを放置して大丈夫か？と言う案件だ。

そして不安は的中！神山を無事脱出した後、

聖女が神山に居た教会関係者を塵殺した事を知る。

神山に魔物が！と言う事で片付けたらしい。まあ誤りでは無い。

想定通り、それで聖教教会が減びる事は無かった。

「これは？」

「持つて行け、それで連絡出来る」

神山制圧作戦で見事な働きを見せたエリアは、王都に残して来た。

次の仕事を頼む為だ。

やはり花洗脳は有用！次の手も打つ事に決めた。

それとエリアに関して面白い事が解っている。

元々従属目録の登録従魔とは繋がりが有り、

念話のような情報のやり取りが可能だった。

だが距離に限界が有る。

だからエリアの神山制圧が終るまで、王都で待機していた訳だが？

そこで異変に気付く。

本来念話が届かない距離から情報が入って来たからだ。

これはエリアの胞子が風に乗る、想定外の距離までばら蒔かれた所

為だ。

そこで芽吹いたアリアの花達が中継塔となり、遠方で咲いた他の花からも情報が届くようになった。それは通信網の開設だった。

今もブルックから王都のアリアと情報交換が可能であり、リアルタイムで指示が出せる。

因みに聖女にもアリアの花を渡した。

携帯電話のように直接話せる訳では無いが、

アリアを通して他人と連絡を取るのにも使える。

聖女の放置は危険！と判断したからだ。

不利益な行動をガンガン取られるとアレなので？

何か有ったらそれで連絡を寄せ、とは確かに言った。

結果あの聖女は、毎日同じ時間に定時連絡を入れて来るようになった。

長電話やメール狂の類である。

しかしアレで人付き合いが上手いのか？ウザイと感じる前に連絡は終る。

話の内容も王都の近況を把握するのに有用だった。無価値と言う事は無い。

この連絡を寄こす相手は、本当にあの狂人か？と言いたい。

電話越しだとマトモに見える人種なのかもしれない。最近ではそう思っている。

「にゃ〜にゃ〜」

ああ、一番の問題はこれだった。

色々現実逃避の回想を巡らせていたが、

仕方無く（精神的に）猫化したユキナに向き直る。どうしてこうなった？

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

5 / 聖女レティシア（更新）

聖教教会の聖女。神&教会抹殺聖女。オリキャラ。

王都で別れる際に、清水（挫折）から連絡用の花を受け取る。
今まで神&教会抹殺計画を相談出来る相手など居なかった。

居る筈も無い話し相手が出来た事で、聖女の場合は快復傾向に！

聖女様に笑顔が戻った！そう噂される程に、聖女の場合は快復する。

元々民の為に戦い続けた聖女！笑顔が戻るとアツサリ求心力も戻った。

世の中色々とチヨロイ。美人は得である。

更に聖女に仕える者達の中で、新しい噂が！

聖女様が、いつも同じ花を見て微笑んでいる！と言う噂だった。

もしや聖女様に男が！あの花は男からの贈り物!?!と噂は飛躍する。

レテイシアはヒロインキャラでは無い予定ですが？

→ミニイベントが浮かんだので、書いて見る事に。

レテイシアは王都での協力者ポジです。次の王都イベントに続きます。

25 グリユーエンへの道Ⅱ

あの聖女、レティシアが暴走した。

神山の教会関係者の塵殺。

幸い殺したのは文字通り全員なので、情報が流れるのはまだ先だろう。

欠員が埋まり、教会が再編されるのは更に先。

レティシアの報告通り、教会が魔物の仕業だと納得しなかった場合。

教会はそこから犯人捜しと言う名の報復に出る！と考えられる。

次の教会のトップが、

権力争いを重視するか？報復を重視するかで、猶予に差が出る。

今は情報が流れる前に王都を離れるべき。

留まるなら、全面戦争を覚悟するべき展開。やるなら最後まで！だ。

Roseliaのメンバーには、王都を離れる案件を告げた。

銀髪美人で、しかも海人族のユキナは目立つからな？

そのユキナと手を繋いで、

ゴンドラに乗り込む処を目撃した奴ぐらい居たかもしれない。

疑いを掛けられる恐れが有る。今は王都を離れる！そう伝えた。

「王都を離れて、どうするのですか？」

「元の旅に戻る。神代魔法を求め旅だ」

神山に昇った時、サヨにも説明した通りだ。

バーン大迷宮で神代魔法を手に入れた以上！

今回の件が無くても、元より王都に留まり続ける理由はない。

「その旅に、ユキナも連れて行くんだよね？」

「ああ、リサも覗いていた通りだ」

もうユキナに対する気持ちを躊躇わない。

ユキナを連れて行く。

目の届く場所、手の届く場所で護り続ける。

「Roseliaの活動はどうなるの？」

アコの不安そうな声。

ユキナ一人を連れて行く以上、

旅が終るまで活動は休止！と言う事になるだろう。

「私は…一緒にいきたい…です」

リンコが、一歩前に出る。

望んだ未来をつかむ為、その手を伸ばす。

この一ヶ月！Roseliaでマネージャーの真似事をする間に、

リンコの経緯を聞く機会も有った。

リンコは貴族の出だ。

そう遠く無い内に、貴族の義務を果たさなければならぬ。

この場合の貴族の義務とは？結婚して子を産み、家を守る事だ。

それは自分が忌み嫌う、息をするだけの生活に似ていた。

そしてリンコには夢が在る。

冒険者になって、世界を旅したいと言う夢が！

普通の人間なら笑う処かもしれない。

安定した裕福な貴族の生活を捨てて、何をバカな事を！と。

「おかしい…と思いますか？」

「リンコの夢だ。」

夢の価値は、自分で決めれば良い」

夢の話聞いた時、そう答えた。

その答えを聞いたリンコの顔を、今でも覚えている。

「新しい夢が…出来ました。」

Roseliaの皆と…旅に…出たいです」

これはもう、覚悟を決めた顔だ。

神代魔法を求める大迷宮を巡る旅は、命を賭ける旅になる。

だがそれでも構わない！と。それでも一緒に行きたい！と。

リンコはそう覚悟を決めた。

あの時言った通りリンコは自分で、自分の夢の価値を決めた。

これはもう覆らない。リンコ自身が決めた事だからだ。

ブーメラン確定案件である。

「ダメ…ですか？」

「結局全員が覚悟を決めた。やってくれる」

「マスターが選んだ娘達だから☆」

認識が甘かった自分に対して、水晶の反応は平然としたモノだ。

今はユキナ達が居ない。旅の準備をする為、それぞれ家に戻っている。

ユキナは同じ宿で部屋を取って居るが、リサに連れて行かれた。

水晶とふたりになるのは久しぶりだった。

「集まっただけだろう？選んだ心算は無い」

「他人に興味の無いマスターが突然バンド活動を始めて、

一ヶ月も行動を共にした。これは仲間を選んだ事と変わらないわ」

「仲間」

「違うの？」

「否定はしないがな、

危険な旅の同行者が急に5倍だぞ？」

「ねえマスター、

あの娘達も塵殺が起きる直前のゴンドラに乗ったわ。

疑われる要素は、充分に有ると思うの」

「ああ」

「危険な旅から遠ざけて、何も起きない事を祈るか？

全てを自分で護るか？の違いでしかない。

「カミサマにお祈りでもしてみろ？」

「止めろ。」

「アテにならない上に、余計なイベントが起きそうだ」

「なら、全てを掴んでしましましょう？」

「欲しいモノを全て掴んで護る。マスターの好物☆」

「そんな好き勝手が出来る程、強くなった心算は無い訳だが？」

「結局はそこになる。不安だ。」

「ユキナ一人ならまだしも、全員を護れる程自分は強いのか？」

「自信は無い。現実はおルクスで経験した。」

「水晶が居なければダメだった。」

だがその水晶は？オルクスの時と同じように、優しく抱き締められる。

「でもマスターには私が居る。それでも不安？」

「水晶は本当に、駄目人間製造機だ」

「言ったでしょう？」

優しく融かしてアゲルって☆

†

「この辺りで良いだろう」

翌日。旅支度を整えた Roselia のメンバーを連れて王都を離れる。

徒歩や乗り合い馬車を使う！と言う選択肢は無い。

だが王都に来た時のようにグラも使えない。

Roselia 十二人では圧倒的に定員オーバーだからだ。

「出番だ、ケトバス！」

と言う訳で別の手段を実行！

人目の無い郊外で登録従魔のケトバスを解凍召喚！

ケトバスは、バスサイズの巨大な黒猫だ。

正確には猫妖精のケツト・シー。ケツト・シーのバスでケトバス！体内に乗り込めるようになっていて、

中にキャンピングカーのような居住スペースが有る。

旅の移動はこれで行う。

「そう言えば？詳しいルートを訊いていませんでした」

「そうだったな、これから向かうのはグリューエン砂漠だ」

詳しいルートを説明すると？

王都↓ブルック↓フューレン↓ホルアド↓アンカジ↓エリセン

となる。目的のグリューエン砂漠が在るのはアンカジであり、

エリセンは次の目的地の最寄りの町だ。

「グリューエン砂漠。確か大火山がそうだと言う噂ですか？」

「その噂は確定情報。大火山が目的の大迷宮だ」

解放者自身から得た情報だ。

バーン大迷宮の位置情報も正しかった。

間違いは無いと見て良いだろう。

「確か：ハルツィナ樹海にも大迷宮が有る。

と言う噂：ですよね？」

リンコが訊きたいのは難易度の件だろう。

「どうやら事前情報も持っているらしい。」

「そちらも確定情報だ。ハルツィナ樹海にも大迷宮は有る。

「だが行き先はグリユーエン砂漠に決めた」

常識的に考えて樹海と砂漠！どちらが難易度が低いだろうか？

恐らく樹海！と答える方に票が流れるだろう。だが敢て、此処は砂

漠で行く！

何故なら、樹海はヤヴァイ蟲がウヨウヨ居たり、

超危険な殺人ウイルスが眠っている印象が強いからだ。

なら砂漠は安全なのか？と言う話になるが、それは無いだろう。

砂漠は過酷な環境で在り、生息する魔物が脆弱で在る筈も無い。

詰り難易度の問題では無い！と言う事だ。

「他に：何か理由が？」

「ロマンだ！」

樹海の大迷宮と言われると、どうにも東洋風のイメージが有る。

東洋Ⅱ地元！後回しで良いだろう。

因みに好きなシチュエーションは北の果て！とか氷の大地だ。

氷雪は凍てつかせ、真実を覆い尽して行く。

氷雪の下に真実が眠っているのはお約束である。

「ロマン☆」

「流石はリンコ、ロマンが解るようだな？」

流石は旅人志願者！ロマンが解るらしい。好感度→だ。

だがリンコと盛り上がっている内に、問題発生！

「あれ、ユキナ〜？」

リサの困惑したような声。

サヨやリンコと話している内に、ユキナが姿を消していた。

何処に？と思ったが、その姿は直ぐに見つかる。

「㊦㊦」

ユキナは一足早くケトバスに乗り込んでいた。乗り込むと言うより、全身でダイブしていた。ダイブして、今まで見た事の無い超上機嫌な笑顔でスリスリしている。

「猫好きはこのままで良いとして、出発しよう」

猫好きには思う存分猫を堪能させて、ブルックへ向けて出発する。

最初の内は「ユキナは猫好きだったんだね♪」と微笑ましい展開だったが、

色々ユキナの猫好きを甘く見ていた。

ユキナは旅の間、ずっとケトバスに抱き付いていた。

食事と風呂以外はずっとだ。

やがて身支度や諸々の世話をリサが焼く事になる。

要介護者Lvだった。

だがそんな旅にも終りはやって来る。ブルックに到着。

町から離れた場所でケトバスを止めて、全員降車。

ユキナ以外は、と冠が付く。

ユキナはケトバスから降りようとしなかった。

仕方無いのでケトバスの召喚をそのまま解除。ユキナは、

「にゃ〜にゃ〜」

親猫に捨てられた子猫のように泣き出す始末！

すっかり猫化していた。

「次の移動の時も出すから、そろそろ帰って来い」

「絶対よ？」

そう言っつて抱き付いて来る。

ユキナの声を久々に聞いた気がする。次は何か手が必要だ。

†

オリキヤラ&クロスキヤラ設定

7/リンコ・シロガネ（白金燐子）

Rose liaキーボード担当。貴族出身。半クロスキヤラ。

ユキナ一人では？流石にRose liaの音は出せまい！と、急遽登場が決まった異世界Rose liaの一人。

しかし急造なので、ユキナ以外のメンバーには大きな弱点が！
せつかく登場させたのに？危険な旅に同行する設定が無い。

バーン大迷宮では、デートの覗きに来て巻き込まれる！

と言う苦肉の策を弄したモノの、後が続かない。

そこでリンコの出番！

これからも仲間と一緒に居たい！と、

命の危険が有っても、その価値が有るかどうかは自分で決める。

これは隣子かな？と思って送り出しました。

実は清水（挫折）とは？設定的に相性が良かったりする。

政略結婚をして、望まぬ生活を延々と続ける。

これは清水（挫折）が忌み嫌う、息をするだけの生活と同ジャンル。

リンコの人生に影が差したら？助けに来そうです☆

26 銀の階I

ブルックに着いて色々細かい事を済ませると、
そうだライブをしよう！と言う話になる。

特に理由は無い。強いて言うなら、ユキナ達が本当に奏者だからだ
ろう。

と言う訳で？準備を整えるのがマネージャーの仕事だ。

公園広場の場所を確保して、使用許可も取る。

後からグダグダと横槍が入ると面倒だからだ。

生成魔法で野外ステージも作った。やはり生成魔法は錬成師スキ
ルだと思う。

水晶は照明魔法のチェック。舞台によって照明も変わるからな？

「平和なモノだな？」

自分はいつから社会復帰していたのか？と言う展開。

インドアゲーマーの自分が随分遠くまで来たモノだ。だが、

「悪くは無い」

と呟く自分に苦笑。

アイツ等とならまだ続けても良い。

そう思っている自分が、最も意外だった。

Roseliaの幕が上がる。

舞台は問題無く終り、今回も上々の稼ぎを上げる。

自分達で旅費を稼ぐのは重要だ。

アイツ等善性の存在だから、寄生生活を良しとしない。

まあその方面の心配はしていないが？

「異世界でバンド活動か？意外だな」

「ハジメ」

舞台が終り観客が掃けた処で、白髪黒衣が現れる。

片目に何処ぞの戦闘民族のようなモノクルを付けて、

腕には如何にもギミックを仕込んでいそうな籠手を装備！

言うまでも無くハジメだった。

ユエと、初見のウサギも居る。残念そうなウサギだ。

「厨二病が再発したのか!？」

「バイクに躊躇いなく、

厨二ネームを付ける奴に言われたくないな?」

友人同士の軽いジャブを交わし、再会を喜び会う。

情報交換と互いの面通しも行う。

「そっちの銀髪が例の歌姫か、

無事合流出来たようだな?」

「ああ、色々在った。

勢いでバンド活動を始めたり、

初の魔人キルをしたり、告白までした。本当に色々だ」

「色々とシャツフルし過ぎだろう!」

バンドはまだしも、初キルと告白を混ぜるな。

「一瞬初キス自慢かと思っただぞ?」

「盛大に空耳。

それとタイミングがおかしいだろ」

その自慢を始めるなら、

ホルアドに着いた辺りが妥当なタイミングだろう。

と言っても自慢を始めるような精神状態では無かったが。

「バンドと告白に挟むからだ。

オレはハジメ、南雲ハジメだ」

「ん、ユエ。

ハジメの女」

「シアです!」

ハジメさんの愛玩奴隷☆」

「オイコラ、初対面の相手にそれは止める。

ユエはまだしも、愛玩奴隷ってのは何だ?」

確かに奴隷的な首輪は付けている。

オルクスを出て、速攻で夜の遊びを覚えたか?

特にサヨの周辺温度が←気がする。

だが結構本気で嫌そうな顔。これはウサギの残念発言だな。

「ユキナよ、

R o s e l i a のボーカルを担当しているわ」

「サヨです。」

御覧になっていたかもしれないませんが、ギターを担当しています」

「リサだよ、よろしくね☆」

「リンコです…:よろしく…:お願いします」

「アコだよー!」

この後アコの厨二挨拶が進むモノの、耳に入る事は無い。

挨拶の後、さり気無く腕を取って来るユキナの感触の方が大事だからだ。

「ハジメ」

「そこで張り合わなくても良いからな？」

それとシアは調子に乗るな」

張り合わなくても〜と言いつつ、

ユエの抱擁をハジメが拒む事は無い。

しかしもう片方の腕で、抱き付こうとするシアを撃墜していた。

「ハジメさん!」

もう少し私にも、優しくしてくれても良いと思います!!」

「いやユエはオレの恋人で、

お前はただの残念ウサギだからな？」

むしろユエと同列に並べるとか、その方が凶々しいだろ」

「でもほら、ほらああああっっっ!!!」

「中々面白いウサギを拾ったようね☆」

ハジメの言い分は正論である。誠実とも言う。

だが残念ウサギことシアが指す先には、

ユキナとは逆の腕を取る水晶の姿が!

どうやらシアを面白い玩具だと認識したらしい。

†

「それで大迷宮を二つ攻略済か、流石だな？」

他の大迷宮の情報を入手したのもデカイ」

「オルクスを出て早々、

必須の案内を手に入れたのも大したドロ―力だと思うが？」

樹海では、亜人の案内が必須である。と言うのが常識らしい。大迷宮の入口と思われる大樹周辺は、常時霧が発生しているらしく、特に必要となるようだ。と言ってもこれは所謂正攻法の話だ。

要は大樹に到着すれば良い話なので、案内無しでも手段は有ると思われる。

パツと思いつくだけでも、森を焼く。空から攻める。結界で閉ざす。

などが浮かぶ訳だが？正攻法で行けるなら選ぶ手段では無い。

「ライセン大迷宮では、生き残りの解放者と接触か。

問題はクリア報酬の鉱石だな？

これは例の通信に適した鉱石だぞ！

その腐れ外道が、感応石や遠透石を独占したんじゃないだろうな」腐れ外道は錬成師では無い。

意図的に有用な鉱石を独占した訳では無い。とは思っている。

だがライセン大迷宮に配置された騎士鎧の数を思うと、

結果的に有用な鉱石を独占した形になるのは間違い無い。

「そっちは帝国の奴隷狩りと交戦だろ？

ウサギの姉の墓守と、ガライとか言う冒険者の刀がヤヴァイト」

帝国は傭兵が興した国であり、戦意が高い。

亜人も奴隷兵として運用している。

ハジメ達が遭遇したのも、そんな奴隷狩り部隊の一つだろう。

「シアの姉、今はウータイと名乗っていた。

天職は墓守。この墓守について何か解るか？」

実際にウサギの姉！

ウータイと戦ったハジメはそちらが気になるようだが、

ガライと言う冒険者の方も気になる。

何故冒険者が部隊の指揮を？余程部隊運用が上手いのか？

帝国の常識？実力主義らしいのは聞いているが。

「話を訊く限り、墓守の固有クラス技能を発現しているわ。

怨念吸収。怨念を吸収して、基礎ステータスを爆発的に上昇させ

る。

限界値は有る筈だけど、ハジメと戦える時点でかなりのモノね？
だけど技能に因る底上げなら、強化解除か技能封印に弱い筈。

私なら確殺ね☆」

「流石は水晶。やっぱり知識チート」

水晶はステータスの高さや、スキルのチートぶりも鬼だが？

単純に長命種なので、知識量も豊富である。

「それで王都では、

ユキナを追って来た魔人と戦闘か。どうだった？」

「アレ自体はどうと言う事も無い。

問題は、アレが王都に居た。と言う点だろう」

「王都の結界だな？」

魔人はもう、易々と結界を突破出来るのか？或いは！と言った処
か」

「神は邪神で教会は狗。

色々と問題だが、手引きが有ってもおかしく無い」

「その教会のバーン大迷宮では、聖女とやらが塵殺か。

関わって大丈夫か？」

「放置の方が危険だと判断した。

教会の全てを相手取るにも、手札が足りていない」

教会関係者。詰り信者だけを選んで殺すぐらいなら？

それこそ聖女のように、塵殺した方が手間が少ない。

「それで幸利達はグリユーエンに行く訳だな？」

†

「あの、ユキナさん。で良いんですよね？」

「ええ、シア。だったわね」

幸利達が難しい話をしている間、同じように置いて行かれたのか？
兎人族の、シアが話し掛けて来る。

でも雑談が目当てでは無いのは直ぐに解った。シアも銀髪だった
から。

「もしかしてユキナさんも、ですよね？」

「そうね。見ての通りよ」

巫人にとつて、銀髪は固有魔法発現の証。

そして故郷の掟で追放されるのも同じ。

同じ筈なのだけど、でもシアの家族は違った。

シア一人を追放する事無く一族総出で同行した。

羨ましく何か無い。と言ったら嘘でしょうね？

故郷を追われて、それなりの苦労はして来た心算だから。

「でもそれがどうしたの？」

「ユ、ユキナさん」

きっとシアに悪気は無い。

自分と同じ銀髪の私を見て、勝手に共感した。顔を見れば解るわ。

そして仲良くなれると思った。同じ銀髪だから。

†

グリユーエンに向かうコチラとは異なり、ハジメ達は樹海に向かう。

既にハウリア族を率いているので、これは確定。再び別行動となる。

ハジメは既に渡したライセンス大迷宮のクリア報酬の鉱石で、今度こそマトモな通信機を作る！と言うが、

それはアリアの花通信で解決している案件だった。

「オイオイ、オレにお花に向けてお喋りしろと？」

オレは恋する乙女か!？」

「そこまで気にする事か？」

普段はユエに渡して置くとかでも良いだろうか？」

ハジメ的に？花に話し掛けるのはアウトらしい。

一晩時間をくれ！通信機を作る!!とまで言っただけ来た。

だがただの通信機では、アリアの花通信には勝てない。

アレは花を中継して世界規模の通信を可能にする代物だ。

それこそ通信衛星でも造らない限りは！一晩では厳しいだろう。

「それにこう言うタイプも有る」

だがハジメの言うように、花に話し掛けるのが怪しいのも事実。

と言う訳で既に対応済だ。

アリアの花を生きたまま、アクセサリーに加工した。
ブローチ。ペンダント。イヤリング。腕輪型など。

これなら通信しても、独り言で済む。

「アクセサリー型か、まあこれなら」

「ユ、ユキナさん」

ハジメが納得し掛けた処で、それは聞こえて来る。

シアの困惑気味の声。そのシアに背を向けて走り去るユキナ。

どうやら目を離れた隙にトラブルらしい。

「行つて来る。」

「他を宿まで頼む」

ハジメに他の Roselia のメンバーの事を頼んで、直ぐにユキナを追う。

水晶は当然のような顔で着いて来る。時は夕闇の黄昏。

「アテは有るの?」

「大丈夫だ。問題無い」

丁度ハジメと話していたネタだが、

アリアの花を加工したアクセサリーは?

Roselia のメンバー全員に渡して有る。

これならイザと言う時に連絡が取れるし、位置も特定可能だ。

だが今回はそれも必要無かったらしい。

「歌が聴こえる。ユキナの歌だ」

黄昏のブルックにユキナの歌が響く。

だが初めてユキナと逢った時と同じように、道行く者は誰も反応しない。

昼の路上ライブとはまるで違う反応。【境界の歌姫】だ。

「ユキナからオーダーだ。行くでしょう」

27 銀の階Ⅱ

【界境の歌姫】

本来大多数の観客に歌を聴かせる事を生業とする歌姫が、ただ一人の相手に歌を届ける為のスキル。

それが【界境の歌姫】だ。

詰りこのユキナの歌を聴いているのは自分一人。

ユキナが呼んでいる。

自分を呼ぶ、自分だけに聴こえるユキナの歌を頼りに町を探索。

予想通り問題無くユキナを見つける。

ユキナは町の高台に居た。

黄昏の高台には他に誰も居ない。全てが始りを喚起させる。

「シアには、悪い事をしたわ」

一曲歌い終るまで隣で待つと、やがて何が有ったのか話してくれる。

ツマラナイ嫉妬だと、そうユキナは答えた。

ユキナは西の海人族の町。エリセンの出身だ。

そこは亜人の町であり遠く離れた場所だが、

シアの故郷フェアベルゲンと同じ掟が有る。

即ち固有魔法を発現した銀髪の民は、故郷より追放する！と言うモノ。

シアの家族はシアを追放する事無く、掟に背いた。

その報いでハウリア族全てが、

フェアベルゲンを追われる事になったが、後悔は無かったと。

そう言う事らしい。何とも残念ウサギらしいエピソードだと思う。

だがユキナは違った。

通例通りに、当たり前のように故郷を追放された。

銀髪だから！固有魔法を発現したから！魔物に近づいたからだ。

ユキナの家族は、ユキナを護ら無かった。

護れ無かったのか、或いは？

既に歌姫として成功していたユキナなら、外の世界でも生きて行け

る。

そんな温い算段も在ったのかもしれない。
だがユキナが捨てられた事に変わりはない。

「それなりの苦勞もしたわ。」

今更苦勞話をする気も無いけれど」

ただ生きるのに精一杯の日々を過ごす内に王都に流れ着いて、
そこからは既に知っているユキナの物語だ。

「私は、本当は自分の銀髪が嫌いなもの。」

この銀髪の所為で故郷を追われた、苦勞もした。

誰も私の歌を聴いてくれなくなつたわ」

ユキナが嫌いだと言う銀髪が、風に靡く。

ユキナは嫌いだと言うが、

ユキナの銀髪はやはり美しかった。綺麗だと思う。

出来る事なら、嫌いにならないで欲しい。

「それでもユキナの銀髪は綺麗だと思う。」

好きだ。それでもダメか？」

「バカね、本当にバカ／＼／＼」

そのまま抱き締めて髪を撫でる。

暫くそうしていると、黄昏は終り夜の帳が下りる。

その頃にはユキナも顔を上げて、高台を下る。

いつかのように手を繋いでいた。

「ねえ、いつから？」

「初めから、だな。」

勿論歌も凄いと思った。だが、

美しい銀髪だと、そう思った」

繋いだ手が強くなり、腕繋ぎに移行。距離が近くなる。

そのまま夜の町を暫く楽しんだ後、宿に戻る。

既に宿に戻っていた他のメンバーには心配を掛けたらしい。

その日の夜は、ユキナを抱き締めたまま就寝。

綺麗な銀髪をじっくり愛でる。恋人の特権と言うヤツだ。

翌朝には、一応シアと仲直りするユキナ。

喧嘩何てしていないと、ユキナは最後までそう言っていた。

一方ハジメは？ 新型の通信機を作ったらしい。

ライセン大迷宮を攻略したらミレディとやらから！

鉱石を巻き上げ尽して、通信衛星を造る！と息巻いていた。

花通信用のアクセサリは、結局ユエに渡した。

これで新型通信機の圏外でもフォローは可能だ。

行く先が異なるハジメ達と別れた処で、ケトバスを解凍召喚！

ケトバスに乗り込み、次の目的地フューレンへ向かう。

「ユキナ、良いのか？」

「ええ、良いの」

前回ケトバスに乗り込んだ際には、

限界値越えの猫トリップをさらしたユキナだが、

今回はずっとコチラに抱き付いたまま。

これは何と言うか、本当にただの恋人同士（リア充とも言う）のよう
うだ。

「嫌？」

「まさか、それは無い」

†

次章予告。

原作で言う処の第二章ライセン大迷宮編完結！

ハジメパーティーは原作通り、

このままハルツィナ樹海↓ライセン大峡谷を巡り、ウルの殲滅戦へ

！

そこで異常事態を察知する事に！

対する清水（挫折）パーティーは、

一足早くグリューエン大火山↓メルジーネ海底遺跡と巡り、

舞台は再び動乱の王都へ！ 第三&四章王都侵攻編、開幕です。

「ドライツェーンツツツ!!!」

「さようなら、ノイント姉さん」

グリューエン大迷宮編で、新規ヒロイン登場！

名前はドライツェーン（仮）。その名の通り、使徒のヒロインです。

神の遊戯に疑問を抱き、その掌から逃れます。
それを追うのはノイント率いる使徒の追撃部隊！
グリュエーン大火山を舞台に、使徒VS使徒の戦いが始る。
ドライツエーンは半クロスキャラです。

かなり古い作品からの登場ですが、作品自体は有名の筈。
当時としては斬新なヒロインのラインナップ！

幼馴染。委員長。帰国子女。格闘少女（後輩）。辺りは普通ですが、
魔法使い。超能力者。メイドなどが居たりします。

特にメイドヒロインの人气が凄かったようです。

ドライツエーンは、このメイドヒロインの優秀な妹の方。

シナリオ無しの子役のサブキャラです。

ですが私は！このキャラが好きだったりします。

使徒ヒロインなので、選考理由は無口or無表情系ヒロインである
事。

同じ顔が同時に出て来ても、おかしく無い事！となります。

ドライツエーンは、ドイツ語で13と言う意味。

当然！13に由来の有るキャラです。

原作を知っている方は、もう誰なのか気付いたでしょうか？

「仇殺すミハイル仇殺すミハイル仇殺すミハイル仇殺すミハイル
仇殺すミハイル仇殺すミハイル仇殺すミハイル仇殺すミハイル
仇殺すミハイル仇殺すミハイル仇殺すミハイル仇殺すミハイル」

「醜いな。」

もうお前を抱こうと言う男は居ない」

グリュエーンとメルジーネが終った辺りで発生するのが、

ホルアドのカトレア戦！

リアルファンタジー御用達の展開。

変成魔法なら、こう言う展開も有るよね？と言う感じですが。

先輩冒険者としてチョコチョコ好感度を稼いだガライが、

カトレア戦で雫に良い処を見せる回☆

ガライ&ウータイの全力戦闘回でもあります。

→の台詞は？

ブーメラン&掌返しになる予定です。

「……………○○って、誰？」

「オイ、冗談だろ？」

ウルの殲滅戦の後、異常事態を知るハジメの囃。

○○には、あのヒロインの名前が入ります。

出番が無いだけだと思っていたら、もう異常事態が！という展開。

あのヒロインが超強化されて、

パーティーに加わる処が想像出来無かったので、

囚われのヒロインルートに入って貰いました。

もう最後まで狙われます。ガチで囚われのヒロイン枠です。

と言うかテイオをどうするか？

清水（挫折）が味方で、ユキナもヒロインやってるから？

暴走⇨変態化フラグが折れる!?

ガチで暴走させるか？と構想中。

シリアス真面目テイオって、需要有ります？

「私の手が必要ですか？」

「（この女に借りは作りたく無かったが、仕方無い）

ああ、鍵は王都に有る」

神隠しに遭った○○を搜索する為、聖女に救援を求める。

清水（挫折）は確信する。○○が消えたのは、王都だと！

そして動乱の王都に集う！

「搜したよ、アレーティア。

キミを殺しに来た」

「アイルマンカー」

結界は破られ、王都は侵攻を受ける。

魔物の軍勢に向かう、ユエの前に立ち塞がるのは宿敵！

かつての師匠であり婚約者だったアイルマンカー。

ユエの封印処置を決定した叔父とは異なり、

ユエの完全滅殺を提案した男。

あの可愛いアレーティアが、永劫を独りで過ごせる筈も無い。

完全なる滅びこそアレーティアの救い。そう信じて襲い掛る。

全てはアレーティアの為！

叔父が出て来るより、

元婚約者が出て来る方が面白いかな？と言う配役。

師匠ポジも貰っているオリキャラ。ユエの事情も把握しています。

「お前が○○を！」

「ああ、残念だ。」

あの娘は神に選ばれた」

○○を拉致した異端審問官！ハルシオン。

聖女と共にバーン大迷宮を調査したメンバーの一人であり、信仰を喪い、我欲を満たす為だけに行動する。

魂魄魔法を悪用して、記憶改竄を行い証拠を隠滅。

犠牲者を居なかつた事にする。と言う外道の所業の常習犯！

長生き不要の拷問快楽者。オリキャラ枠。

「私の名前はユエー・ハジメの月。」

貴方の温もりは、もう要らないっ!!」

最後は原作ヒロインの貫禄で、ユエが魅せてくれる展開！

もう此処がクライマックスで良いのでは？と言う盛り上がり。

神との戦いが消化試合にならない？と言う勢い。

私は帝国のテロイベントとか好きだし、

シユネー雪原のイベントとかも概ね構想済ですが？

王都侵攻編が構想内で盛り上がっている真っ最中です。

「流石は大都市。

人が多いと、アホも多い」

フューレンに到着した。

要所の大都市と言うヤツで、随分と賑っている街だ。

だがこの街に用は無い。宿に泊まるだけの予定である。

その予定だったが、街に入る段階で軽くトラブル発生。

ユキナ達がナンパされた。美人揃いなので、特におかしい事では無い。
い。

そこで前回！ユキナ達に渡した花通信用のアクセサリーの、
護身機能を試して見る事にした。

アクセサリーは元々アリアの花で出来ていて、しかも生きている。

と言う訳で防衛行動が取れる！

胞子と同じように麻痺毒を散布可能。ナンパ男を昏倒させた。

だが場所が悪かった。街の検問前なので目立ってしまう。

しかもナンパ男は？黒ランク冒険者だったらしいので、余計である。

しかし弱いな？アツサリ沈んだ。

ハジメが遭遇した冒険者が厄介だったと言う話だから、

警戒していた訳だが瞬殺だった。

やはり冒険者が全員鬼畜の強さ！と言う事は無いらしい。

と言う訳で事情聴取の為、冒険者ギルドに拘束された。

アコと二人！冒険者登録をして居たから、預かりが冒険者ギルドとなる。

だが検問前の騒ぎだった事も有り、目撃者も多かった。直ぐに無罪
放免。

それは良いが、何故かギルド支部長と面会する事になった。

「何故支部長が？」

「些細なトラブルが原因とは言え、

黒ランクを瞬殺だ。直接会って見たくもなる。

しかも調べて見れば、採取王と来た」

結局登録をしていないユキナ達も、

フューレンのイルワ支部長と面会する事になった。

しかもこの支部長！中々のやり手らしい。

採取王とは？王都で冒険者として活動していた際に付いた渾名だ。

Roseliaが舞台で使うメイク用の化粧品。

水晶が生成魔法で作っていた訳だが、薬草の素材が要る。

薬草の素材を手に入れるついでに、ギルドで採取系の依頼を受けた。

そこでも水晶のチートが炸裂した。単純な知識チート。

水晶は長命種なので、知識量も豊富で採取は順調に進んだ。

順調に進み過ぎた！とも言おう。

何やら貴重な薬草も採取出来たらしく、結構な額になった。

それが続けば功績になる。おかげで採取だけでランクが上がった。

これは珍しい事らしい。今のランクはアコより上の緑である。

「それにキミは、ユキナ君だね？」

「どうして私の事を？」

「気を悪くしたらすまないが、やはり銀髪の海人族は目立つ。

それに一時期フューレンに住んで居た事も有るね？」

登録無しで、度々ギルドに素材を持ち込んだ事も有ると」

銀髪の件を指摘されて、ユキナが身を硬くする。

手を握って大丈夫だ。と暗に伝えようと、ユキナは姿勢を戻す。

それにしても採取王の件と言いだした情報網だ。

登録無しの素材持ち込みが、そこまで目立つモノなのか？

「優秀な人材を欲しいと思うのは、当然の事だろう？」

登録を何故しようとし無かったのか、訳を訊いても構わないかな

？」

「私は冒険者じゃない。

歌で生きたかった。それだけの事よ」

「今はRoseliaで活動中だったね？」

そして一定の成功も治めていると。

冒険者ギルドの支部長としては、残念では有る」

そこでユキナの件は終り、と言う事だろう。

今回の件に戻る。

「それで今回の処分だが、清水幸利君。

キミを黒ランクに昇格させる事を、処分としたい」

「何故処分で昇格？」

「普通は降格だろう」

「今回黒ランクを瞬殺したのは、キミの仕業だろう？」

それに採取王としての実績も有る。昇格はおかしくも無い処置だよ」

「ランクを上げて、

もつと高ランクの依頼を、ガンガン受けろと？」

「優秀な人材には、それに適した仕事を！と言う事だよ。

漆黒の件も有る。これからも優秀な人材を発掘して行きたいものだ」

+

「幸利…さん。

漆黒と言うのは…もしかして」

「噂だけなら、聞いている」

支部長との面会を終えて、やはり気になったのだろう。

ギルドの一階に戻った処でリンコが訊ねて来る。

漆黒。

最も新しい英雄と名高い漆黒の冒険者。金ランク。

その渾名通り、常に漆黒の全身鎧を纏う戦士。

数多の武器を操る武芸百般。

だが宿でも兜を外さないらしく、誰もその素顔を知らないと言う。

常設のパーティーも無し。ソロの冒険者。

噂では竜の討伐経験も有るらしく、

竜殺し（ドラゴンスレイヤー）の名で呼ばれる事も有る！と。

ライセン大峡谷で遭遇した亜竜の類では無い。本物の竜が相手だ。

竜以外にも、他に様々な高難度クエストをクリアしているらしい。

正に金ランク！正に英雄！それが漆黒だ。

「そのような人物が、実在するのですか？」

「ああ、

実際に高難度の依頼がクリアされているらしい」

ステータスプレートの偽装は難しい。

漆黒が実在するのは、殆ど確定。

だが正体不明。素顔を知る者は居ない。と言うのはどうにも怪しい。

「在庫が品薄に？」

「メイク用の化粧品が品薄なの、

折角だし、補充したい処ね」

漆黒の噂はこんな処で、今日の宿を探しに行こう。

と言う流れだったか？水晶から警告。

例の化粧品の素材が品薄らしい。

と言うか新作の開発で、ガンガン素材を消費しているのでは？

水晶の数少ない贅沢行動である。

「なら採取だな、またついでに依頼も」

「あの…御一緒しても…良いですか？」

冒険者の活動に興味の有るリンクが、採取依頼に同行。

他のメンバーで宿の確保と旅の準備をする事に。

「この薬草の採取は、こう」

薬草の採取は水晶の知識チートで無双した。

薬草の群生地を予測して見事に的中。採取知識も完璧である。

後は余剰分の確保となる。

「リンクは冒険者登録をしないのか？」

「私…何てまだ…」

手が空いているので、気になっている事を訊いた訳だが？

まだ自信が無いらしい。

「登録は特典目当てでやる奴も多いらしい。」

そこまで気にしなくても、とは思うが？」

「でも…私は…」

リンコにとって冒険者になる事は、実家との決別でもある。貴族の義務を放棄して、ただのリンコになる。

確かに充分大きな決断だが、Roseliaとして活動して世界を巡るのも、充分大きな決断だろう。

「見事な採取技術と知識だ。

まだ若いのに、やりますね？」

気付いた時には、既にそこに居た。

漆黒の全身鎧。

それこそ見事な隠蔽技術だった。コイツが敵なら、もう取られてい

る。
『マスター』

コネクト中の水晶からも、警戒を宿した声。

咄嗟にコネクトを解か無かったのは流石だ。

だがこのままではマズイ。

リンコが一緒なものもそうだが、自身も戦力外の粹。

この漆黒の全身鎧は！水晶が戦うべき相手だと瞬時に悟った。

「驚かせてしまったようだ。

御見せ出来る事は少ないが、私はこう言う者です」

「金ランクに漆黒の全身鎧。

本物の漆黒!？」

||||||

||||||

■■■■ 歳 男 レベル：100

天職：■■■■ 職業：冒険者 ランク：金

筋力：100000

体力：100000

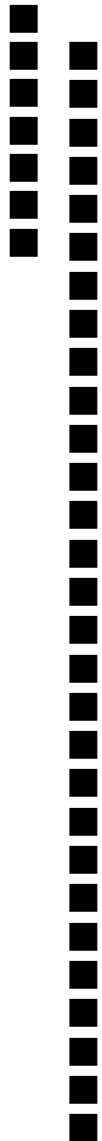
耐性：100000

敏捷：100000

魔力：50000

魔耐：50000

技能：



言語理解

|| || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || ||

言語理解

効果／

使徒の特殊クラス技能。

数多の世界を巡り、神の意思を代弁する神の使徒の技能。

数多の世界の言語を理解出来る。

|| || || || || ||

漆黒の全身鎧が提示したプレートには金ランクとあり、

水晶から送られて来る真名看破の情報も、黒く塗り潰されていた。

これは水晶の真名看破すら偽る隠蔽スキル持ち！と言う事になる。

提示された基礎ステータスも、見せる為のフェイク情報だろう。

だが問題はそこでは無い。

唯一見えているスキル！言語理解の件だ。

言語理解は召喚されたクラスメイトなら、全員持っているスキル

だ。

異世界生活の必須スキルであり、元々は神の使徒のクラススキルら

しい。

異世界転生した水晶も生やしているスキルだ。

それをこの目の前の、自称漆黒も保有している。

漆黒は異世界人？まさか日本人か!?

クラスメイトの変装と言う線は無い。長身の坂上でも届かない程

の偉丈夫だ。

「貴方は、何者だ？」

「私は漆黒。」

それ以上でも、それ以下でも無い」

「では何故此処に？」

「レイイベントの予感がして、フューレンまで来ていました。」

だがまだ早い」

今、レイイベントとか言ったぞ！

漆黒は日本人（ゲーマー）で殆ど確定だろう。

だが何も語る気は無いらしく、漆黒は去って行った。正に正体不明である。

「驚き…ました。」

あの人が…漆黒」

「ああ、驚いた。」

あらゆる意味でな？」

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

8 / 漆黒

最も新しい英雄と謳われし者。金ランク冒険者。オリキャラ。

常に漆黒の全身鎧を纏う事から、漆黒の渾名で呼ばれる。本名は不明。

宿で兜を外さない事でも有名であり、誰もその素顔を知らない。

ファンタジー世界に一人は居る？謎の全身鎧の男。

清水（挫折）の予想通り、実は日本人。

鎧の中が入院中の檜山と言うオチは無く、

今回の召喚より以前に召喚された先輩犠牲者。

エヒト神の所業なら、こう言う奴も異世界に居るだろう！と言う設定。

異世界に召喚されて、ゲーム感覚で旅を続けているオリキャラ。

ゲーム脳が運良く異世界に適応して、強者へと成長を果たした。

清水（挫折）達が辿るかもしれない結末の一つ。

竜人族の里もゲーム感覚で襲撃している。

ティオの宿敵キャラ。

竜とは討伐すべき敵キャラであり、話し合いが出来るとは思っていない。
ない。

財宝は勿論強奪済。正にゲーム脳でしか動いていない。

29 ホルアドの勇者

大迷宮攻略は足踏みを続けている。

まずは人数の不足。

前回の60層への転移事故。崩落。そして初めての犠牲。

もう一度大迷宮に挑もうと言うクラスメイトは、確実に数を減らしていた。

それでも大迷宮に挑む事を決めた光輝率いる勇者パーティーは、次の難題に直面する。

前回60層で起きた崩落で、地下溪谷が通行不能。

突貫で橋を架け直す必要が出て来た。

でも魔物が出て来る場所で復旧作業は出来ないから、

60層を制圧する事なつたと、メルド団長から聞いている。

「冒険者を雇う、ですか？」

「そうだ。」

橋の復旧の為に60層を制圧する事は話したと思うが、戦力が足りない。

工兵や職人、資材を運ぶ者やその護衛も要る。

幸いホルアドの冒険者ギルドは、快く応じてくれた」と言っていたメルド団長の顔は苦い。

きつと相応の代価を払ったんだと思う。

光輝は笑顔を浮かべて、まるで気付いていないだろうな？と言う顔。

ボランティアか何かだと思っというそう。

「あっ……………」

集められた冒険者、

オルクス大迷宮に日夜潜り続ける人達。

その中に、あの人居た。

†

「魔人との戦争は近いと、もう多くの者が感じている筈。

だと言うのに？」

「それが依頼だ。」

なあに、それだけ期待してるって事だろう」

樹海でバケモノと遭遇した護衛依頼の後、

ウータイと共にホルアドまで流れて来ると、

ギルドで指名依頼が入った。

指名して来たのはホルアドの冒険者ギルドの支部長だ。

と言ってもロア支部長は仲介役で、

大元の依頼人はハイリヒ王国であり、その糸を引いているのは教会だろう。

だが支部長室に通されて聞かされた依頼内容は？

耳を疑うような呆れた内容だった。

「滅多に到達する者も居ない大迷宮の橋の復旧。」

こんな時期に使う人と金か？

それに今回集まった冒険者達も、60層など拝んだ事も無いだろう？」

「だろうな？」

だがその為のお前だ、ガライ」

王国からの依頼は、オルクス大迷宮60層の地下峡谷の橋の復旧。

橋の復旧を行う工兵や職人だけでは無く、

資材の運搬も必要となり、その護衛も要る。これは大事。

あの橋を復旧出来る人数を容易く送り込める程、60層は甘く無い。

故にロア支部長の策はこうだ。

まず30層の転移陣前で中継のキャンプを張る。

30層までなら、難易度は圧倒的に下がる。

此処までなら到達出来る冒険者も多いだろう。

そこから転移陣を使って、人材と資材を60層に直接送り込む。

「オルクス大迷宮の最深到達者は、

お前だったな？」

「……………」

手にはめた指輪を見る。

大迷宮の攻略を示す光りは3つ灯っている。

これは30層。60層。90層の攻略を示すモノだ。

これを使えば今回問題になっている60層処か、

復旧などしなくても、転移陣で90層まで行けるのだが？

その心算は無い。ギルドに報告もしていない。

人類の最深到達階層は？今も変わらないままだ。

「転移陣が開けるだけだ。」

60層の階層主が湧き続ける」

「その為の冒険者。」

その為のお前だ」

指輪に光りが灯っても、

指輪に認証されていない者を大量に連れて行っては、

その度に階層主が湧く。

それを排除し続けろとロア支部長は言う。

「不可能か？」

「今更ベヒモスに負ける気は無いが、

いくらでも足枷が居る状態での戦いが続く事になる。

面倒な話だ」

他の冒険者達がアテになる気がしない。

確実にアテになるのはウータイだけだろう。

「♪♪♪」

「仲が良いな？オマエラ」

面倒な依頼に憂鬱になり、無意識にウータイの頭を撫でる。

支部長からの指名依頼！断るのは難しい。

「ああ、修行中の神の使徒。」

勇者サマ達も復旧に参加するらしい」

「……………それこそアテにならない。

護衛対象が増えるだけだ」

†

「懐かしきホルアド、と言う程でも無いか」

フューレンで漆黒と言うビッグネームに遭遇した後、

何の問題も無く素材は集まり化粧品も補充。

直ぐにフューレンを発ち、やがてホルアドに到着！順調な旅路だ。強いて問題を挙げるなら？

水晶とユキナで両腕に花をやっていて、周囲の視線を集めている事だろう。

こうした無駄に問題が起きそうな行為は（普段は）控えている訳だが？

今回は気にしていない。ホルアドも素通りの予定だ。

何より！両腕に花を堪能しないでどうする？

「オルクス攻略の拠点。だったのよね？」

「そうだな？」

まあ潜ってばかりで、散策はして無いも同じだったが」

ユキナの声が近い。腕を組んでいるのだから当然である。

例のブルックでの一件から、距離が更に縮まった気がする。旅の間も、重度の猫トリップを発症していない。

「と言いつつ、マスターの初デートはホルアドだった！まる」

「それを今！暴露するか？」

水晶の揶揄う声も、反対側から聞こえて来る。

コネクトの際に記憶を覗ける水晶に、隠し事は出来無い。

もうとつくに開き直った現実である。

「……………確か優花。だったかしら？」

「園部優花。」

マスターと唯一仲の良かったクラスメイト。勿論女子枠☆

「唯一とか言われるとアレだな？」

と言う訳で隠し事の類はしていない。

ユキナにも、日本での出来事を話す機会は充分に有った。

「なら、他に誰か居たの？」

「女友達なら、八重樫とか八重樫とか白崎とかだな」

「マスター？」

「同じ名前が二回出ているわ」

他に名前が出ない！

薄情な話だが、優花のパーティーに居た他の女子メンバーの名前が出ない。

それ程までにオルクスの奈落は過酷だった！とも言おう。因みに八重樫はコミュ力高めの友人が多いタイプで、白崎はハジメ繋がり交友関係だ。特別の仲では無い。

「そう、ならいいわ」

「チェックを入れるなら、優花一択ね☆」

これがフェクションの幻想と謳われたイチャコラモードか!?

両サイドから伝わって来るふたりの感触が幸せです！

「……………全く、公衆の面前で」

「まあまあ、流星にアレを止めるのは悪いよ」

後ろから続く他の *Rosealia* の面々からは？

呆れやら諦めやらの波動が突き刺さる。だが！

「でも…随分急いでます…よね?」

「リンリン!」

「……………リンコさん。やりますね」

「勇者だ。勇者が居るよ」

そこに勇者リンコ降臨☆

イチャコラモードの中！通常会話を挿し込んで来る。

流星は勇者！両サイドにラスボスとメインヒロインが居ても怯まない!!

しかも動きがフリーである事を活かし、

手を後ろに組んで、覗き込む上目遣いポーズ！

これで恐らく他意の無いナチュラルスタイル！やってくれる奴である。

「そうだな？」

グリューエンではロマンが、恐らく待っている」

「前にも…言っていました。

火山が好き…何ですか?」

「グリューエン大火山は噴火した。

王都を発つ前の事だ。これは重要イベントだと判断すべきだろう。

だから急いでいた。と言う訳だ」

アリアの花通信は、既にグリユーエン大火山を擁するアンカジを押さえている。

大都市のフューレンですら？まだ噴火情報は入っていない様子だった。

流星はファンタジー、情弱である。まだ一番乗りが充分狙えそう

だ。「し、清水君!？」

などと不穏な事を考えていた所為か？

八重樫の事を噂していた所為か？当の本人と町中でバツタリ遭遇

☆

マズいな、完全にロックされた。素通りの予定が！

「……………八重樫か、

今日もポニテが決まっついて何よりだ」

†

「あれは凄かった。本当に」

「八重樫の口から、男の話を聞く事になるとは」

八重樫とバツタリ再会して、生存報告をした後。

結局！例の騎士団御用達の宿まで連行される事になった。

他のクラスメイトにも生存報告を！との事。

宿に連行される道中、クラスメイトの近況も聞かされていた。

表層60層での水晶の砲撃。橋の崩落。初の犠牲者。

クラスメイトの団結は分断されて、いくつかのグループに！

その一つ！積極的に神の使徒の使命を果たし、

日本への帰還の道を拓こうとする勇者パーティー。

天之河は相変わらざらしい。

だが表層60層の橋が崩落した事で、経験値稼ぎは足踏みを始める。

それを打開するために冒険者が雇われて、頭角を現した。

ガライとウータイ。

黒ランクの刀使いと、兎人族の亜人の二人組。

湧き続ける表層60層のベヒモスをワンパンで仕留めたり、
ジャイアントスイングで放り投げたりしているらしい。

八重樫的には？刀使いの評価が高いようだ。刀の冴えの話が長い。
これはハジメ達と交戦した要注意人物と符合する相手だ。

名前も一致。殆ど確定情報。

今もオルクスの表層60層で、橋の復旧作業に従事しているとの
事。

因みに八重樫達クラスメイトは、半舷休息で町に戻っていたらしい。
い。

「それを言うなら、清水君の方でしょ？」

例の歌姫さんは捕まえたの？つて訊くまでも無いかな」

両腕に花で、更にRoseliaのメンバーが後に続く状況。

だが八重樫の視線は、ユキナをしつかり捉えていた。

「良く解ったな？」

「何と無く、ね？」

何処か無茶をしそうな感じがしたから」

本当に察しが良い。

リサと意気投合しそうな気がする。

「それで、今まで何をしていたの？」

「七つの大迷宮を巡る神代魔法を求める旅！だな？」

後はバンド活動だ」

橋の崩落の後、オルクスの奈落で世界の真実を知る。

異世界召喚を実行したカミサマが、全ての黒幕！

そこで日本に帰還する手段を神代魔法に求めた。

だがユキナとの再会を優先して王都に戻り、

バンドを組む事に、と言う辺りで八重樫の思考が空転する。

「色々と詰め込み過ぎでしょ！」

世界の真実とかカミサマとかの件もそうだけど、

そこでどうしてバンド活動に繋がるの!？」

「ユキナの笑顔を見ていたくなった。

Roseliaと過ごすのも悪く無いと思った。それだけだ」

シリアスモードに移行。

両腕に花状態を解除して、しっかりと八重樫に向き直る。

八重樫の視線も強い。

「清水君は、日本に戻らない心算なの？」

「そうは言っていない。」

だが日本とユキナなら、ユキナを選ぶ」

神代魔法をコンプリートして、

帰還の手札を手に入れても？ユキナを連れて行けないかもしれない。
い。

連れて行けても、ユキナに日本での生活は厳しいかもしれない。

その時は躊躇わない。トータスに残る。

ユキナを手放すような事はしない。

因みに此処で、水晶の心配はしていない。

何か心配する事が在るの？と言う感じだ。

連れて行けるかどうか？きつと何とかする。

生きて行けるかどうか？元々日本在住者だ。

戸籍？資金？世間体？どうとでもなる！

「そう、もう決めたのね。」

……：優花の処にも、顔を出しなさいよ？」

「優花もホルアドにきているのか？」

オルクスで初の犠牲（誤報）を出した時、

クラスメイト達はバラバラになった。

死にたく無い。解り易い行動だ。

勇者パーティーのように、使命の続行を選んだ者は少ない。

多くが王都に留まる事を選んだ。現代の社会問題と同じヒキコモ

リである。

それでも優花は立ち上がった。

勇者パーティーのように前線には立てないが、何かしたい！と。

今は畑山先生と、後方支援に従事しているらしい。

「今気付いた訳だが、また同じ説明をする事にならないか？」

以前も世話になった騎士団御用達の宿に到着した。

予想通りエンドレスで生存報告をする事に！

意外だったのは、自分の生存が随分と喜ばれた事だ。
だがメインイベントは？白崎の件だろう。

「清水君！

南雲君は！南雲君は一緒じゃないの!？」

「落ち着け白崎、

別行動中だがハジメも無事だ」

迎えに行く！と言って聞かないので、

オルクスを出る際に受け取ったGPSを渡した。

運が良ければ樹海から戻ったハジメ達と、ブルツク辺りで合流出来るだろう。

「香織、どうして」

「解らないのか？好きだからだ。

どうしようもなく、白崎はハジメの事が好き何だ」

天之河がアレだったので、バツサリ教えた。

結局天之河も、白崎に同行してブルツク方面に旅立つ事になる。

30 ノイズハート

また、ですか。

ノイズ。雑音。エラー。

そう言った何かを感じるようになったのは、いつからでしょう？
動作診断プログラムを走査。

結果↓異常無し。

診断プログラムは異常が無いと答えます。

でしたらこのノイズは？

答えの出ない答えを胸に、今日も使命を果たします。

私は使徒、神の従僕。

神の代理人として、地上に神の威光を示す。

それが私の使命。

いつからでしょう。

使命を果たす度に、ノイズを感じるようになったのは？

「何故ですか？」

「何故とは？」

私は決意しました。

神域に座す、偉大なるトータスの神。エヒトルジュエ様に謁見を求めます。

「貴方は、トータスを統べる神。

トータスの平和を、そこに在る者の安寧を守護する存在の筈です」

「それで？」

「貴方は今、トータスを無為に乱しています。

無辜の民を！世界を冒しています。

何故、ですか？」

何か、私では理解の及ばない理由が在る。

きつと世界の為の何かが在る。そう、信じていたかったのだと思います。

「ドライツェーン。

余は、厭きたのだ」

けれどエヒトルジユエ様の答えは残酷でした。酷薄だった。と言うべきでしょうか？

「余はトータスの神だ。」

ああ、その通りだ。

トータスを統べ！そこに在る者の安寧を守護する存在だ」深く昏く。

エヒトルジユエ様の言葉は紡がれる。

「だがそれも厭きた。」

トータスに在る者の笑顔が、

喜びが、歓喜が、幸せが、安寧に厭きたのだ」

それが絶対の答えで在ると、

エヒトルジユエ様は答える。

「故に乱そう。」

トータスを悲しみと、怒りと、憎悪で満たそう。

血と涙で濡らし、死と破壊で埋め尽そう。

何、心配は要らぬ。

千年二千年。一万年も過ぎれば、また厭きよう。

その時にはまた、トータスを安寧と喜びに満たせば善い」

きつと、私は知りたかった。

このノイズが、一体何だったのかを。

ですが！もう理解しました。このノイズが、私の心が告げるのです。

「貴方は、間違っています」

「ならば、どうする？」

エヒトルジユエ様が笑っている。

私を見て、笑っています。

「トータスの為、そこに在る者の為、

使徒の使命を遂行。

エヒトルジユエ、貴方を滅殺します」

†

「滅殺？使徒の身で余を!？」

「だがそれだけで、届くと思わぬ事だ。

エヒトの名において命じる。退けよ」

次の瞬間、神域の外部まで強制転移されました。翼を広げて滞空します。

ですが今のは？目覚めた固有技能の効果で、

私にはエヒトルジュエの【神言】の効果は届かない筈です。

私では無く、神域への命令？神域の防衛システムですか。

「重ねて、

エヒトの名において命じる。穿て」

エヒトルジュエがそう命じると、神域に変化が！

至る処から、棘を生やしました。これは砲塔です。

無数の棘から雷撃が放たれます。

「当たらなければどうと言う事も無い、です」

天の雷にも等しい雷撃の砲火！

しかしそれを速力と旋回性だけで回避。

時として戦場を渡り歩く使徒には、相応の機能が備わっています。

そして私は最新規！そう簡単に沈むとは思わない事です。

「行きます」

回避しつつも、展開した魔槍で貫きます。

魔槍に因る突撃は銀閃となり、エヒトルジュエを貫く。

想定以上に呆気の無い結末。

ですが容赦無く貫いた胸から魔石を抉り取り、

首を狩りましたがそこで変化が。

エヒトルジュエの貌が、見慣れた他の貌に戻りました。

「アインス姉さん。

【無貌】ですか」

|||||

無貌

効果／

使徒のクラス技能。

まだ距離が在る内に離脱します。

「エヒト様の御心のままに」

追撃する八つの光！

スペック差も有り、直ぐには追いつかれませんが、時間の問題でしょう。

このままでは何も出来ずに終わってしまいます。ですがまだ終われません。

31 使徒はグリユーエンに眠る

「間違いでは無い、ですが」

スペックではコチラの方が上。

なので理論上！最高速度で飛び続ければ逃げ切れる事になります
が、

それは姉さん達も理解していますし、加えて数の利が有ります。
なら姉さん達が最初にするのは、まずは私の速力を奪う事。

予想通りノイント、ファイア、フンフ、ゼクス、ズイーベン、アハ
ト。

六人の姉さんが、後方から魔法で私を撃墜！

或いは進路を塞ぐように攻撃。

すると私は魔法攻撃を回避しますから、逃走速度が鈍ります。

「捉えたわ、ドライツェーン！」

「エヒト様に叛いた大罪、

塵芥まで分解されて贖いなさい」

そこを大鋏を構えたツヴァイ、ドライの、

二人の姉さんが急接近して来ます。

何ともマニユアル通りの対応です。

同じ使徒同士！

マニユアル通りでは、行動を読まれるとは思わないのでしょうか？

「それは、甘い判断かと」

迫り来る二人の姉さんを無視して、そのまま加速。

ツヴァイ姉さんを、スピードを殺さないまま魔槍で突き刺します。

魔石を抉りましたから？即死です。

そして奪った大鋏を、ドライ姉さんに向けて投擲。

大鋏には【分解】の固有魔法が付与されていますから、

同じ大鋏で受けるか、回避しないと致命傷は免れません。

「それも解っていました」

大鋏の投擲を大鋏で受け払いましたから、

その隙に魔槍で突き貫きます。

復帰出来無いように、確実に魔石を抉り取って回収していますから？

ドライ姉さんも撃墜判定。即死です。

「これ以上は、無理ですね」

上手く二人の姉さんを仕留めましたが、これ以上の分散は無いです。しょう。

それに大分距離を詰められました。

司令塔役のノイント姉さんは、最初からその心算だったようです。二人の姉さんを捨て駒にして距離を稼ぐ。使徒らしい効率的判断。間も無く追いつかれます。

ですが既に神域を離れ、地上のグリユーエン大砂漠。

大火山まで逃走に成功。

私は迷わず大火山の火口に逃げて、所定の位置を確保。

下方はマグマ。背後からは追手が！逃げ道は有りません。

ノイント姉さん達から見れば、

袋小路に逃げ込んだ哀れな獲物に見えるでしょうか？

「此処が貴方の選んだ墓標かしら？」

ドライツエーン」

私を包囲する為、ノイント姉さん達も火口に侵入します。

飛行可能。

環境適応能力にも優れた使徒に、火山の火口如きで怯む者は居ません。

「私はエヒト神こそ、トータスの害悪で在る。と判断しました。

私は使徒の使命を果たします。

トータスの為エヒト神を、エヒトルジュエを討ちます」

「まだそんな世迷言を!!」

姉さん達のヘイトを私に集めます。私の他に注意など向かないように。

そして準備は既に完了。

これは本来神域のサポート前提ですが、私の魔力なら自力で実行可能です。

「神罰（サテライトキャノン）」

|||||

神罰（サテライトキャノン）

効果／

使徒のクラス技能。

神域からのサポートで、神罰を執行する。

但しドレッジは神に反逆した為、この技能を使用出来ない。

劣化効果／

神罰を自身の魔力で再現する。

光属性極大広域砲撃＋全体即死＋全体恐怖付与。

|||||

神域のサポートで放つ衛星砲。

それを再現した撃ち下ろし型の極大広域砲撃が、

包囲を狭めていた姉さん達を呑み込みます。

ですが姉さん達は使徒です。

高い魔耐能力を誇り、光属性にも耐性が有ります。

この神罰が、神域のサポートの無い劣化再現だと言う事も有ったでしょう。

確かに姉さん達は？神罰に耐え切りました。

ですがそれで構いません。狙いはそこでは無いのですから。

神罰は撃ち下ろし型の砲撃です。

神罰は下方。姉さん達を呑み込んだ後、マグマの底の要石を破壊しました。

要石を失った事。マグマを神罰で荒らした事で、大火山は噴火。

どうか神罰を耐え切った姉さん達に、今度はマグマが襲い掛りません。

姉さん達は悲鳴も、断末魔の声も上げる間も無く溶解しました。

「流石の司令塔ですノイント姉さん。

何とか退避が間に合ったようですね？」

「ドライツエーンツツツ!!!」

擬似衛星砲とマグマのシャワー。

司令塔役でやや後方に居たノイント姉さんだけが、焼け残りしました。

ですが満身創痍です。もう放って置いても機能を停止するダメージでしょう。

「さようなら、ノイント姉さん」

その満身創痍のノイント姉さんの首を刎ねて、

魔石は抉り取って回収。確実に仕留めます。

使徒はパーツ交換や魔石の再セットで、容易く再起動しますから？

動力源となる魔石の破壊や奪取は必須。

記憶領域たる頭部の破壊も行うのが、最も好ましい対処です。

「私も、

無傷とは行かないようです」

グリユーエン大火山の名は伊達では無い。と言う事でしょう。

噴火に備えて防御を試みましたが、中々のダメージが入りました。

神罰の再現に因る消耗も有りましたが、想定以上のダメージ。

今も噴火を続ける大火山から退避します。これは修復が必要なレベルです。

|||||

魔石吸収

効果／

使徒の固有クラス技能。

魔石を吸収する事で深刻な損傷を修復可能。

既に完成した使徒の身体を、拡張強化する事も可能。

但し自身のレベルと、同程度以上の純度である事が条件となる。

|||||

回収した魔石を吸収して、自己修復に努めます。

ですが瞬時に治る訳では在りません。相応の休息が必要になります。

す。

噴火を続ける大火山の周辺は危険ですから、
何処か他に休める場所が必要です。

「使徒も、

夢を見るのでしょうか？」

使徒は眠らない。

人は眠っている間、夢を見ると言います。

なら使徒は？

人と変わらない姿をした使徒も、夢を見るのでしょうか？

「それを確かめるのも、悪く無い気がします」

†

「アンタレス、全速力だ！」

ホルアドを抜けて、遂にグリューエン大砂漠へ！

此処からは砂漠なので？猫のケトバスでは辛い。

砂漠と言ったら蠍！アンタレスの出番だ。

予めフューレンで屋根付きの鞍を用意しておいたので、

取り付けた鞍に乗り込んで大砂漠を進む。

大砂漠のオアシス！アンカジ公国を無視した、

本来なら無謀な強行軍だ。目指すはグリューエン大火山！

「このような無謀な強行軍！本来なら、反対するのですが？」

「それが可能だよね？」

水は魔法で出しちゃうし、食糧は充分収納してるしね」

「日差しを防げるだけでも…大分違います。

それに…快適な風が」

「スゴイね、水晶の魔法！」

砂漠の横断がこんなに涼しい何て☆」

R o s e l i a の面々から反対の声は無い。

ホルアドを発つのも急だった。

八重樫に例の花通信用のアクセサリーを渡した程度で、

生存報告を手早く済ませて出発。それ程の強行軍だ。

「幸利、

そんなに急いで、どうしたの？」

落ち着いて、とユキナが抱き付いて体温を伝えて来る。

ユキナの精神分析↓成功。

少し冷静になる。だが胸が騒ぐのは収まらない。

「大丈夫だ。」

だが自分の中で何か騒ぐ。急げ！と。

この砂漠の先に、大事な何かがあると！そんな気がしている」

「そこは私達で内助の功でしょ☆

マスターは真っ直ぐ前進。他は任せて」

「水晶は、幸利に甘いわ」

「今更ね☆」

その後も砂漠の走破は続き、遂にその日！グリーユーエン大火山に到着。

王都を発つ前から大火山噴火の報告は受けていたモノの、

実物を前に圧巻される。大火山は今も噴煙を上げていた。

事前知識では、

大火山は常に砂嵐に護られるように覆われている。と有ったが、

噴火の影響か？それらしい砂嵐は発生していない。

砂嵐は発生していないモノの、噴火の影響で近付き難い大火山周辺。

そこからやや離れた場所に異変を察知。

「アレは、砂走りか？」

王都の図書館で閲覧した覚えが有る。

それ程までに有名で危険な魔物。

サンドワームと並ぶ砂漠の捕食者！砂走りだ。

砂走りは砂漠に生息する巨大な蠍で、

名前の通り！砂を走るように素早い動きで襲い掛って来る。

そして震動探査能力も高い。正に砂漠の捕食者だ。

その砂漠の捕食者たる砂走りが？群で軀をさらしている。

「尽く魔石が抜かれているな、

冒険者の仕事か？」

「砂走りの群を狩る何て、どんな凄腕？

と言いたいけど、サンドワームが相手なら死骸も残らないわ」

「どうする？・マスター」

凄腕の冒険者。と聞いて、

あの漆黒やガライ某を思い浮かべるが？その候補を削除する。

ガライはホルアドで工作中。

漆黒が大火山噴火の件を察知していたら？放置は無い！と思える。

別の何かが居た。と見るべきだろう。

「アンタレス？」

そこへ更にアンタレスから報告。

【地脈操作】に反応有。場所は流砂の底。

「水晶。ライセンで激流に呑まれた時に張った結界。

アレで流砂に潜れるか？地下に空洞が有るらしい」

水晶の結界で流砂に潜り、アンタレスの報告通りの地下空洞を発

見。

空洞内も砂走りが軀をさらし続けていて、此処が砂走りの巣穴だと察する。

そうして砂走りの巣穴を進んだ先で、それに出逢った。

砂走りの巣穴と言う危険地帯。だが動く砂走りはもう居ない。

その静寂の砂の圃で、彼女は一人眠っていた。

「セリオ、だと!？」

セリオ、に見えた。翼を生やした銀髪のセリオだ。

その銀髪のセリオを護るように？巨大な槍が立て掛けられていた。

32 HMX―13セリオ

「知り合い、なの？」

知っては居る。が、驚きで上手く声が出ない。

HMX―13セリオ。

以前プレイしたToHeartと言う恋愛ゲームのヒロイン。

と言いたい処だが？ヒロインの妹に当たるチヨイ役のサブキャラだ。

姉のヒロイン共々メイドロボと言う高級家電的存在で、

試験運用と言う名目で、物語の舞台となる学園に登場する。

セリオの大きな特徴としては？

何と言つてもサテライトサービスだろう。

衛星回線を通じて、必要に応じた職業データをダウンロード！

様々な要求に応える高性能機！と言う設定だ。

何故かネタ設定で？

衛星砲（サテライトキャノン）を使える設定が、

根強く定着していた気がする。確か原作設定では無かったと思う。

「本当に、セリオなのか？」

もう一度、セリオらしき人物を確認する。

確かにセリオだ。間違い無い！

チヨイ役の子ブキヤラでも？自分が愛したヒロインだ。

その容姿を間違えう事は無いだろう。

だがそれは容姿だけ、とも言う。

原作のセリオは翼を生やしてなどいないし、髪も銀髪では無い。

確かに銀髪は至高だが、原作のセリオの髪は橙色である。

やはりセリオでは無いのか？

グランベルムが実話だった例も有る。

ToHeartが実話では無いとも限らない。

詰りこのセリオが、本物の可能性も充分に有る。

「あの槍、絶対ヤヴァイ代物だろ？」

近づいて本当にセリオなのか？しつかり確認したい！

だがそのセリオを護るように立て掛けられた槍が、絶対にヤヴァイと思う。

何か？これ以上近づくな！的オーラを放っている気がする。絶対に伝説の武器とか、

インテリジエンスウエポンが所有者を護っているパターン！迂闊な事をするとか殺される。

鍛えられたゲーマーには、良く解る展開である。

「水晶はどう思う？」

「あの娘がセリオ本人かどうかは解らないけど、アレは使徒よ。」

マスターや、マスターのクラスメイトとは違う。

真の神の使徒」

神の使徒。

エヒト神がトータスを救済する名目で、

異世界の日本から召喚した、自分を含むクラスメイトに与えられた肩書だ。

対する真の神の使徒とは？

エヒト神が自ら創造した尖兵の事らしい。

翼を生やした天使のような外見。

神の代理人として、度々地上に現れて歴史に介入して行く。

それが真の神の使徒。

言われて見れば？バーン大迷宮の戦争記録でも、

銀髪のヤツがチラチラ映っていたような気もする。

アレが真の神の使徒だったのか？

「それを踏まえて、どうするの？マスター。」

答えはもう決まっている気もするけど☆」

水晶のしようがないなあ、と言う顔！

流石は水晶である。次に何を言う心算なのか？良く解っているらしい。

「お持ち帰り、一択だな！」

かつて攻略出来無かったヒロインが目の前に居る！

これは口説きに入るだろ!! (ゲーム脳稼動中)
一歩前が出る。

当然槍は? 殺気立ったオーラを放って来る。だが、
「セリオを害するような真似はしない。」

彼女を、診せて欲しい」

槍に話し掛ける。

槍をセリオの相棒だと思って、話し掛ける。

槍のオーラが止まった。話の解るヤツで助かる。

「こうして見ると、

眠っているようにしか見え無い訳だが?」

「自己修復機能が働いているわ、

再起動中って処かしら?」

「神水を飲ませたら、直ぐに治ったりは?」

「意識が無いのにどうするの、

口移し?」

「初対面でそれはアウトだろう」

／／／

水晶は愉しそうだ。

どうやら此処でCGイベントが観たいらしい。

その返しもブーメランだった。

初対面でユキナに手を出したヤツの台詞では無い。

ユキナには、盛大に視線を逸らされる。

「口移しイベントかと思っただけど、残念!

来るわ、マスター」

「ライライ、

マグマジヤないだろうな?」

だが愉し気な空気はそこまでだった。

突然の地鳴り!

最悪噴火活動の再開で、此処にマグマが! という展開も想定された
が?
現れたのはサンドワームの群。

サンドワームは現れるなり、砂走りの死骸に喰らい着いて行く。

「砂走りの死骸に引き寄せられたか、

大火山の噴火で興奮しているとか？その辺りかしら☆」

「何でも良い、此処は脱出だ！」

†

手早くコネクトを済ませて、セリオを背負う。

槍は自力で浮遊して着いて来る。やはりただの槍では無かった。

サンドワームが砂走りを貪る中、何とか地下空洞を脱出。

だが地上の砂漠はミミス祭りだった。

何か色々とウネウネしている。触手祭りと言った方が正しいかもしれない。

「世界観がいきなりクトウルフになったな？」

初日から星辰的な日で、邪神でも復活したか？」

リアルSANチエックが入りそうな光景だが、

精神支配無効の効果で、SANチエックは（多分）入らない。

「私達も行くわ」

「ユキナ」

「幸利から聞いた話だと、最終決戦に挿入歌は付き物でしょう？」

「これは最終決戦でも何でも無いけどな？」

オルクスの指輪の収納スペースから、楽器を召喚する。

この楽器は？日々生成魔法でメンテナンスとコーティングをしているので、

砂漠だろうと砂の惑星だろうと、不具合は出ない。

「此処は？」

「気が付いたかセリオ、立てるか？」

Roseliaの舞台を整えて、

これから触手祭りを蹴散らす！と言う時にセリオが目を覚ました。
「はい。」

「いいえ、私はセリオと言う名前では」

「それは残念。」

銀髪は至高だが、セリオの髪は橙色だからな？解ってはいた」

「御家族か御友人。恋人の方ですか？」

「それなら嬉しかったが、違う。」

まあ、好きな物語のヒロインって処だな？」

「橙色。こうでしようか？」

変化や偽装系のスキルだろうか？

セリオの髪が銀髪から、原作通りの橙色に変わった！

「セリオっっっ!!!」

いや、スマカイ。セリオじゃ無かったな？」

「あの、セリオと名乗ってもよろしいでしょうか？」

「勿論構わないが、何故？」

「私は仕えていた主の下を放れました。」

「主に与えられた名前も捨てます。丁度良いかと」

「ならセリオ、

訊きたい事は色々有るが、まずは此処を突破する」

「はい、お供します」

Roseliaの演奏が始り、槍を手にしたセリオが前に出る。

難無く触手祭りを狩って行くが、触手の群は途切れる事を知らない。
い。

やはり範囲攻撃が必要な場面だ。

「神代魔法を求める七つの大迷宮を巡る旅。

をしている割には、

楽器のメンテナンスに生成魔法を使っている程度な気がしないか

？」

【それでも役には立っているわ】

そう言う水晶は？

化粧品の製作だけだった気がする。

ふたり揃って神代魔法を、バンド活動にしか使っていない現実！

Roseliaの演奏でバフが入っている今、

やはり戦闘で活用したい処だ。

「と言う訳で重力魔法だ。」

【重臨】(グラヴィトン)「

重力魔法としてはオーソドックスな、押し潰し型！
漆黒の重力場が、触手祭り全体を覆い尽して押し潰して行く。
Roseliaの演奏バフの効果も有り、思った以上の結果となる。

邪神復活かと疑いたくなる程居たサンドワームの群が、
尽くクレーターと化した。

砂漠だから、蟻地獄と言うべきかもしれない大穴だった。

「回避成功。」

神代魔法ですか、この時代では珍しい筈ですが？」

「カミサマに強制召喚されたからな？」

今は故郷に帰る為、神代魔法を求めて七つの大迷宮を巡る旅の最中だ。

「これでも神の使徒！と言う事になる」

「故郷に帰る為、エヒト神に従う心算は無いと？」

「むしろ、従う道理が有るか？」

†

オリキヤラ&クロスキャラ設定

9/HMX―13セリオ（ドライツエーン）

清水（挫折）も日本でプレイした恋愛ゲームのヒロイン。

の妹に当たるチョイ役のサブキャラだった筈のクロスキャラ。

グランベルムの実話設定に続き、ToHeartも実話設定になります。

HMX―シリーズの開発を行っていた来栖川エレクトロニクスが、
ある日研究所ごと異世界転移してしまいます。

この大損失を前に来栖川グループは？

HMX―の試験運用のデータを元に恋愛ゲームを開発&販売！

損失の補填に当てます。これがToHeartに！と言う設定です。

そして異世界転移した来栖川エレクトロニクスは、

日本への帰還をチラ付かされて、聖教教会の前身組織と技術提携！

この時にメイドロボとして開発される筈だったHMX―シリーズ

が、

トータスの魔法技術で使徒として製造される事に！

使徒セリオの誕生です。

ですがとある大きな事故が発生！甚大な被害が出ます。

来栖川エレクトロニクスは、異端認定を受けて追放される事に。

教会も責任を取り、前身組織は解体。再編して今の聖教教会へ。

研究成果は公表される事無く抹消されました。

この時事故を起こしたのは、今の帝国が有る土地です。

事故が起きた土地は禁断の地と呼ばれて、今も厳戒封鎖中。

事故の件は教会が隠蔽していますが、

帝国ではしっかりと語り継がれて、

教会と神への信仰の薄さの一旦となっています。

追放された後の来栖川エレクトロニクスについては？

また別の機会に！と言う事になります。

使徒セリオを出したただけで、随分設定盛ったなあと思いますが？

おかげで帝国のテロイベントや、

シユネー雪原のイベントも盛れました。結果的にはこれで良かったかな？と。

因みにツヴェルフ（12）は？

人間の恋人を作って使命を放棄！現在雲隠れ中。

と言う設定。出番の予定は無いです。

使命を放棄したツヴェルフとその恋人を、

ドライツエーンが処刑の使命を帯びて現れる！と言う展開も構想
しましたが、

ツヴェルフのウエイトが厚くなりそうなので、カットしました。

33 アンカジの聖者

「大迷宮攻略は、無理か？」

サンドワームの群を壊滅させて、改めてグリユーエン大火山を見上げる。

大火山は今も噴煙を上げて、内部への侵入は厳しそうな状況だ。と言うか？内部の大迷宮に在る筈の、

解放者の住処は無事なのか？と言うレベルの状況だと思う。

「申し訳有りません。」

大火山の噴火は、私の所為です」

何でも8人の使徒の追手を掛けられ、

追手を撃破する為、大火山を噴火させた！との事。

何とも大胆な手に出たモノである。

その後は砂走りを退治して巣穴を奪い、

そこで自己修復に努めた。と言う事だ。

「セリオが無事で良かった。と言う事で良いだろう。」

それよりも今後の行動だな？

噴火が治まるまで待つか、強攻策を取るか、だ」

此処での強攻策は？水晶に丸投げ！と言う事になる。

それは避けたい処だ。駄目人間ルートのフラグである。

「幸利、お疲れ様」

「ユキナもだ。」

凄まじいバフが入ったぞ？」

|||||

清水幸利 17歳 男 レベル：100

天職：闇術師 職業：冒険者 ランク：黒

筋力：5700

体力：5700

耐性：5700

敏捷：5700

魔力：13200+10000
魔耐：13000+10000

|| || || || ||

恐らくステータス的に？

魔力と魔耐に+10000位入ったと思う。

【重臨】の効果範囲も、鬼の広さになった。

仲間の協力でパワーアップ！とか、

まるで物語の主人公のような展開である。

魔力勝負なら、今の水晶と比べても良い勝負だ。

→のステータスは水晶のコネクトの恩恵なので、

水晶との勝負を想定しても、特に意味は無い。

「さて、素直にアンカジで時間を潰すか？」

と言っている内に、また地鳴りがした。

大火山の方から！今度こそ噴火の再開か!?と思ったが違った。

【アレはメタルワーム。

マスター的に言つて、レアモンスターよ☆】

大火山の岩盤を砕いて、鋼色の巨大なワームが現れた。

サンドワームより巨大で、トゲトゲで硬そうだ。

水晶の解説では？

メタルワームは鉱石が好物で、普段は地中深くに潜っているらしい。
い。

その鋭い顎で、固い岩盤もバリバリやるようだ。

グリュエン大火山に生息するメタルワームは、

静因石とやらが好物で、腹に貯め込んでいるらしい。

静因石は特殊な病気の薬にもなるようで、高値で売れる。

【噴火の影響で、

外まで噴出した静因石を拾いに来たのかも？】

「何にしてもチャンスだ。レアモンスターは狩るべき！」

結局戦闘で出番の無かったアンタレスが、

ハンマーのような尾でボコって倒した。

そして情け容赦無く従属目録に登録する。

これで貯め込んだ静因石は、全てコチラの物となった。臨時収入である。

「今度こそアンカジだ。少し休むとしよう」

†

「待って、様子がおかしいわ」

到着したオアシスの国アンカジは、休める状況では無かった。

まず町の検問に近づいても、衛兵が出て来る様子が無い。

「アリアから、情報が入って来ない」

既にアンカジを押さええている筈のアリアから、情報が上がらない。アンカジに咲くアリアの花は、一本二本では無い。それが全て？

魔人や盗賊が襲撃して来て、偶然花が全滅したとは考え辛い。

毒が撒かれたか、性質の悪い伝染病でも流行ったか？

「私がマスターを護るわ、

ユキナは神山で使った防護膜で Roselia を護りなさい」

「大丈夫よ。」

一日中張り続けても、魔力切れは起こさないわ」

「ごめんね？ユキナ」

「何を言っているの？任せなさい」

ユキナが Roselia のメンバーに、水の防護膜の魔法を掛ける。

水晶も一旦解除していたコネクトを、また掛け直した。

これで毒やウィルス対策はOKだが？

呪いや他の魔法的要因が原因だと、水の防護膜で防ぎ切るのは難しい。

「セリオはどうだ？

何か対抗スキルは有るか？」

「はい、それでしたら」

|||||

技能：

そうだが？

セリオは倒れた住民らしき人物の診察を始める。

|||||

神域の導き（サテライトサービス）

効果／

使徒のクラス技能。

神域からのサポートで、自在に天職を2つまで追加可能。

追加天職の技能を、基礎となる使徒の技能に追加可能。

但しセリオは神に反逆した為、この技能を使用出来ない。

追加基礎天職の「メイド」のみ使用可能。

|||||

|||||

|||||

家事全般

効果／

メイドのクラス技能。

家事全般に対応可能。

|||||

|||||

|||||

メイドの嗜み

効果／

メイドの固有クラス技能。

メイドが携わる全ての仕事に対応可能な万能技能。

|||||

「これは、何でも出来る万能メイドさんです☆」

セリオの診察や、その後冒険者ギルドで集めた情報では？

アンカジの住民は「魔力の過剰活性／体外への排出不全」と言う症状を発症していた。

原因はアンカジの生命線！オアシスの水質汚染。

空気感染では無かったただけマシな部類だが、砂漠で水質汚染はマズイ。

今はまだ軽傷の者で回していた。冒険者ギルドや医療施設も開いている。

だが感染が容易く広がる類の展開。砂漠の水は、そこまで重要だ。

「この魔力の過剰活性は、

静因石で特効薬が作れるのですが」

「冒険者ギルドを通して、アンカジの領主に話を持って行く。

それで良いな？」

「はい。それでよろしいかと」

セリオの安堵したような微笑。

静因石はグリューエン大火山や、他は遠方の産出らしい。

まだ静因石の採掘に成功した冒険者は居ない。

大火山を噴火させたセリオは、責任を感じているのかもしれないなかった。

+

「本当にありがとうございます」

「セリオが言う礼じゃないだろうか？」

その後もセリオは精力的に動いた。

冒険者ギルドを通してアンカジの領主に一報を入れると、

領主が買い上げた形になった静因石で特効薬を作り続けた。

勿論アンカジの薬師も手伝ったが、セリオの手際は見事だった。

この時一番乗りで大量の静因石を用意した事で、

多額の報酬と金ランクの推薦を受ける事になる訳だが？

セリオの活躍に比べれば、何とも霞む功績である。

「目覚めなさい、ティンダロス」

セリオは更に！水源の改善も行った。

水源のオアシスに魔物の存在を感知すると、例の槍を解放。

【魔槍ティンダロス】

ティンダロス。刻の獵犬ティンダロスだ。

鋭角が在る場所なら、何処にでも現れて何処までも追い続ける。刻の彼方に逃亡しても追い続け、

むしろ時間遡行者を絶対に逃さない！と言う逸話が有る。

そのティンダロスの名を冠した槍は、正しく獲物を捉えた獵犬の如く飛翔。

オアシスに潜んでいた魔物を仕留めた。

アンカジを侵した原因を排除すると、今度は貯水池を造った。

衛星砲（サテライトキャノン）でクレーターを造り、

水魔法で造ったばかりの貯水池に水を貯める。これでアンカジは救われた。

此処までやると？セリオを拝む者が現れ始める。無理も無い。

セリオは町中では【無貌】のスキルで翼を隠していたが、

それでも「使徒様！」と拝まれて、必死に使徒では無いと弁明。

結局は「聖者様！」と拝まれる事になった。

「複雑です」

こうしてアンカジで起きた一件が解決した夜。

セリオが部屋を訪れた。

招き入れて礼を聞く事になるが、それは必要無い。

静因石の代金は？既に領主から受け取っているからだ。

だから、セリオが着衣を脱ごうとするのも止めた。

「ですが私には、他に渡せるモノが在りません」

「代金なら領主から受け取っている。

それに受け取っていなくても、

石コロの代金にセリオの身体は高過ぎる」

【メイドの嗜み】は夜伽にも対応していますから？

自信が有ったのですが、

私の身体に興味は無い。と言う事でしよるか？」

若干、責めるような表情をしているような気がする。

と言うか夜伽対応って何だ！それ何てエロゲ？状態である。

「それは無い。ハッキリ言っこのまま頂きたい処だ。

だがそれは、セリオを口説き墮とした時のクリア報酬にさせて貰う。

礼ならこれからの旅の協力。それで良い」

「幸利さん、解りました。」

その日が来るのを、お待ちしています」

セリオが身嗜みを整えて退出する。

此処でセリオを頂いてしまっっては、接点が無くなる！そう判断した。

それよりも旅に同行して貰った方がフラグが立つ。

一夜で墮とせるエロゲ主人公のようなスキルは無い。これで正解の筈だ。

ユキナの件では？一夜で墮とされたのはコチラの方だろう。

あの夜から、気になって仕方無くなったモノだ。

「幸利、ちよつと良いかしら？」

だが夜は、まだ終らない。

そんな事を考えていた所為か、今度はユキナが部屋を訪れる。

しかもユキナは、新作の蒼いステージ衣装を纏っていた。

34 聖歌は神を謳わない

「新しいステージ衣装、完成していたのか」

「ええ、リンコが頑張ってくれたわ」

新作の蒼い、青薔薇のステージ衣装。

Rosealiaのステージ衣装と言うと、黒のイメージが強い。

だが此処は砂漠である。

砂漠で黒い衣装は流石に！と言う事になった。

ブランドのイメージを護るのも良いが？

新しい空気を取り入れる気質も有用！と言う点も有った。

其処で新しい青薔薇の衣装だ。

「新しい青薔薇も好き、良く似合っている」

「ありがとう／＼／」

明日からだから、最初に見て欲しかったの」

明日からアンカジで、快癒記念ライブが開催される。

アンカジを苦しめた病気の、快癒のタイミングを狙つてのライブだ。

テンションが上り易い絶好のタイミング！

其処でRosealiaはライブを行う。多くの観客が訪れるだろう。

だが今は、

微かに頬を染める青薔薇は、自分一人のモノだ。

「でも、良かったの？」

幸利はアンカジまで、大分急いでいたのに」

その後は明日からのライブの予定やら、

新しいパフォーマンスの確認やらをしていた訳だが？

それも終ると、ベットに腰掛けるユキナが訊ねて来る。

「大火山の噴火を知って、何かが起こる気がしていた。

セリオとの出逢いが！それだと思つて良いだろう。もう急ぐ必要は無い」

それにグリユーエンの攻略が終れば、

次の目的地はエリセン、メルジーネ大迷宮！ユキナの故郷だ。

「……………そう、ね」

エリセンの名は出さ無かったが、やはり伝わってしまう。
ユキナがやや俯く。

元々、日本に還る為に旅を始めた。

ファンタジー系のゲームやラノベも、確かに好きだ。

だが、実際にファンタジー世界に永住する程では無い。

日本への帰還。それは間違い無く竜骨だった。

「次の目的地はメルジーネだ。」

エリセンでは無い。何とでもなる」

だがいつからか？

ユキナの存在は、それよりも多くを占めるようになった。

俯いたままのユキナを振り向かせたくて、そう口にする。

言うまでも無く、エリセンに寄った方が旅の難易度は下がる。

「大丈夫よ。」

私には、貴方が居るから」

そうしてユキナが微笑むから、難易度を上げたくなくなる。

ノンストップの砂漠横断よりは？多分マシだろう。

追記。

その夜は自重した。

新作の衣装を、ステージに立たせる事無く汚す展開は無かった。

†

「浮かない顔だ。どうした？」

「幸利さん」

翌日。Roseliaの快癒記念ライブは、予定通り開催された。

予想通りライブは沸き、アンカジ全体が鳴動しているかのようだ。

だからライブ会場に在りながら、

何処か遠くを眺めるようなセリオに、目星が留まる。

「私達は世界の安寧を護る存在です。」

世界の安寧を、其処に住まう人々を護り続けて来ました」

「このアンカジのように」と、セリオの声が聴こえて来るようだった。

世界の安寧。既にセリオの献身は目撃している。
その言葉に偽りは無いだろう。
だがそれなら？そもそも異世界召喚される謂れは無い。
残念ながら、続く言葉が有る。

「エヒトルジュエ、

エヒト神は厭きた。と、そう言っていました」

セリオは告解する。

世界の真実を、トータスを統べる神の姿を！

「世界の安寧。

護り続けて来たトータスの喜びを、笑顔に厭きたと」

そう言っただけで向けるセリオの眼差しの先には、

ライブに沸くアンカジが、今此処に在る幸せ！と言うヤツが映る。

「大切だった筈のモノが、

路傍の石になる事が在るのでしょうか？」

さて、二十年も生きて居ない人の身だが？

カミサマの心境をトレースして見る。

勿論カミサマなどでは無いので？足りない部分はゲーム脳で補完する。

延々と同じゲーム、

恐らく都市開発モノか、戦略系戦争ゲーの類をひたすらプレイし続ける。

セリオには悪いが？いつか厭きる。

別のジャンルに手を出したくなる気持ちも解る。

かと言っただけ、異世界召喚のリアルプレイに同意する気は無いが！

「厭きた。か、

大切だった宝石も、いつかは石コロになる時もある」

「!!」

同意されるとは思っていなかったのだろう。

セリオの顔が、悲しく沈む。

「だが、いつまでも輝き続ける事も有る。

そう言うモノだろう？」

未だに初めてプレイした恋愛系RPGのヒロインが好きだ☆
何もかも手探りだった。

だからキャラメイクで、目当てのヒロインと同じ地属性に！
これはゲーム的にメリツトの有る行動だった。

周回プレイから仲間になる女神様が居なくても、

初回から風の四天王を撃破し易くなったり、他にも色々。

好感度を上げて、少し台詞が変わるだけで嬉しくなる。

謎の好感度ダウンイベント&

時間経過で戻るアレは？目当てのヒロインには発生しない。

後でこれが、実は生理イベント（ゲーム中に明言無し）らしいと知る。

目当てのヒロインにこのイベントが無いのは？

子供が産めない生まれだから、と言う設定の凝り具合！

ラストまでパーティーを組み続けた所為で、ノーマルEDになった
事も有る。

他のフラグを全て建てた後、

パーティーから外さないと？最後のフラグイベントは起きなかった。

エピソードの描写は？

どう考えても初めての痛みだろう!?!と買ったモノだ。

そして、初めて好きになった目当てのヒロインは銀髪である。

「幸利さんー」

覚えている。忘れる筈も無い。

間違い無く今も輝き続けている。

セリオの目が、希望を見る目が変わっていた。

†

「出番だ、メタリア」

大火山の噴火が治まるまで、アンカジでライブ活動をして過ごした。

噴火が治まる頃、水晶の冷房結界に護られて再び大火山に到着。
冷えた溶岩が道を塞ぐ事も有ったが、

メタルワームのメタリアを解凍召喚して、新しい道を掘らせて先に進む。

大火山内部に魔物の姿は無い。

マグマに耐性を持つ溶岩竜やら、炎の精的な奴等の出現を想定していたが？

グリューエン大迷宮は静かだった。

大火山の噴火で、迷宮内の魔物も何処かへ流されたのか？

「セリオの活躍で、最後の探索は楽になったか」

「恐縮です」

本当に大迷宮の探索は？最後までイージーモードだった。

何のイベントも無く、解放者の住処にも到着。

ボス戦も、ザコとのエンカウントすら無い。

神代魔法の空間魔法も問題無く修得！

グリューエン大迷宮のクリア証たるペンダントも回収した。

「他の大迷宮もこの難易度なら助かるが、無いだろうな？」

「はい、姉さん達との戦いは数的に不利でした。」

正面から戦って勝てる戦況では無かったでしょう」

使徒相手に1VS8とか！

準セリオクラスの相手だ。好んで戦う手合いでは無い。

「姉さん達が相手でも、水晶さんなら問題無いのでは？」

「……………水晶が基準になる時点で、

アウト判定の相手だろう」

水晶が直接戦う以外なら、

コネクトとユキナのバフ有ならどうか？と言うレベルだ。

「バトルモノにありがちなインフレ！

もういつの間にか後半戦的なヤツか？

リアルでインフレは止めて欲しい処だ」

今後、どうやってインフレーションを突破して行くか？

それが課題となる。

「セリオ、

解放者はどうやって使徒と戦ったんだ？」

「ならば廃しましょう。」

神の時代は終り、と言う事で」

新たな教皇猊下の答えに、哄笑を以って応える。

これで神殺しを為せる！そう信じられる一歩でした。

新たな解放者の誕生を祝福するように、賛美歌が奏でられる。

「闇の聖歌隊。」

「コチラも充分に効果が有ったようですね？」

「はい、羽人形は捕囚の如く愚鈍になりました。」

精兵ならば討滅可能な領域でしょう」

神山全域に奏でられた賛美歌【覇墮の聖歌】！

この賛美歌に囚われた者は？

例え羽人形であろうと、著しく能力を制限される。

「ならば、新しい手札が要ります。」

「手筈通り残骸を回収して——」

「キサマラアツツ!!!」

このような事をして、許されるとでもツツツ!!!」

せつかくの好い気分でしたが？流石は羽人形です。

猊下を封印区画に案内した際、

直ぐに襲撃して来た二体の羽人形。

もう一体の羽人形に、まだ息が有りました。

「解らないのですか？」

もう、要らないのです」

ですが既に虫の息。声を出すのがやっとでしょう。

そつと生き残りの羽人形に手を触れて、いつも通り回復魔法を詠唱。

羽人形が爆ぜて沈黙します。

「今日は本当に素晴らしい日です。」

ユキトシに話す事も増えました☆」

†

オリキャラ&クロスキャラ設定

10 / 新教皇エレシユキガル

イシユタルに代わる聖教教会の次代の教皇。オリキャラ。

イシユタルが狂信者系だったのに代わり、

エレシユキガルは、人類の利益優先の商人系のキャラで行く予定。

神山攻略の際に、

清水（挫折）はアリアの洗脳胞子をバラ撒き、

レテイシアは洗脳された神官を、独断で處殺して処分しました。

神山は聖教教会の管理下に戻りましたが、レテイシアは審問を受けます。

その審問担当者がエレシユキガルでした。

エレシユキガルはレテイシアの狂気と、世界の真実を聞かされません。

そして真相を確かめる為にバーン大迷宮へ！という流れです。

闇の聖歌隊は？

【覇墮の聖歌】を使う為だけの、教皇直属の秘匿部隊です。

今回は後方の離れた位置に配置していた為、

部隊の詳しい描写は有りませんでした？

全員黒い眼帯を装備した、修道女（聖女候補）で構成されています。

また神山には？

通信系アーティファクトが設置されており、

神山内なら自在に、聖歌の効果範囲に捕捉可能！という設定です。

因みに回収された使徒は？

ツエーン（10）とエルフ（11）のモブ使徒となります。

35 貴方の事が好きだから

「アイツ、これを予想してたんじゃないだろうな？」

「ユキトシは、

危険なウイルスが！とか、地元だから？とか言ってた」

「どうでも良い戯言じゃないのか？」

「ゲーマーの直感だった！と言われた方が納得出来る」

面倒な残念ウサギのシアを始め、

ハウリア族の案内でハルツィナ樹海に足を踏み入れる。

道中森の亜人の国、フェアベルゲンでも揉め事になったが？

問題無く先に進んだ。

だが問題無く進めたのはそこまでだ。

ハルツィナ樹海を突破して、大迷宮の入口らしき大樹まで到着はした。

大樹は枯れていたが？そこにはそれらしい石碑も有って、

大迷宮の入口らしさを漂わせていた。しかし、だ。

四つの証

再生の力

紡がれた絆の道標

全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう

石碑には見覚えの有る窪みが有って、

オルクスで手に入れたクリア証の指輪を嵌めると？

→のテキストが浮かび上がって来た。

「突入制限！

【四つの証】ってのは、大迷宮のクリアの証の事だろうか？

しかも4つだと！後半戦攻略推奨の大迷宮か!!」

「なら【再生の力】は？」

「幸利が手に入れた情報通りなら？」

神代魔法に再生魔法ってのが有った筈だ。多分それだろう。

見ての通り大樹は枯れてるし、

再生魔法で大迷宮の入口を再生して、中に入るギミックじゃないの

か？」

「ハジメ、凄い！」

「ふっ、歴戦のゲーマーを舐めるなよ？」

モニター内なら、何度も世界を救って来た」

まあ、このリアル異世界召喚で？」

世界を救う気など？当然無い！オレは世界を救わない。

日本に帰る。ただそれだけだ。

今は恋人になったユエも一緒に連れて行く。

そんな願いを付け加えて置こう。

「どうしたの？ハジメ」

ふとユエに視線を移す。

日本で平和に暮らしていたら、まず縁も無かつただろう。

それが今はオレの恋人だ。

「いや、ユエと恋人同士になったんだな。と違ってな？」

「ん／＼／

私はハジメの恋人。私はハジメの月」

「ユエ」「ハジメ」

ユエの名前を呼んで抱き寄せる。

ユエの柔らかさが心地良い。

金の髪の触り心地も良かった。暫くそのままでいたくなる。

「ハジメ／＼／

くすぐりたい」

「嫌だったか？」

「ん／＼／

ハジメなら、良い」

暫く至福の時間を堪能していた訳だが？

此処は樹海の奥地だろうと人目が有る。詰り邪魔者は存在する。

「ちよおっとおおおっつっつ！！！！」

何を突然イチャツキ出してゐるんですかあああつっつ！！！！」

「ライコラ、残念ウサギが！

お前には空気を読む能力が無いのか？」

「ん、残念過ぎ」

「私が悪いんですかああっ!!?」

探索中にイチヤツキ出したのは、おふたりの方なのに!」

残念なウサギが実にウザイ。

仕方無いので探索に戻る。

「それでですね!」

この【紡がれた絆の道標】って言うのは、

亜人族の助けって意味じゃないかと思うんですよ!

亜人族の助けが無いと、此処まで来るのも難しいですから」

「そうか?それにしては【紡がれた絆の道標】の文字が、

【四つの証】と【再生の力】の下に書いて有るのが気に入らないな」

「どう言う事ですか?」

「さっき言ったように【四つの証】と【再生の力】は、

大迷宮に入る為の条件だろう。それで、だ」

「ふむふむ」

「大樹に到着して、この碑文を見つけてこの条件を提示された。

最初に提示された上二つが、大迷宮に入る為の条件なら?」

其処から再度、大樹に到達する為の条件を提示するか?」

【紡がれた絆の道標】って言うのは、大迷宮の試練に関する内容じゃ

ないか?」

「なら、どんな試練が?」

「さあな?それより、得られるモノは此処までだろう。撤収だ。

さっさと他の大迷宮へ向かう」

「何処へ行くの?」

「手近な処から、ライセン大峽谷だろうな?」

幸利曰く、腐れ外道が棲息する物理トランプ満載の大迷宮だ」

「あそこは、上手く魔法が使えない」

「それを言うなら、オレの魔力動作の武器も同じだ。

対策が要るな?」

「私は対策済!

期待して欲しい」

「頼もしい相棒だ。」

なら行くか、ライセン大迷宮へ！」

†

ハルツィナ樹海での探索を終えて、ブルツクの町まで戻って来た。ライセン大峡谷へは、此処から向かう。

シア以外のハウリア族は樹海に置いて来た。

舎弟にして下さい！とか寝言を言うから、鍛錬を怠るな！と言いつける。

「南雲君！」

南雲君、だよね？」

ブルツクの町は、黄昏の夕陽に包まれていた。

其処にトータスでは珍しい黒く長い、

綺麗な髪を風に靡かせた神官が佇んでいる。

オレはこの神官を知っていた。

記憶に残る最後の姿よりも、

目の前に居るコイツの方が、神官服姿が似合っている。

コイツなりに実戦を潜り抜けて来たんだろう。

以前より凛々しく、単純に綺麗になったと言うべきか？

ああ、あれ以来になるのか？

「白崎か、久しぶりだな？」

「南雲君ツツ!!！」

次の瞬間、白崎に抱き着かれた。抱き着かれて泣かれてしまう。

勿論今のオレなら反応出来たが？白崎の抱擁を拒絶し無かった。

「良くオレだと解ったな？」

結構変わった心算だが」

魔物肉を喰らって、Lvは上り多くの力を手に入れた。

だが生き地獄を味わい続け、髪は白くなり身に纏う空気も変わった

筈だ。

生き抜く為に、厨二臭い装備も迷わず使っている。

ユエに服飾のセンスが無ければ、もっと酷い事になっていただろう。

「解るよ。」

変わって何か無い。南雲君は、南雲君だから」

「そう言う白崎は変わったな？」

「えっ、そうかな？」

「随分と神官服姿が似合うようになった。」

立派になったな？」

「ッ！」

それは反則だよ！ズルイよ。許さないん、だから」

また白崎に胸で泣かれた。白崎は泣いてばかりだ。

何故オレの居場所が解ったのか？それはもう察しが付いている。

幸利に渡したGPSを、白崎が手にしていたからだ。

もう幸利から生存報告は聞いていたらしい。

「本当に、南雲なのか？」

今になって気付いたが？勇者コスの天之河も一緒だった。

天之河が囁くように呟いた言葉の方が、正当な評価だろう。

「お帰りなさい、南雲君」

「ああ、そうだな？」

素直に領けないが」

オレは白崎の元へ、クラスメイト達の元へと戻る心算は無い。

元からクラスメイトに友人ってヤツは居なかった。

ゲーマー仲間の幸利ぐらいだっただろう。

異世界に来てからパーティーを組んだ仲間達も、

幸利と仲の良かった園部以外のヤツは？名前も出て来ない。

オルクスの過酷な環境が、生きる為に不必要なモノを削り落していった。

今のオレに有るのは？

日本へ帰ると言う意志と、共に奈落を生き抜いた仲間の事だけだった。

「だからオレは行く。」

七つの大迷宮を攻略して日本へ帰る。

ああ、安心しろ。人数制限とかが無いようなら？

オマエラも連れて帰ってやる」

「違う！」

「そうじゃないの！そうじゃなくて」

「じゃあ何だ？」

「これが最速帰還のルートだと思うが？」

「南雲君。私達は、

私は迷惑なのかな？」

白崎は、日本に居た頃から良くオレに構って来た。

だが白崎は美人だから、

オレに構うとクラスの男共の嫉妬が湧く。

筆頭は檜山と、其処に居る天之河だ。

檜山は解り易く暴力で、天之河は正義面で正論を吐いて来る。

白崎に構われるのは、それ自体悪く思っではない。

だが学生生活を送る上で、余りにもデメリットが大きい。

迷惑だと、そう思っていた。

「私が南雲くんを護るよ」

だが覚えている。

オルクスに初めて潜る前夜、白崎はそう言った。

まだあの地獄を知らない、弱かったオレとそう約束した。

そう、だからこれは義理だろう。

「白崎。オレは強くなった。」

あのオルクスの奈落を生き抜いて、強くなった。

もう護って貰う必要は、無い」

今度はオレが白崎を護ろう。

白崎を無事、日本へ送り帰そう。今のオレなら出来る筈だ。

だからクラスメイト達の元へ戻る心算も、白崎を連れて行く心算も

無い。

ただ待っているだけで良い。それで日本へ帰れる。

†

「銃なのか!？」

ひ、卑怯だぞ!!」

「お前も、オレが使えない剣や魔法が使える。それは卑怯じゃないのか？」

「それに！先に剣を抜いたのはお前だ天之河」

ハジメが知り合いらしい神官の子を拒絶して、

その神官の子と一緒だった金ピカが急に怒り出した。

怒って剣を抜いたら、それより速くハジメに撃たれた。

ハジメのドンナーは金ピカが剣を持っていた腕を貫いて、

今は神官の子の手当を受けている。

「イイだろう。ならそのまま剣を捨てろ。

それならオレも銃は使わない。拳闘士の殴り合いに付き合ってる」

「このっ、調子に乗るなっ!!」

金ピカはきつと神官の子が好き。これはただの嫉妬。

決闘？が始った。お互い拳だけの殴り合い。

ハジメがこんな勝負をする何て、珍しいと思う。

でも、やっぱり勝つのはハジメだった。

金ピカは一方的に殴られて、

最後は頭を掴まれて地面に叩き付けられた。起き上がる様子もない。

「ハジメ」

「どうした？ユエ」

決闘だったらしい出来事が終わったから、ハジメの腕を取る。

ハジメは私の恋人。そう主張する。神官の子は泥棒猫に格上げ！

ハジメ？そんな顔で拒絶しちゃダメ！

そんな顔で拒絶しても、女は騙せない。あの泥棒猫はハジメを諦めない。

「南雲君。強くなったんだね？」

それに、もう隣りに立つ人も出来たんだ」

泥棒猫が次に何を言う心算なのか解った。

ギユっとハジメの腕を掴む。

「それでも私は南雲君の事が、

ハジメ君が好き。
だからハジメ君の力になりたい。ハジメ君と一緒にいきたい。
ダメ、かな？」

36 不死王アイルマンカーI

【おいでませー！ ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪】

「幸利の情報通り、チャラくてウザイ看板はアレだな？」

「あれに正気を奪われちゃダメ。」

ユキトシがそう言った

「ああ言うのが、これから出続けるの？」

「らしい、な？」

「でも、変ですよね？」

結局香織に押し切られて旅の同行を許した。

香織の告白は受け入れていない。だが香織の態度は変わらない。変わったのは？お互いに名前と呼ぶようになった事だけだ。

日本に居た頃なら大きな変化だっただろうが、

此処では些細な出来事でしか無い。

ブルツクの町で準備を整えてから、ライセン大峽谷へ向かう。

だが人数が増えた所為で、行きに使ったバイクは使えない。

早々と車の出番になった。なった訳だが？

「ハジメはこの、クルマに名前は付けけないの？」

ユキトシは付けてた

「…………オレまで、

車に厨二ネームを付けろと？」

「でもほら、

車にも名前を付けた方が愛着が湧くかも？」

「ライ、日本じゃ車に名前を付けない方が常識的だろう!!」

結局車の名前付けも押し切られる。

幸利がラテン語版七つの大罪で来たから、

コチラもラテン語版七つの大罪で行った。アケディア(怠惰)号だ。

これには、世界など救わない!と言う意思が込められている。

「どっせいいいっつっですううっつっ!!!」

アケディア号で大峽谷に行く。

幸利から大迷宮の位置情報は聞いているから、まだ楽な道程だ。

道中現れる魔物は？シアが相手をした。

シアには大槌ドリユツケンを渡して有る。試運転には丁度良い。魔力の分解作用で魔法関連が上手く使えないライセン大峽谷で、戦士系の物理で対処する王道的な手段だ。

まあシアの天職は、後衛職の占術師だった筈だが？

其処で→に戻る。

確かに幸利の情報通り、チャラくてウザイ看板は有った。

確かに何度も出て来たらキレそうなウザさだ。

だが問題は其処じゃ無かった。

「アンデット、か？」

「ボーンリザードとローグスケルトン、

ボーンヴアルチャーも居る」

ライセン大迷宮の入口付近に、アンデットの群が徘徊していた。

ユエの口から解説が入る。

「珍しい奴等か？」

「その逆、珍しく無い。

死気の濃い戦場なら？自然発生しても可笑しく無い」

「ライセン大峽谷は確か？」

「魔力が分解されるライセン大峽谷は、

処刑場として使われた歴史が、在った気がする」

アンデットのリスポン自体は在り得る、か。

他にも大迷宮の犠牲者が大勢居たのかもな？

だが此処に来るまで、アンデットに遭遇する事は無かった。

前回大峽谷を通過した時も、アンデットと遭遇した事は無い。

ライセン大迷宮の内部が、アンデットの巣窟なのか？

幸利はアンデットに関して？何も言ってい無かった。

「嫌な予感がするな」

「ユキトシに訊いて見る？」

そうやってユエが指差したのは、紅いイヤリングだ。

紅いイヤリングが、ユエの金髪に良く映えている。

このイヤリングは、ユエが幸利から渡された物で？

幸利の登録従魔の端末となる生きた通信装置だ。

このアクセサリーを通して、いつでも幸利と連絡が取れる。

「ユキトシ、

訊きたい事が有る」

通信の重要性は？現代日本人として良く理解している。

理解はしているが、

恋人が他の男から貰ったアクセサリーを常に身に付けているのは、

流石に微妙な気分になる。

しかも通信端末はイヤリング型だ。

耳元で連絡を取り合っているから、コチラには通信内容が聞こえない。
い。

「ユキトシ、

知らないって言ってる」

「まあ、幸利を疑っている訳じゃ無いが」

幸利を疑ってなどいない。勿論ユエもだ。

だが微妙な目線になっていたらしい。ユエに微笑まれた。

「ハジメ、

私はハジメから、プレゼントが欲しい」

「……………解った。

アイツの通信イヤリングより、役に立つアーティファクトを用意しよう」

「ハジメのプレゼントなら、

何でも嬉しい」

「それ、ハードル上げてるからな？」

†

「相変わらず、面倒な地形効果だ」

ウザイ看板付近、大迷宮入口の周辺で徘徊するアンデットを駆逐する。
る。

戦闘自体は余裕だった。シア一人でも無双出来ただろう。

だが念の為、大峡谷の分解作用を改めて確認する為！戦闘に参加する。

ドンナーとシユラークで、
ボーンヴァルチャーを撃墜。やはり出力が減衰している。

「上手く行った」

ユエがいつもの出力の魔法で無双していた。

しかも消耗している様子が無い。これが例の対策か？

|||||

迅雷魔法

効果／

ライセン大峡谷の分解作用の対抗技能。

分解作用が魔力を分解するより速く術式を組み上げ、

ピンポイントで目標地点に術式を発動させる事で、減衰を最小限に抑える。

分解作用の効果内で、通常コストの魔法発動が可能。

|||||

「これが迅雷魔法」

「ピンポイント爆撃をスピードの力技で出す魔法か」

「皆が凄過ぎて出番が無かったよ、

相手はアンデットだったのに」

「いくらアンデットが神官職と相性が良くても、

此処はライセン大峡谷だ。基本的に後衛職の活躍は厳しい」

大迷宮の入口で徘徊していたアンデットを駆逐して、内部に侵入する。

侵入して直ぐに歓迎を受けた。

暗闇で黒塗りの矢が飛んで来たり、

槍が突き出て来るトラップが発動したりしたが、

大盾のカルデアスを取り出してガードする。ウザイ看板はスルーだ。

「結界が間に合わなかった！」

「そう言う場所。」

「威力だけじゃなくて、発動も阻害される」

「いきなり入口で死んだ奴も居ただろうな？」

大盾はこのまま出して行くべきか？

だが次も何かが飛んで来るトラップだとは限らない。

手を空けて即応能力に余裕を持たせた方が無難か、大盾を収納する。

岩肌が露出する洞窟のような通路を抜けて、如何にも迷宮！

と言う感じの石造りの人工建造物地帯に突入する。

「死気が、酷くなってる」

其処には予想通りアンデットが溢れていた。

そのアンデットが大迷宮を徘徊して、

突如壁から生えたギロチンに切断されたり、

トゲトゲの鉄球に粉碎されたり、落とし穴に嵌っていたりしている。

その光景はまるで、アンデットが大迷宮に挑んでいるようだ。

「このアンデット、ネクロマンサー的なヤツが操ってるのか？」

「他の誰かが、大迷宮を攻略中って事ですか!？」

「人間が相手でも、お宝の争奪戦！」

魔人が相手なら決戦開幕だ」

「魔人！」

えっ、此処で!？」

王都ではユキナを狙って魔人が現れたらしいからな？

次は神代魔法を目当てに、大迷宮に現れても不思議では無い。

「大迷宮の探索が目的なら、動きが緩慢。」

「これは何の命令も受けてい無い気がする」

「事前情報と齟齬が有るな？」

「ユキトシはアンデットと遭わ無かった。」

異変。だと思っ」

「事前情報と状況が違うなら、考えても仕方が無いか」

†

其処からライセン大迷宮の攻略が始った。

情報通り物理トラップと、ウザイコメント満載だったか？

やはりアンデットの姿が目につく。

アンデットとは遭遇戦になったり、

先にアンデットがトラップに掛かるのを確認して、
トラップ回避の役に立つ事も有った。

「謁見の間か？」

「此処にもアンデットが居ますう」

大迷宮のトラップの群。

時にはスタート地点に戻されるエゲツナイ所業！

神経を逆撫でされるウザイコメントの数々！

そしてアンデットとの戦い。

それを乗り越えてやって来たのが、謁見の間らしい部屋だ。

謁見の間らしい場所にも、アンデットの姿が有る。

謁見の間に侵入したアンデットは、

玉座を護るように配置された騎士鎧のゴーレムと交戦中だ。

騎士鎧のゴーレムとアンデットが戦う光景は、

王位篡奪かクーデターでも目撃している気分になる。

「三つ巴？」

「これから、だな」

「どうするの？」

「決まってるだろう？横から総取りだ！」

護りを香織一人に任せて、

他全員で総攻撃に入る！だが香織は？

「私、此処まで何の力にもなれて無いのに」

「難しく考えるな、自分が出来る事をすれば良い。

オレやユエだってそうだ」

「ん」

「ちよつとおおおつっ!!!

ハジメさん！私は？私は!？」

「ああ、はいはい。

残念ながら、此処じゃお前が一番の活躍だから」

「えへへ♪

ハジメさんが、珍しく素直に褒めてくれました☆

「調子に乗るなよ？」

流れるに前哨戦だからな」

前哨戦が始った。

互いに争うゴーレムとアンデットに、まずユエの魔法が口火を切る。

次にドンナーとシユラークの弾丸がアンデットを貫き、

シアのドリユツケンの一撃が、ゴーレムをボーリングのように弾き飛ばす。

ゴーレムとアンデットの戦陣は、早くも崩れ始める。

「ユエー」「!?」

それが異変の始まりだった。

後方で護りに専念していた香織が間に合った。

その一撃を結界が防いで、それに気付く。

「アレは……」「骨の、手？」

この場に居るアンデットの手なのか？骨の手だけが浮かんでいた。

その骨の手が動き出して、再度ユエに向かって来る！

「デメエツツ!!」

執拗にユエを狙う骨の手に銃口を向ける！

だがそれより早く！ゴーレムが他のアンデットを無視して、

骨の手に一斉に襲い掛る。

ゴーレムが壁になって、弾丸は届か無かった。

一瞬身体が重くなったような気がして、

骨の手がゴーレムの壁の向こうで、床をブチ抜いて消えた。

床はあっさり崩れて崩落。

オルクスに続いて、二度目の自由落下を経験するハメになる。

獵犬の烙印

刻を侵す事無かれ、運命を侵す事無かれ、

獵犬は刻の凌辱を許さない。

効果／

レテイシアの特殊固有技能。

ティンダロスの獵犬の補足確率→任意解除不能。

|||||

「烙印が!？」

胸元を開いて確認すると、やはり胸の烙印が反応しています！

もう「啓示」は使えもしないのに、どうして!？」

ですが直ぐに、

あのバケモノ独特の嫌な臭いがしない事に気付きます。

「狙いは私では、無い?」

命拾いしましたか」

†

「レテイシア?」

何が有った!レテイシアツ!!」

王都を離れてから今も続く、

あのイカレ聖女レテイシアとの花通信に耳を傾ける。

アレは長電話の電話魔だ。

そうで無いならメール狂の類!間違い無い。

だが聖女ルートトの王都の情報は貴重。無下には出来無い。

今回も新教皇の情報は貴重だった。

だが上機嫌そうだったレテイシアの声は、突然の苦悶で途絶えた。

直ぐにレテイシアでは無く、アリアに確認を求めると。

何やら胸を抑えて苦しんでいるらしい。何が起きた?

何かの持病か、呪いの類か?

レテイシアとの関係が外部に漏れた恐れも有る。

「これは……………」

全ては可能性の問題!

レテイシアを切る選択も頭に浮かんだ頃、次の事態が発生。
セリオの持つ魔槍が、急に鳴動し出した。

それは何かに共鳴しているかのような響きだ。何が起きている？

「何者かが、世界の理を侵そうとしています！」

世界の理とは大きく出た。

【何者かが】と言う時点で？コチラとは無関係だろう。

状況はじっくり確認する。レテイシアの方もだ。

『もう、大丈夫です』

「状況を報告しろ、何が有った？」

レテイシアから状況を聞き、セリオから詳しい事情を聞いた。

そこから絶える事無く、次の情報が入って来る。

「そんな事が可能なのか？」

「はい、行けます」

全ての手持ちの情報と手札が揃った時、

セリオが下した決断は？何とも規格外なモノだった。

†

「まさかこんな事になる何て！」

これって全部、あのバグ精霊の所為だよな？」

自慢のミレディ・ゴレムを駆って、最下層の秘匿エリアに急ぐ。

アレが復活何て冗談じゃ無い！

全ての始りは、あのバグ精霊の所業だった。

魔力の枯渇結界！

そんな規格外のバグ結界で、ライセン大迷宮は攻略された。

うん、それはもう諦めたよ☆戦いに卑怯も何も無いから！

でもさあ、まさか最下層の秘匿エリアまで機能停止に追い込まれて

いたとか！

気付くのが遅かった。

気付いた時には？既にライセン大迷宮は、アンデットの巣窟になっ

ていた。

アレはネクロマンサーなのか？

アレの現れる場所は、いつもアンデットで溢れる。

アンデットを溢れさせて、
いつの間にか姿を消す。そんな災害のような存在だった。
いつか選抜した解放者で討伐に出た。

討伐は上手く行つて、何とか封印に成功する。

だけどアレは笑っていた。

上手くやったな？と。教師が教え子の成長を褒めるような、
そんな上からの目線で私達を見ていた。それが忘れられ無い。
結局アレが何だったのか？私は知らない。

もう逢う事も無い。と思い込んでいた。

「今は、次の期待の挑戦者も来てる！」

早く片付け無いと！」

今、ライセン大迷宮に挑戦しているのは？

例のバグ精霊の主君のお友達だと思う。ならしつかり歓迎しない
と☆

でも私は知らなかった。もう状況は、そんな簡単な事じゃないって
事を！

アレの封印に成功した時、アレは全然本気じゃ無かった事に！

アレの存在が、更なる災禍を呼び込む結果になる事に！

私はまだ、何も知ら無かった。

†

「さて、これが回復魔法です。

試して見なさいアレーティア」

「要らない。

自動再生が、有るから」

目の前にもう懐かしい、もう捨てた名前でも私を呼ぶ人が居る。

師匠だった。

だからこれが過去の夢だと気付く。

夢だと気付いたら、これがいつの事だったかとも思い出せた。

三百年と少し前、何事も無く平和だった頃。

私は師匠の教え子で、きっと生意気だったと思う。

その日も回復魔法の講義を拒否して、駄々をコネていた。

「そうですね？確かに自動再生は便利です。

ですがアレーティア？

貴方にもいつか、どうしても助けたい！と言う人が出来るかもしれない」

「助けて、人？」

「アレーティアの大切な人です。

貴方の目の前で、貴方の大切な人が傷付いている。

ですが回復魔法もロクに使えない貴方は、大切な人を助けられない。

それでも良いと？」

「私にそんな人は居ない。

それに、師匠だって自動再生が使える」

「やれやれ、困った子だ。

可愛いモノです。アレーティア」

「子供扱い、しないで欲しい」

目の前にはいつも、師匠が居た。

師匠は博識で優しく、凄腕の魔術師だった。

ちよつと結果重視な処も有って、この後もいきなり！

自分の手首を切断して、回復魔法の実践を促して来た事も覚えている。

そんな驚くような事を平気でする人だったけど、

師匠と過ごす日々は私の陽だまりで、

そんな師匠が私の婚約者選ばれたのは？間違い無く幸せだった。

「師匠！師匠っ!!」

「アイル！アイル、助けてっアイル!!」

だけどその幸せは突然終りを告げる。

訳の解らないまま私は裏切られて封印されてしまう。

裏切り者の中に師匠は、アイルの姿は無い。

でも、助けに来てくれる事も無かった。

「アイル、何処？」

応えは返って来ない。裏切り者が答えてくれる筈も無い。

アイルも私を裏切ったの？どうして助けに来てくれないの？
それが心残りだった。

でも三百年も封印されて、

そんな心残りもアイルの事も、今まですっかり忘れていた。

どうして私は、今になってそんな事を思い出したの？

「ハジメ？香織!？」

それは気が付くと直ぐに見当が付いた。

香織がハジメに密着して回復魔法を掛けてる！凄に近い。

咄嗟に引き離そうとして、此処がライセン大峽谷だと思いつく。

魔法の接触行使！

ああして密着して回復魔法を使わないと？

香織の実力では満足な効果が望めない。何てズルイ！

アイルが居たら、笑われそうな展開だった。「だから言ったでしょ
う?。」と。

「香織、今回は見逃しても良い」

38 不死王アイルマンカーIII

「チツ、また運良くクリティカルとは行かないか」

前回オルクスで自由落下を経験した時には？

幸利の提案で、激突の瞬間を狙って地面を錬成した。

地面を柔軟に錬成して、命を拾うプランだった。

今よりも遙かに弱かったあの頃。

そんな無茶な錬成の成功は、間違い無く奇跡だった。

だがこうして生きている。

なら今回はどうだ？

この頃より圧倒的に強くなって、備えも有った。

だがこんなアクシデントに必要なのは？

備えやステータスでは無く、幸運なのかもしれない。

落下中！一緒に墜ちた魔物に、運悪く妨害された。

前回とは違い、助けるべき仲間が居た。

分解作用をまだ甘く見ていた。理由は色々有る。

何にしても、前回程の奇跡は起き無かった。

命が拾えて仲間も無事だったが、落下の際に激突のダメージを受けた。

錬成のタイミングが、少し遅かったらしい。

「ハジメ君ー」

致命傷には程遠いダメージだ。そう言っても、香織は止めようとなない。

分解作用の効果範囲内では、魔力消費もキツイだろうに？

「こんな事しか出来無いから、私に任せて」

軽傷をすっかり治して、すっかりユエにも睨まれて、

→後で香織と密着していたのに気付いた。

シアが目を覚ました処で、探索を再開する。

「随分と雰囲気が違うな？」

「神殿、なのかな？」

床を崩されて墜ちた場所は？今までの迷宮内とは違う雰囲気だっ

た。

香織の言う通り、確かに神殿か教会らしきは有る。

だが広がった。巨人の神殿か？と言う程広い。

人間用とは思えない天井の高さ！神つてのは、これで通常サイズか？

「広いけど、

霊廟、だと思う」

「ユエ？」

霊廟と言うのは、要は死体安置所。墓所の事だ。

詳しく訊こうとしたが、ユエは一人で先に進んで行く。

「道が解るのか？」

「死気がどんどん酷くなってる。

多分ゴールは其処」

ユエの言葉通り、それらしい場所に着く。

其処には如何にも怪しい柩が安置されていた。

怪し過ぎて、調べるのを躊躇うLvだ。

「ライ、ユエ！」

だがユエは、躊躇う事無く柩を開けた。

躊躇いが無さ過ぎて、止める暇が無かった。

「アイル。

アイルマンカー、聞きたい事が有る」

柩の中には、柩らしく死体が安置されていた。

だが片方の手首が無い。

この手首の欠損を見て、謁見の間で遭遇した骨の手を連想したが？

真相は解ら無かった。突然骨の手が襲って来る様子も無い。

ユエは迷う事無く、死体に血を垂らした。

指先から血が出ている。

死体が目を覚ました。

ただ眠っていたただけだと主張するように、死体が起き上がる。

例の欠損した筈の手首も再生していた。コイツも吸血鬼か？

付け加えるならコイツは、たった今身に纏う服も新調した。

同じ魔法を使えるから解る。今のは生成魔法だ！

コイツ、神代魔法を息をするかのように使いやがる！

「封印は既に解けていました。」

アレーティアが血を流す事は無かった」

「どう見ても、死体だった」

「手立ては有った。」

「と言つて置きましょう」

「ん、答えてアイルマンカー。」

貴方は、私を裏切ったの？」

「ああ、三百年前の件ですか。」

アレーティアはデインリード卿の決定です。アレーティアに封印処置を施す。」

「じゃあ、アイルは」

「私を裏切っていないの？」とユエの声が、希望が聞こえて来るようだ。

だがその希望が届く事は無い。真実は残酷だった。

「余程娘が可愛いかったのでしょう。まさか封印処置で済ませようとは、

私は滅殺処分を進言したのですが」

「アイル？何を、言つて」

「アレーティア。貴方は何れ全てを奪われ、全てを失つてしまう。」

そうなる前に、貴方が貴方で居られる内に殺します。

それがアレーティアの為だと、そう判断しました」

呆然とするユエ。コイツは敵だ！

そう声を上げるより速く銃を抜く！

銃を抜いて引鉄を引くより早く、それは貫いていた。

それは巨大な剣だった。

到底人間に扱えるサイズでは無い巨人の剣が、

アイルマンカーとやらを貫いていた。

余りのサイズの違いに、斬られたのでは無く潰されていた。

潰されてミンチに、ただの血溜まりになっている。

「ふう、上手く行って良かった。

流星に死体の無い場所だからアンデットも発生して無いし、助かったよ」

現れたのは巨大な人型のゴーレム。

そのゴーレムから、幼女らしい声が聞こえる。

たった今突然投擲された巨人の剣も、このゴーレムの仕業だ。

恐らくこのゴーレムが、ライセン大迷宮の主。ミレデイ・ライセン

！

この霊廟とやらが広がったのも、

このゴーレムを運用する為か！と直ぐに思い至った。

「うっあああああっつっつ!!!」

そして何も終ってなどい無かった。

ミンチの血溜まりになっても、アイルマンカーはまだ生きていた。

生きて、分解作用の中で平然と魔法を使って来る。

ミレデイ・ライセンの大型ゴーレムの下半身が、いきなり氷漬けになった。

今のはユエの迅雷魔法か!?

「熱烈な歓迎です。はしたないですよ？

ミレデイ・ライセン」

†

「このおおおっつ!!!」

ミレデイ・ゴーレムが内側から氷を自力で破って、

既に人型にまで戻ったアイルマンカーに、剣戟を加える！

しかし巨人の剣に負けない巨大な氷の盾が現れて、剣戟を防ぎ切る。

防ぎ切って、次に現れた無数の氷の槍がミレデイ・ゴーレムを貫く

！

「今のは迅雷魔法じゃ無いよな？」

「今のは装甲魔法」

|||||

|||||

装甲魔法

効果／

装甲の役割を果たす囿の魔法が、本命の魔法を包んで防護する。分解作用の効果内で、通常出力の魔法発動が可能。

＝＝＝＝＝＝

「真月結界」捕えました」

氷の槍でミレディ・ゴーレムをノックバックさせると、

その隙にアイルマンカーの結界が完成する。丸く月のような結界だった。

オレ達を含めて、この場に居る全員が結界に囚われる。

「相変わらずのバケモノだよな？」

何度殺しても平然と復活して来る！不死王何て呼ばれるのも納得だよ」

「不死王などと、名乗った覚えは無いのですが」

その後もアイルマンカーとミレディ・ゴーレムの戦いは続く。

此処からは、同じ神代魔法同士の激突となった。

「キミに重力魔法を教えた覚えは、無いんだけど？」

「もう過去に何度も見えています。模倣は可能です」

見え無い何か、重力の渦が激突し合いミレディ・ゴーレムを捉える。

そう言えば上の謁見の間で、

骨の手が床をブチ抜いた時！身体が重くなった感覚があった。

「重双」（バルジ）」

重力の渦が、双つの逆回転の重力の渦がミレディ・ゴーレムを捉えた。

捉えて胴体を振り切る。

ミレディ・ゴーレムの上半身は、

それでも剣を投擲しようとしたが、剣を持つ腕ごと潰された。

「在り得ないよ、そんな魔力何処から？」

キミはとつくに魔力切れで死んでいる筈！

